

四国縦貫自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

30

相知遺跡

2 0 0 5

徳 島 県 教 育 委 員 会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日 本 道 路 公 団

四国縦貫自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

30

相知遺跡

2 0 0 5

徳 島 県 教 育 委 員 会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日 本 道 路 公 団



調査地上空より吉野川下流域を望む（西から）



3区 屋敷地1完掘状況（南から）

# 序 文

本書は四国縦貫自動車道建設に伴い、当センターが平成8年度に実施致しました三好郡井川町西井川に所在する相知遺跡の発掘調査の成果を報告書にとりまとめたものでございます。

遺跡は吉野川南岸に面しており、古代の掘立柱建物跡群とそれに伴って石製巡方などが出土し、律令制下の吉野川上・中流域を語る上で大きな成果としてあげられます。これまで遺跡が少ないとされてきた井川町において改めて貴重な考古学資料を得られたと思います。

そしてこの報告書が皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となり、さらに研究・教育の場においてご活用頂ければ幸いです。

なお発掘調査そして報告書作成にあたり、日本道路公団および関係機関、ならびに地元井川町の皆様に多大のご援助、ご尽力を頂きました。ここに深く感謝の意を表すとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます

平成17年9月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
理事長 佐藤 勉





- 11 写真図版は、遺構については各調査担当者が撮影を行い、遺物については植地岳彦・山本和弘の協力のもと田川憲が行った。
- 12 本調査および本報告に関する遺物、図面、写真は徳島県立埋蔵文化財総合センターに保管してある。
- 13 本書の執筆はⅠ－Ⅰを菅原康夫、Ⅳを白石純、それ以外を田川が担当し、編集は田川が行った。

# 凡 例

- 1 本書に掲載された遺構は基本的には下記のようにした。ただし、大型遺構に関しては随時縮尺を変更しまた例外もあるので、各遺構図にはスケールを添付した。

掘立柱建物跡（SA）：1／100

土坑（SK）：1／25

溝（SD）：1／25、1／40、1／50、1／60、1／400

自然流路（SR）：1／40、1／400

不明遺構（SX）：1／25

柱穴・小穴（SP）：1／25

- 2 遺物実測図は原則として下記のように縮尺を統一した。ただし、遺物によっては随時縮尺を変更しているため各実測図にはスケールを添付した。

土器・陶器・磁器：1／3、1／4

石器：1／3、2／3

石製品：1／2


土製品：1／2

鉄器：1／3

銭貨：1／1

- 3 本報告書の遺物実測図で断面白抜きは弥生土器・土師器・陶器・磁器、細かい網掛けは須恵器、粗い網掛けは瓦器を表す。

また、内外面にある網掛けは以下を示している。

：赤色塗彩      ：煤付着

- 4 遺物出土状況図で土器は●、石器および石製品、礫は▲で示した。

- 5 掘立柱建物跡の計測部位に関しては、以下のようにして行った。

- ・相対的に長さの長い方を桁行、短い方を梁間とする。
- ・柱間寸法は柱痕跡が確認できなかったものについては柱穴掘りかたの中心間の距離を計測した。
- ・主軸方位は、桁行の方向を主軸とする。計測方法は梁間の柱間寸法を二等分し、その点を通る直線と真北との角度を計測した。

# 本文目次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経緯	3
2	調査の経過	9
(1)	調査の経緯	9
(2)	発掘の方法	9
(3)	調査日誌抄	11
II	遺跡の立地と環境	
1	地理的環境	15
2	歴史的環境	16
III	調査成果	
1	基本層序	25
2	遺構と遺物	29
(1)	弥生時代	46
	土坑	
	自然流路	
	溝状遺構	
	性格不明遺構	
	小穴・柱穴	
	包含層出土遺物	
(2)	古代	66
	掘立柱建物跡	
	土坑	
	溝状遺構	
	不明遺構	
	小穴・柱穴	
	包含層出土遺物	
(3)	中世	121
	掘立柱建物跡	
	土坑	
	溝状遺構	
	性格不明遺構	
	小穴・柱穴	
	包含層出土遺物	
(4)	近世	157



包含層出土遺物

3 まとめ . . . . . 161

IV 自然科学分析

相知遺跡出土土器の胎土分析 . . . . . 169

# 挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	7	第48図	3区	包含層出土遺物実測図(2)	62
第2図	相知遺跡調査区位置図	8	第49図	3区	包含層出土遺物実測図(3)	63
第3図	グリット配置図	10	第50図	4区	包含層出土遺物実測図	63
第4図	調査地点および周辺の地形図	14	第51図	5区	包含層出土遺物実測図	64
第5図	周辺の遺跡	17	第52図	6区	包含層出土遺物実測図(1)	64
第6図	基本土層図(1)	26	第53図	6区	包含層出土遺物実測図(2)	65
第7図	基本土層図(2)	27	第54図	7区他	包含層出土遺物実測図	65
第8図	基本土層図(3)	28	第55図	3区	SA1001遺構平・断面図	67
第9図	相知遺跡遺構配置図(1~3区全体)	31	第56図	3区	SP1334遺構平・断面図	67
第10図	相知遺跡遺構配置図(4・5区全体)	33	第57図	3区	SP1336遺構平・断面図	67
第11図	相知遺跡遺構配置図(6・7区全体)	35	第58図	3区	SP1336出土遺物実測図	67
第12図	相知遺跡遺構配置図(3区弥生時代)	37	第59図	3区	SP1366遺構平・断面図	68
第13図	相知遺跡遺構配置図(4・5区弥生時代)	38	第60図	3区	SP1366出土遺物実測図	68
第14図	相知遺跡遺構配置図(6区弥生時代)	39	第61図	3区	SP1369遺構平・断面図	68
第15図	相知遺跡遺構配置図(3区古代)	40	第62図	3区	SP1369出土遺物実測図	68
第16図	相知遺跡遺構配置図(4・5区古代)	41	第63図	3区	SA1002遺構平・断面図	69
第17図	相知遺跡遺構配置図(6区古代)	42	第64図	3区	SP1298遺構平・断面図	69
第18図	相知遺跡遺構配置図(1・2区中世)	43	第65図	3区	SP1298出土遺物実測図	69
第19図	相知遺跡遺構配置図(4・5区中世)	44	第66図	3区	SP1338遺構平・断面図	70
第20図	相知遺跡遺構配置図(6区中世)	45	第67図	3区	SP1338遺物出土状況図	70
第21図	1区 SK1003遺構平・断面図	46	第68図	3区	SP1338出土遺物実測図	70
第22図	1区 SK1003出土遺物実測図	46	第69図	3区	SA1003遺構平・断面図	71
第23図	3区 SK1014遺構平・断面図	47	第70図	3区	SP1323遺構平・断面図	72
第24図	3区 SK1014遺物出土状況図	47	第71図	3区	SP1323出土遺物実測図	72
第25図	3区 SK1014出土遺物実測図	48	第72図	3区	SP1326遺構平・断面図	72
第26図	5区 SK1035遺構平・断面図	49	第73図	3区	SP1326出土遺物実測図	72
第27図	5区 SK1035出土遺物実測図	49	第74図	3区	SP1349遺構平・断面図	72
第28図	6区 SD1008土層断面図	50	第75図	3区	SP1349出土遺物実測図	72
第29図	6区 SD1008出土遺物実測図(1)	51	第76図	3区	SA1004遺構平・断面図	73
第30図	6区 SD1008出土遺物実測図(2)	52	第77図	3区	SA1005遺構平・断面図	74
第31図	3区 SR1001土層断面図(1)	53	第78図	3区	SP1165遺構平・断面図	74
第32図	3・4区 SR1001土層断面図(2)	54	第79図	3区	SP1165出土遺物実測図	74
第33図	3・4区 SR1001出土遺物実測図	55	第80図	3区	SP1210遺構平・断面図	75
第34図	3区 SP1104遺構平・断面図	56	第81図	3区	SP1210出土遺物実測図	75
第35図	3区 SP1104出土遺物実測図	56	第82図	3区	SA1006遺構平・断面図	76
第36図	3区 SP1153遺構平・断面図	56	第83図	3区	SP1180遺構平・断面図	76
第37図	3区 SP1153出土遺物実測図	56	第84図	3区	SP1180出土遺物実測図	76
第38図	3区 SP1356遺構平・断面図	58	第85図	3区	SP1190遺構平・断面図	77
第39図	3区 SP1435遺構平・断面図	58	第86図	3区	SP1190出土遺物実測図	77
第40図	3区 SP1484遺構平・断面図	58	第87図	3区	SP1207遺構平・断面図	77
第41図	6区 SP1930遺構平・断面図	59	第88図	3区	SP1207出土遺物実測図	77
第42図	6区 SP1930出土遺物実測図	59	第89図	3区	SP1201遺構平・断面図	77
第43図	6区 SP1997遺構平・断面図	59	第90図	3区	SP1201出土遺物実測図	77
第44図	6区 SP1997出土遺物実測図	59	第91図	3区	SP1275遺構平・断面図	78
第45図	1区 包含層出土遺物実測図	60	第92図	3区	SP1275出土遺物実測図	78
第46図	2区 包含層出土遺物実測図	60	第93図	3区	SP1507遺構平・断面図	78
第47図	3区 包含層出土遺物実測図(1)	61	第94図	3区	SP1507出土遺物実測図	78

第95图	3区	SP1508遺構平・断面図	78	第145图	3区	SX1004遺物出土状況図	103
第96图	3区	SP1508出土遺物実測図	78	第146图	3区	SX1004出土遺物実測図	103
第97图	3区	SA1007遺構平・断面図	80	第147图	3区	SP1151遺構平・断面図	104
第98图	3区	SP1182遺構平・断面図	80	第148图	3区	SP1151出土遺物実測図	104
第99图	3区	SP1182出土遺物実測図	80	第149图	3区	SP1160遺構平・断面図	104
第100图	3区	SP1186遺構平・断面図	81	第150图	3区	SP1160出土遺物実測図	104
第101图	3区	SP1186出土遺物実測図	81	第151图	3区	SP1167遺構平・断面図	104
第102图	3区	SA1008遺構平・断面図	82	第152图	3区	SP1171遺構平・断面図	105
第103图	3区	SP1202遺構平・断面図	83	第153图	3区	SP1171出土遺物実測図	105
第104图	3区	SP1202出土遺物実測図	83	第154图	3区	SP1172	
第105图	3区	SP1290遺構平・断面図	83			遺構平・断面・遺物出土状況図	105
第106图	3区	SP1290出土遺物実測図	83	第155图	3区	SP1172出土遺物実測図	105
第107图	3区	SA1009遺構平・断面図	84	第156图	3区	SP1173遺構平・断面図	107
第108图	3区	SP1242遺構平・断面図	84	第157图	3区	SP1173遺物出土状況図	107
第109图	3区	SP1242出土遺物実測図	84	第158图	3区	SP1173出土遺物実測図	107
第110图	3区	SP1270遺構平・断面図	85	第159图	3区	SP1192遺構平・断面図	108
第111图	3区	SP1270出土遺物実測図	85	第160图	3区	SP1192出土遺物実測図	108
第112图	3区	SP1274遺構平・断面図	85	第161图	3区	SP1200遺構平・断面図	108
第113图	3区	SP1274出土遺物実測図	85	第162图	3区	SP1200出土遺物実測図	108
第114图	3区	SA1010遺構平・断面図	86	第163图	3区	SP1202遺構平・断面図	108
第115图	3区	SA1011遺構平・断面図	86	第164图	3区	SP1209遺構平・断面図	108
第116图	3区	SA1012遺構平・断面図	87	第165图	3区	SP1251遺構平・断面図	108
第117图	3区	SP1120遺構平・断面図	87	第166图	3区	SP1271遺構平・断面図	110
第118图	3区	SP1120出土遺物実測図	87	第167图	3区	SP1271出土遺物実測図	110
第119图	6区	SA1013遺構平・断面図	88	第168图	3区	SP1277遺構平・断面図	110
第120图	6区	SP1866遺構平・断面図	88	第169图	3区	SP1277出土遺物実測図	110
第121图	6区	SP1866出土遺物実測図	88	第170图	3区	SP1284遺構平・断面図	111
第122图	2区	SK1013遺構平・断面図	89	第171图	3区	SP1372遺構平・断面図	111
第123图	3区	SK1019遺構平・断面図	90	第172图	3区	SP1372出土遺物実測図	111
第124图	3区	SK1019出土遺物実測図	90	第173图	3区	SP1503遺構平・断面図	111
第125图	3区	SK1020遺構平・断面図	90	第174图	3区	SP1503出土遺物実測図	111
第126图	3区	SK1020出土遺物実測図	90	第175图	6区	SP1616遺構平・断面図	112
第127图	6区	SK1039遺構平・断面図	91	第176图	6区	SP1619遺構平・断面図	112
第128图	6区	SK1039出土遺物実測図	91	第177图	6区	SP1735遺構平・断面図	112
第129图	6区	SK1049遺構平・断面図	91	第178图	6区	SP1745遺構平・断面図	113
第130图	6区	SK1049遺物出土状況図	92	第179图	3区	SP1745出土遺物実測図	113
第131图	6区	SK1049出土遺物実測図	92	第180图	6区	SP1754遺構平・断面図	113
第132图	6区	SK1050遺構平・断面図	93	第181图	3区	SP1754出土遺物実測図	113
第133图	6区	SK1058遺構平・断面図	94	第182图	2区	包含層出土遺物実測図	114
第134图	6区	SK1058遺物出土状況図	94	第183图	3区	包含層出土遺物実測図(1)	114
第135图	6区	SK1058出土遺物実測図	94	第184图	3区	包含層出土遺物実測図(2)	116
第136图	3区	SD1001土層断面図	95	第185图	3区	包含層出土遺物実測図(3)	117
第137图	3区	SD1002土層断面図	95	第186图	4区	包含層出土遺物実測図	118
第138图	3区	SD1003土層断面図	96	第187图	5区	包含層出土遺物実測図	118
第139图	3区	SD1003出土遺物実測図	96	第188图	6区	包含層出土遺物実測図(1)	118
第140图	4区	SD1005遺構平・断面図	98	第189图	6区	包含層出土遺物実測図(2)	119
第141图	3区	SX1002遺構平・断面図	99	第190图	6区	SA1014遺構平・断面図	120
第142图	3区	SX1003遺構平・断面図	100	第191图	6区	SA1015・SG1001	
第143图	3区	SX1003出土遺物実測図	100			遺構平・断面図	122
第144图	3区	SX1004遺構平・断面図	101	第192图	6区	SP1763遺構平・断面図	122





## 表 目 次

第1表 四国縦貫自動車道(脇～美馬・美馬～川之江)	第27表 出土遺物観察表 土器(7) …………… 201
埋蔵文化財調査地一覧表 …… 6	第28表 出土遺物観察表 土器(8) …………… 202
第2表 相知遺跡検出遺構数一覧表 …………… 29	第29表 出土遺物観察表 土器(9) …………… 203
第3表 相知遺跡土器胎土分析結果一覧表 …………… 173	第30表 出土遺物観察表 土器(10) …………… 204
第4表 検出遺構一覧表 掘立柱建物跡 …………… 177	第31表 出土遺物観察表 土器(11) …………… 205
第5表 検出遺構一覧表 土坑(1) …………… 178	第32表 出土遺物観察表 土器(12) …………… 206
第6表 検出遺構一覧表 土坑(2) …………… 179	第33表 出土遺物観察表 土器(13) …………… 207
第7表 検出遺構一覧表 土坑(3) …………… 180	第34表 出土遺物観察表 土器(14) …………… 208
第8表 検出遺構一覧表 溝 …………… 180	第35表 出土遺物観察表 土器(15) …………… 209
第9表 検出遺構一覧表 自然流路 …………… 180	第36表 出土遺物観察表 土器・陶磁器(1) …………… 210
第10表 検出遺構一覧表 不明遺構 …………… 181	第37表 出土遺物観察表 土器・陶磁器(2) …………… 211
第11表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(1) …………… 182	第38表 出土遺物観察表 土器・陶磁器(3) …………… 212
第12表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(2) …………… 183	第39表 出土遺物観察表 土器・陶磁器(4) …………… 213
第13表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(3) …………… 184	第40表 出土遺物観察表 土器・陶磁器(5) …………… 214
第14表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(4) …………… 185	第41表 出土遺物観察表 土器・陶磁器(6) …………… 215
第15表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(5) …………… 186	第42表 出土遺物観察表 陶磁器(1) …………… 216
第16表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(6) …………… 187	第43表 出土遺物観察表 陶磁器(2) …………… 217
第17表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(7) …………… 188	第44表 出土遺物観察表 鉄器 …………… 217
第18表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(8) …………… 189	第45表 出土遺物観察表 石器・石製品 …………… 218
第19表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(9) …………… 190	第46表 出土遺物観察表 土製品 …………… 219
第20表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(10) …………… 191	
第21表 出土遺物観察表 土器(1) …………… 195	
第22表 出土遺物観察表 土器(2) …………… 196	
第23表 出土遺物観察表 土器(3) …………… 197	
第24表 出土遺物観察表 土器(4) …………… 198	
第25表 出土遺物観察表 土器(5) …………… 199	
第26表 出土遺物観察表 土器(6) …………… 200	

## 写 真 図 版 目 次

巻頭図版 調査地上空より吉野川下流域を望む

(西から)

3区 屋敷地1完掘状況(南から)

図版1 調査地上空より吉野川上流を望む(東から)

調査地上空より吉野川を望む(南から)

図版2 1・2区完掘状況(南から)

3・4区完掘状況(北から)

図版3 5区完掘状況(南から)

- 6区 完掘状況 (南から)
- 図版4 6区 調査前状況 (西から)  
1～5区 調査前状況 (南東から)
- 図版5 1区 完掘状況 (南西から)  
1区 完掘状況 (北東から)
- 図版6 2区 完掘状況 (南東から)  
3区 完掘状況 (北西から)
- 図版7 4区 完掘状況 (南東から)  
5区 完掘状況 (北西から)
- 図版8 6区 完掘状況 (西から)  
7区 完掘状況 (北から)
- 図版9 6区 SD1008完掘状況 (南から)  
6区 SD1008完掘状況 (東から)  
6区 SD1008土層断面 (東から)
- 図版10 3区 SK1014遺物出土状況 (北から)  
3区 SR1001遺物出土状況  
3区 SP1104遺物出土状況 (南東から)
- 図版11 3区 SP1153遺物出土状況 (南から)  
3区 屋敷地1 完掘状況 (東から)  
3区 SA1001完掘状況 (北から)
- 図版12 3区 SA1001 (SP1366)  
根石出土状況 (北から)  
3区 SA1002完掘状況 (西から)  
3区 SA1003 (SP1326)  
遺物出土状況 (南東から)
- 図版13 3区 SA1004完掘状況 (南から)  
3区 SA1005 (SP1219)  
遺物出土状況 (南から)  
3区 SA1009 (SP1242)  
遺物出土状況 (南西から)
- 図版14 3区 SA1012完掘状況 (北から)  
6区 SK1048・1049遺物出土状況 (北から)  
6区 SK1049遺物出土状況 (東から)
- 図版15 6区 SK1048・1049完掘状況 (北東から)  
6区 SK1058遺物出土状況 (南東から)  
6区 SK1058完掘状況 (東から)
- 図版16 3区 SD1001完掘状況 (北から)  
3区 SD1003完掘状況 (南から)
- 3区 SD1002・1003  
切り合い土層断面 (南から)
- 図版17 4区 SD1005完掘状況 (東から)  
3区 SX1004完掘状況 (南から)  
3区 SX1004遺物・炭化物  
出土状況 (西から)
- 図版18 3区 SP1172遺物出土状況 (北西から)  
2区 SP1056遺構半掘状況 (南から)  
3区 SP1231遺物出土状況 (南から)
- 図版19 3区 SP1307遺物出土状況 (南から)  
3区 SP1360遺物出土状況 (南から)  
4区 包含層 遺物出土状況
- 図版20 6区 屋敷地3 完掘状況 (南から)  
6区 SA1015 (SP1807)  
遺物出土状況① (南西から)  
6区 SA1015 (SP1807)  
遺物出土状況② (南西から)
- 図版21 5区 SK1034遺物出土状況 (西から)  
6区 SK1038遺物・炭化物出土状況 (南東から)  
3区 SD1004完掘状況 (南西から)
- 図版22 4区 SP1552遺物出土状況① (西から)  
4区 SP1552遺物出土状況② (北から)  
4区 SP1552完掘状況 (北から)
- 図版23 5区 SP2009遺物出土状況 (南から)  
6区 SP1600遺物出土状況 (東から)
- 図版24 3区 SK1014 出土遺物  
6区 SD1008 出土遺物 (1)
- 図版25 6区 SD1008 出土遺物 (2)  
3区 SR1001 出土遺物  
3区 SP1104 出土遺物  
3区 SP1153 出土遺物  
6区 SP1997 出土遺物
- 図版26 包含層 出土遺物 (1)
- 図版27 包含層 出土遺物 (2)
- 図版28 古代の遺物
- 図版29 3区 (SA1001) SP1366 出土遺物  
3区 (SA1001) SP1369 出土遺物  
3区 (SA1002) SP1298 出土遺物

	3区 (SA1002) SP1338	出土遺物	図版32	3区 SP1271	出土遺物
	3区 (SA1003) SP1323	出土遺物		3区 SP1372	出土遺物
	3区 (SA1003) SP1326	出土遺物		6区 SP1745	出土遺物
	3区 (SA1005) SP1210	出土遺物		6区 SP1754	出土遺物
	3区 (SA1005) SP1165	出土遺物		包含層	出土遺物 (1)
	3区 (SA1006) SP1507	出土遺物	図版33	包含層	出土遺物 (2)
	3区 (SA1006) SP1508	出土遺物	図版34	包含層	出土遺物 (3)
	3区 (SA1006) SP1275	出土遺物		6区 SP1807	出土遺物
	3区 (SA1007) SP1186	出土遺物		5区 SK1034	出土遺物
図版30	3区 (SA1008) SP1290	出土遺物		6区 SK1036	出土遺物
	3区 (SA1009) SP1242	出土遺物 (1)	図版35	6区 SK1038	出土遺物
	3区 (SA1009) SP1242	出土遺物 (2)		1区 SP1015	出土遺物
	3区 (SA1009) SP1270	出土遺物		4区 SP1532	出土遺物
	3区 (SA1009) SP1274	出土遺物 (1)		4区 SP1552	出土遺物
	3区 (SA1009) SP1274	出土遺物 (2)		6区 SP1600	出土遺物
	3区 (SA1012) SP1120	出土遺物	図版36	6区 SP1605	出土遺物
	3区 SK1019	出土遺物		6区 SP1614	出土遺物
	3区 SK1020	出土遺物		6区 SP1980	出土遺物
	3区 SK1049	出土遺物		包含層	出土遺物 (1)
	3区 SK1058	出土遺物	図版37	包含層	出土遺物 (2)
図版31	3区 SX1004	出土遺物	図版38	包含層	出土遺物 (3)
	3区 SP1160	出土遺物	図版39	包含層	出土遺物 (4)
	3区 SP1171	出土遺物	図版40	包含層	出土遺物 (5)
	3区 SP1172	出土遺物	図版41	包含層	出土遺物 (6)
	3区 SP1173	出土遺物			

## 写真目次

写真1	発掘作業風景	11
写真2	ヘリコプターによる空撮風景	11

I 龍耳の秘訣





## 1 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道第10次区間（脇～美馬間）の路線延長は11.7kmで、昭和63年5月18日施行命令が出され、昭和63年6月17日に路線発表された。当該区間については県教育委員会文化課（現文化財課、以下県教育委員会と呼ぶ）が昭和62・63年度に分布調査を実施し、15遺跡106,000m<sup>2</sup>を調査対象として、平成4年4月23日付で日本道路公団高松建設局（現四国支社、以下JHと呼ぶ）と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議（文化庁協議）を終えた。平成4年度は第7次区間（徳島～脇間）の調査最終年度と重なったが、用地交渉が開始され、当年度末より一部地点において試掘調査に着手し、6年度より本調査を開始した。

第11次区間（美馬～川之江）の路線延長は42.3kmで平成2年11月19日施行命令が出され、平成3年1月21日に路線発表された。当該区間は県教育委員会が平成4年度に分布調査を実施、39遺跡323,195m<sup>2</sup>を調査対象として、平成5年9月24日付けで文化庁協議を終えた。平成6年度試掘調査に着手し、7年度より本調査を開始した。

この区間は平成9年度の第10次区間、10年度に第11次区間のうち美馬～井川池田の供用目標が設定された。県教育委員会は6年度に第7次区間の調査実績（調査班数16.5班、調査対象68遺跡360,000m<sup>2</sup>に対して実調査面積133,464m<sup>2</sup>、実掘率37%）を勘案して、当該区間に必要な調査班数を12班（1班構成、調査員2・調査補助員2）と算出した。4・5年度は用地取得状況にも顕著な進捗はなく、そのため第10次区間の一部において本調査が実施されたにすぎない。6年度は全区間で用地取得が進み、第10次区間の5ヶ所で本調査を実施したのを始め、両区間の21ヶ所で試掘調査を展開した。

県教育委員会はセンターから提出された6年度の試掘調査結果や用地取得状況を基に、7年度を第10次区間3班、第11次区間6班の計9班集体で調査することを決定した。しかしこれは、10年度中の供用時期を前提とした調査人員配置要望（第10次区間必要班数11班・第11次区間必要班数16班、7年度要望班数15班）とは大きな懸隔を生じた。

さらに人員確定後に試掘調査が行われた美馬市薬師遺跡・坊僧遺跡では調査対象区域外に遺跡が広がる見込みとなり、約22,000m<sup>2</sup>の追加調査の必要性が生じた。併せて第11次区間の用地取得が進捗した。そのため第10次区間の調査を優先させると、第11次区間は試掘調査を実施するにとどまり、本調査に着手できない状況が懸念された。このためJHから県教育委員会に対して度重なる増班要請がなされた。

7年度は県立埋蔵文化財センター開設に伴い、調査関係は一課二係体制が二課四係体制に改正され、調査第二か第一係がJH事業を担当することになった。県教育委員会は年度早々に必要班数を見直して26.5班と修正し、センターに調査第二課内の事業の調整にとどまらず、第一課事業も割愛し、調査班数の捻出に向けての調整を要請した。結果、7年度を当面12班で対応することとした。

7年度は第10次区間の調査を概成させ、第11次区間は試掘調査を先行させる方針により、調査班の配置を変更したため、全体の実掘面積は当初計画よりも減少したものの、調査計画は大幅に変動した。また第11次区間で本調査を実施した三野町丸山遺跡では約8,500m<sup>2</sup>が追加調査が必要となったのを始め、一部の調査において大幅な遅延を生じたため、さらに事業調整を行って休日まで調査員を投入する事態となったが、さほどの効果を上げるまでには至らなかった。

加えて試掘調査の結果、美馬市荒川遺跡、吉水遺跡、三好町土井遺跡、大柿遺跡などでは、当初見込みを上回る調査面積が確実になったため、県教育委員会は工事工程上、調整可能な調査箇所を平成8年度に先送りすることを決めた。こうしたことから、必然的に平成8年度が事業ピークを迎える見込みになった。JHと次年度体制について協議を進めていた県教育委員会は、年末までに8年度を35班集体で

臨むことを決定し、不足人員を若干の専門職員採用と30数名の教員派遣で対応することを決定した。

この大量の教員派遣計画に対して、平成8年2月10日付文化財保存全国協議会から徳島県知事・徳島県教育長宛「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査及び文化財保護行政の適正化を求める要望書」、同年3月6日付考古学研究会から「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査体制にかんする質問書」、同年3月28日付日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会から「四国縦貫自動車道建設に伴う文化財保護行政ならびに埋蔵文化財発掘調査に関する要望書」が提出された。

これに対し県教育委員会は県教育長名で考古学研究会に同年3月22日付、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会には同年4月15日付で回答している。

8年度は調査体制が一新された。県教育委員会に埋蔵文化財担当参事（センター常務理事兼事務局長）を設置し、文化財課の埋蔵文化財担当係の強化を図ると共に、前年度に続いてセンターの組織改正が行われた。調査関係では7年度の事務分掌が全面的に改正され、三好町に埋蔵文化財センター西部事務所が設置された。調査第二課調査第一係は西部事務所勤務となり、8年度は新設の所長（センター専務理事兼所長）以下143名、9年度は95名体制、8年度最大稼働時35班（通年28.5班）、9年度最大稼働時24班（通年20.5班）、計49班で事業に対応することとなった。

表1に年次ごとの進捗状況を示した。8年度は、第11次区間美馬～井川池田間の調査に目途を立てることを最大の主眼とした。8年度前半に第10次区間及び前年度からの継続調査の完了、用地の取得がまとまった第11次区間の中規模遺跡の概成、後半での大規模遺跡への効果的稼働を目指した。

調査組織及び整理体制は以下の通りである。

#### 〈 調査体制 〉

##### 平成7年度

理 事 長 安 藝 武	総務課
専務理事兼所長 筒井豊祐	総務課長 小林敬治
常務理事兼事務局長 柴田 広	主 事 三木和文
	技 師 青木雅和

##### 調査課

調査第2課長兼第1係長 島巡賢二  
研 究 員

##### 平成8年度

理 事 長 安 藝 武	総務課
専務理事兼所長 筒井豊祐	総務課長 長江 仁
常務理事兼事務局長 庄野徳保	主 事 集堂正士
常務理事兼事務局次長 谷 一郎	技 師 青木雅和・笠井達雄

##### 調査課

調査第1課長 島巡賢二	調査第2課長 菅原康夫
主査兼調査係長 逢坂俊男	主査兼調査第1係長 南 信義
主査兼調査第2係長 佐々木清克	

研 究 員 藤本一夫・横田温生・丸岡禎人・石本 卓・元村俊彦・藤川智之

< 整理体制 >

平成15年度

理 事 長 松村通治  
専務理事兼所長 本浄敏之  
常務理事兼事務局長 西村和博

総務課  
次長兼総務課長 山本高史  
主査兼係長 坂尾俊一  
事務主任 布川純子

整理普及課

整 理 普 及 課 長 島巡賢二  
整 理 係 長 貞野雅巳  
普 及 係 長 関本秋夫  
研 究 員 田川 憲・折野佳子

平成16年度

理 事 長 松村通治  
専務理事兼所長 浦上純二  
常務理事兼事務局長 河野幸一

総務課  
次長兼総務課長 古田哲郎  
主査兼庶務係長 坂尾俊一  
主 事 川口治代

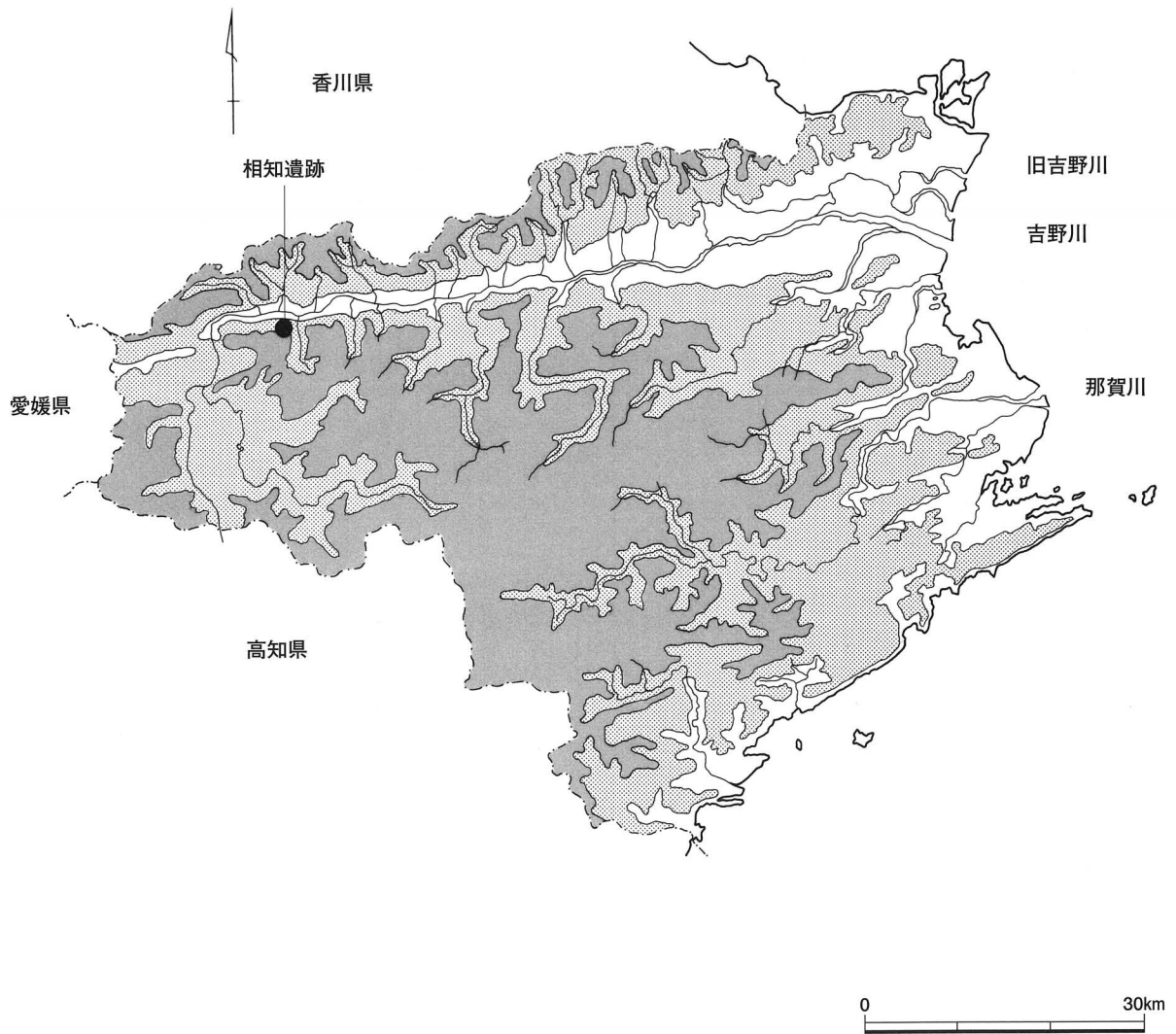
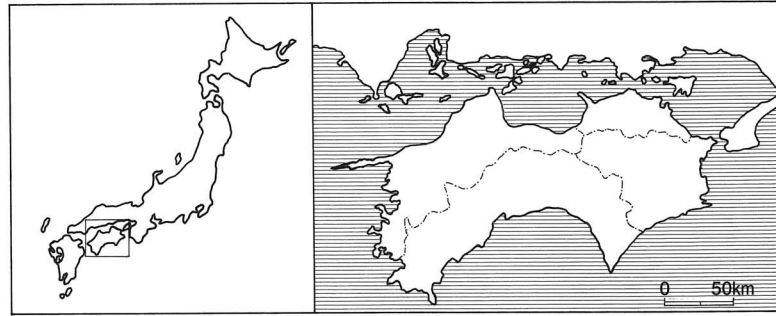
事業第二課

事 業 第 二 課 長 島巡賢二  
事 業 第 一 係 長 貞野雅巳  
事 業 第 二 係 長 関本秋夫  
主 任 研 究 員 田川 憲



第1表 四国縦貫自動車道（脇～美馬・美馬～川之江）埋蔵文化財調査地一覧表

番号	遺跡名	所在地	表 面 積 (㎡)								備考	
			実掘面積	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度		
1	原 (I)	美馬市脇町北庄	380		380							報告書第41集所収
2	原 (II)	美馬市脇町北庄	1,560		1,560							報告書第41集所収
3	鶴 射	美馬市脇町北庄	1,544		240	1,304						報告書第41集所収
4	佐 城 (I)	美馬市脇町脇町	565	165	400							報告書第41集所収
5	佐 城 (II)	美馬市脇町脇町	779	89	70	620						報告書第41集所収
6	佐 城 (III)	美馬市脇町脇町	146	146								報告書第41集所収
7	田 上 (I)	美馬市脇町田上	891			873	18					報告書第27集所収
8	田 上 (II)	美馬市脇町西田上	9,258			4,610	4,478	170				報告書第27集所収
9	田 上 (III)	美馬市脇町西田上	6,062		150	1,822	4,090					報告書第27集所収
10	井 口	美馬市脇町井口	150		150							報告書第41集所収
11	薬師 (薬師)	美馬市美馬町芝坂	9,335			330	9,005					報告書第34集所収
12	薬師 (芝坂)	美馬市美馬町芝坂	6,937			41	4,613	2,283				報告書第34集所収
13	坊 僧 (坊僧)	美馬市美馬町坊僧	12,455		750	56	11,649					報告書第34集所収
14	坊 僧 (中黒)	美馬市美馬町坊僧	229			154	75					報告書第34集所収
15	坊 僧 (東段)	美馬市美馬町坊僧	5,850			116	5,734					報告書第34集所収
16	坊 僧 (西段)	美馬市美馬町坊僧	63			63						報告書第34集所収
17	池 ノ 浦	美馬市美馬町池ノ浦	26			26						報告書第41集所収
18	滝 ノ 宮	美馬市美馬町滝ノ宮	2,563	350	500		1,713					報告書第41集所収
19	下 突 出	美馬市美馬町中横尾	2,600				2,600					報告書第41集所収
脇 ～ 美馬			61,393	750	4,200	10,015	43,975	2,453	0	0		
20	荒 川	美馬市美馬町荒川	17,782				202	15,530	2,050			報告書第61集所収
21	吉 水	美馬市美馬町吉水	3,820				120	3,700				報告書第39集所収
22	西 屋 敷	美馬市美馬町中西	288				288					報告書第58集所収
23	中 山	美馬市美馬町中山	172				172					報告書第58集所収
24	西大佐古	美馬市美馬町突落	153				108	45				報告書第58集所収
25	清 水	三好郡三野町清水	10,692			692		10,000				報告書第58集所収
26	塩 塚	三好郡三野町清水	2,332			310	72	1,950				報告書第58集所収
27	加茂宮 (II)	三好郡三野町加茂宮	300			300						報告書第58集所収
28	加茂宮 (I)	三好郡三野町加茂宮	340			340						報告書第58集所収
29	大 谷 尻	三好郡三野町北原	4,595			95	4,500					報告書第53集所収
30	丸 山	三好郡三野町勢力	14,760				11,110	3,650				報告書第45集所収
31	花 園	三好郡三野町太刀野	3,456				356	3,100				報告書第42集所収
32	太刀野山 (II)	三好郡三野町アミダ堂	157			103	54					報告書第42集所収
33	太刀野山 (I)	三好郡三野町アミダ堂	450			450						報告書第42集所収
34	台	三好郡三好町足代	1,203					1,203				報告書第42集所収
35	宮ノ岡 (II)	三好郡三好町足代	345					345				報告書第42集所収
36	宮ノ岡 (I)	三好郡三好町足代	898					898				報告書第42集所収
37	東 原	三好郡三好町足代	16,365			217	323	15,825				報告書第50集所収
38	西 原	三好郡三好町足代	10,853			157	616	8,153	1,927			報告書第51集所収
39	円 通 寺	三好郡三好町足代	42,453				808	30,375	11,270			報告書第28集所収
40	土 井	三好郡三好町昼間	35,630			140	378	19,520	15,592			報告書第38集所収
41	大 柿	三好郡三好町昼間	53,012				1,562	22,960	28,490			報告書第37集所収 報告書第48集所収 報告書第60集所収
42	八 幡	三好郡井川町八幡	1,250				20	1,230				報告書第29集所収
43	井 内	三好郡井川町西井川	277					277				報告書第30集所収
44	井 出 上	三好郡井川町西井川	6,336				30	6,306				報告書第52集所収
45	相 知	三好郡井川町西井川	15,500				120	15,380				本報告書所収
46	坊	三好郡井川町西井川	420					120	300			報告書第29集所収
47	須 賀	三好郡井川町西井川	3,869					689	3,180			報告書第29集所収
48	末	三好郡井川町西井川	240					240				報告書第29集所収
49	お 塚	三好郡池田町トウゲ	5,314			354	1,238	3,722				報告書第58集所収
50	供 養 地	三好郡池田町クヤウジ	1,811			111	1,700					報告書第58集所収
51	山 田 (II)	三好郡池田町ヤマダ	1,515			285	1,230					報告書第58集所収
52	山 田 (I)	三好郡池田町ヤマダ	703			53		650				報告書第58集所収
53	馬 路	三好郡池田町馬路	970						320	650		報告書第58集所収
54	源 氏 岡	三好郡池田町源氏岡	175							175		報告書第58集所収
55	林	三好郡池田町佐野	130						130			報告書第58集所収
56	和 田	三好郡池田町佐野	1,220					1,220				報告書第58集所収
57	森 常	三好郡池田町初草	90						90			報告書第58集所収
58	高 毛	三好郡池田町高毛	25						25			報告書第58集所収
美馬～川之江			259,901	0	0	3,607	25,007	167,088	63,374	825		
計			321,294	750	4,200	13,622	68,982	169,541	63,374	825		



第1図 調査地位置図



第2図 相知遺跡調査区位置図

## 2 調査の経過

### (1) 調査の経緯

相知遺跡は平成7年度に実施された試掘調査の結果、高速道路本線部分と井川・池田インターチェンジ部分を含む15,380m<sup>2</sup>が発掘調査対象地と判断された。

調査は1～5区と6・7区の大きく2グループに分かれ、最も東側に位置する7区より着手した。しかし、既存の民家の移転などのこともあり調査予定範囲を2分割することになり、まず7-1区として北側の調査にあたり、南側は後日7-2区として対処することにした。

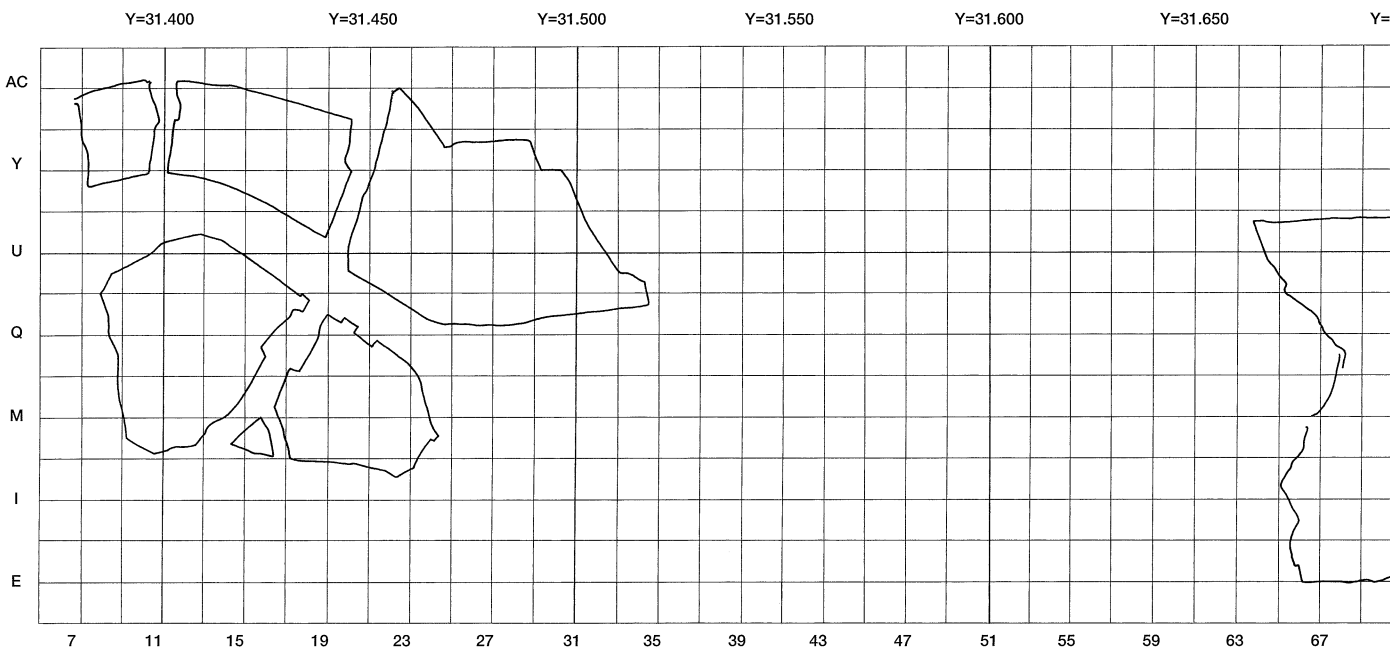
調査期間中は図面作成と写真による記録を目的として平成8年9月27日に6区、同年12月7日に1・2区、平成9年1月28日に3・4区、同年2月27日に5・7区においてヘリコプターによる空中写真撮影を都合4回行った。

### (2) 発掘の方法

遺跡内の調査区区分は農道により区画された調査地を便宜的に西から1区として調査区番号を順次東に向かって付加していき、最も東側に位置する調査区を7区とした。

本調査を開始するにあたって調査グリッドの配置は発掘調査統一基準にならい以下のように設定した。第4系国土座標を設定基準とし、X軸・Y軸線上に5mのメッシュを1単位として調査範囲を網羅した。そしてX軸方向へはY=31.370を基準点として東にY=31.770までの84区間を1、2、3・・・83、84として、Y軸方向へはX=113.710を基準点として北にX=113.850までの30区間をA、B、C・・・A C、A D・・・として設定した。よって上記のアルファベット記号と番号の組み合わせにより各グリッドを表した。

遺構記号および遺構番号は遺構検出時に決定しており調査区ごとに付加されているが、その後の整理作業において遺構の性格上変更の必要なものは遺構記号を変更し、あらためて1区から7区の順で遺構の種類ごとに通し番号をふり直した。なお遺構記号はセンターが定める基準に従い、遺構番号は千の位が遺構面数を示す。しかし通し番号にすると柱穴・小穴(SP)が千基を超えることから、千番目のSPは一桁増やしSP11000となるように表記した。この場合は一万の位が遺構面数を表記している。そのため年報などの当該遺跡に関する既刊行物や報告と今回の本報告の遺構番号と一致しないところがある。



第3図 グリット配置図



(3) 調査日誌抄

平成 8 年

- 5月1日 7区南側試掘
- 5月2日 7区南側機械掘削開始
- 5月21日 7区南側包含層人力掘削開始  
中世瓦器や近世青磁・陶器が出土
- 5月28日 6区試掘実施  
6区機械掘削開始  
調査区の北側で包含層を捉える  
(中世遺物中心に出土)



写真1 発掘作業風景

- 7月3日 7区南側 遺構の検出がなかったため調査区内のレベリング、調査区壁の土層観察を行い終了する
- 7月18日 6区包含層人力掘削開始
- 8月26日 1・2区機械掘削開始  
6区遺構検出
- 8月28日 6区遺構内掘削開始
- 9月27日 6区空撮
- 10月1日 1区包含層人力掘削開始
- 10月11日 2区包含層人力掘削開始
- 10月21日 1区遺構内掘削開始
- 10月24日 4区試掘
- 10月29日 3区試掘および機械掘削開始  
各所より包含層を確認するが遺物の含有は少ない
- 11月15日 2区遺構内掘削開始

- 11月18日 3区包含層人力掘削開始
- 11月28日 2区調査区壁面土層観察  
4区機械掘削開始
- 12月7日 1・2区空撮
- 12月13日 3区遺構検出
- 12月16日 3区遺構内掘削開始
- 12月26日 発掘現場仕事納め  
年末年始休暇

平成 9 年

- 1月7日 発掘現場仕事始め
- 1月14日 5区試掘実施  
5区機械掘削開始
- 1月27日 3区掘立柱建物跡の配置検討
- 1月28日 3・4区空撮
- 1月29日 4区遺構内掘削開始
- 1月30日 5区包含層人力掘削開始
- 2月12日 7区北側の試掘を実施
- 2月13日 7区北側機械掘削開始
- 2月22日 5区遺構内掘削開始
- 2月27日 5区、7区北側空撮
- 2月28日 作業終了
- 3月7日 撤収

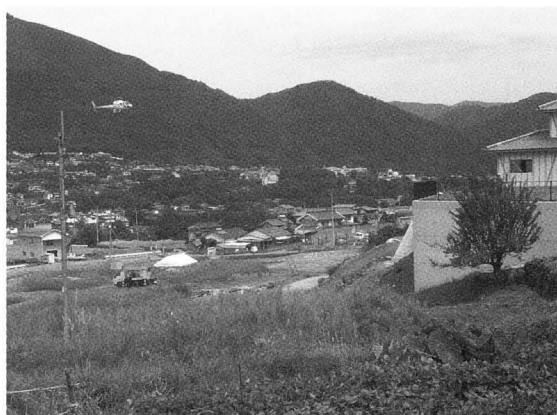
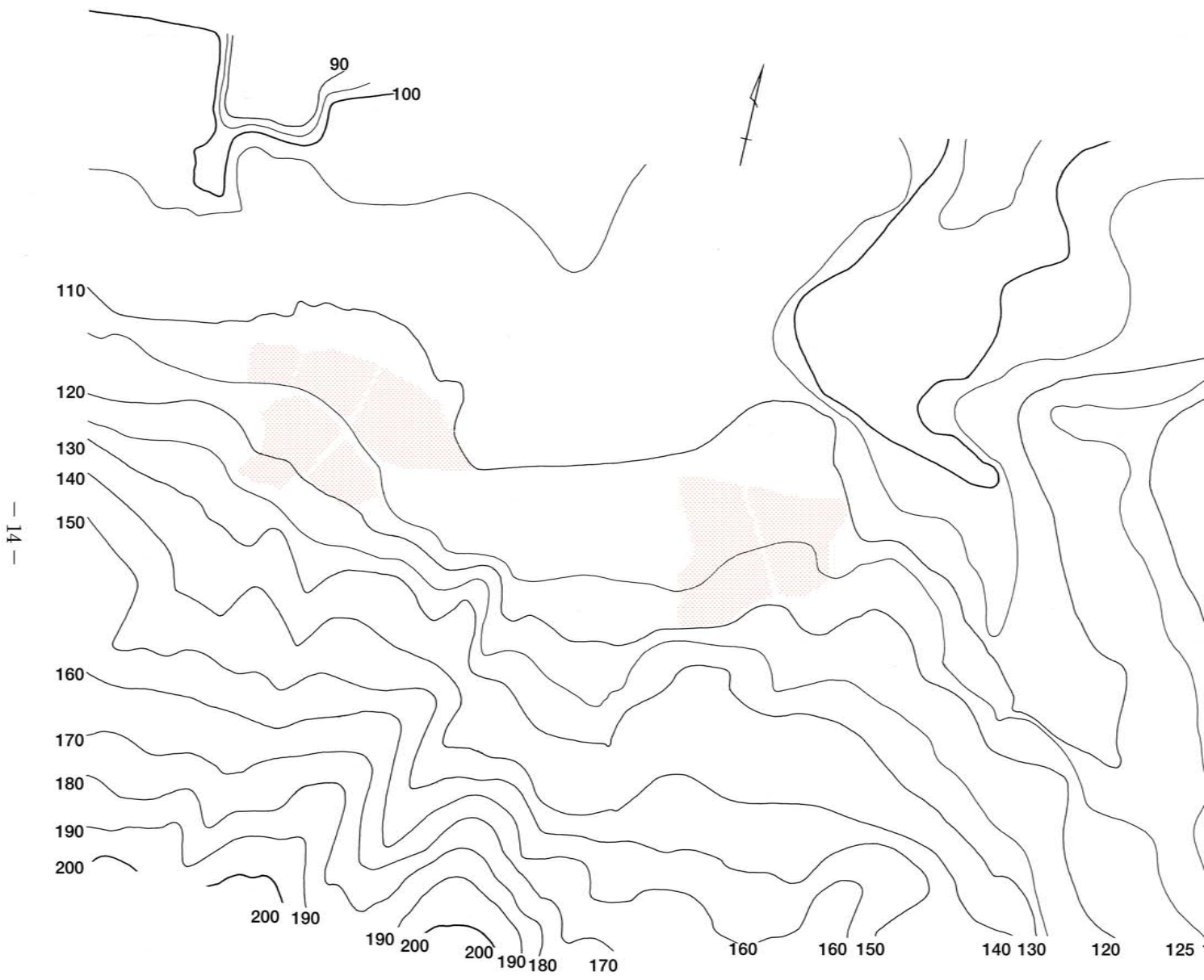


写真2 ヘリコプターによる空撮風景



## Ⅱ 遺跡の立地と環境





第4図 調査地点および周辺の地形図

## 1 地理的環境

### 概況

四国の東部に位置する徳島県は、4,144km<sup>2</sup>の面積を有し、そのうちの約8割が山地となる。残りの2割にあたる平野部は吉野川などの各主要河川沿いに展開し、進流方向と同じく東側を向いて広がりを見せる。その一方で徳島県の地勢を決定づける日本有数の断層帯である中央構造線が和歌山県から本県吉野川北岸付近を貫き、愛媛県佐多岬北側を経て大分県まで東西方向に走る。中央構造線北側の内帯では、領家帯である和泉層群があり、砂岩層を主とした泥岩層との互層からなる讃岐山地を形成する。主にこれら和泉層群にあたる吉野川北岸は、砂岩層や泥岩層の互層に凝灰岩層を含んで構成されている。他方、中央構造線南側の外帯では三波川帯、御荷鉢帯、秩父帯、四万十帯があり、三波川帯にあたる吉野川南岸は結晶片岩からなる。

その中央構造線に沿うように徳島県の北部を東流する吉野川は「四国三郎」の名を冠し、徳島県の約90%に相当する3,750km<sup>2</sup>を測る四国最大の流域面積をもつ。北に阿讃山脈を派生する讃岐山地、南に四国山地が展開する。吉野川流域は地理的用語として上流域・中流域・下流域に区分される。上流域は愛媛・高知両県境をなす瓶ヶ森（標高1981m）にもとめられる水源から北流する流れが東流へ向きを変える三好郡池田町中西付近までの約116kmがこれにあたり、池田町から阿波郡阿波町岩津付近までの約38kmが中流域であり、岩津から河口までの約40kmが下流域とされる。

遺跡の所在する三好郡井川町は吉野川中流域、河口から約70kmの位置にあり、吉野川を挟んで北側を三好町に、東側を三加茂町、西側を池田町、南側は四国山地を介して西祖谷山村にそれぞれ接する。町の立地としては、吉野川の南岸河岸段丘から四国山地へと連なる北斜面部である。

### 地質

前述したように三好郡内の吉野川北岸は和泉層群で、泥岩を壮観に含む砂岩層を主としており、一方吉野川南岸の井川町は吉野川水系のもたらした第四紀の堆積物と、その基盤岩である三波川変成岩で構成されている。井川町域における三波川帯の構成岩石は泥質片岩、砂質片岩、珪質片岩、塩基性片岩、塩基性岩、蛇紋岩に区分され、結晶片岩は曹長石の斑状変晶の見られる点紋片岩と無点紋片岩に大別される。またこれらの結晶片岩層には含銅硫化鉄鉱の層が散在しており、井川町内には粗銅の精錬を行っていた腕山鉱山などが伝えられている<sup>1)</sup>。

このような地質環境を反映して相知遺跡における石器原石の採取状況は、周辺で産出している結晶片岩のように容易に入手できるものと、遠隔地から搬入する必要がある砂岩やガラス質安山岩、チャートに大別できる。後者の搬入原石のうち砂岩は吉野川を隔てた対岸の三波川帯に、ガラス質安山岩はサヌカイトという名称で著名であり讃岐平野東部の瀬戸内火山岩石区（国府台もしくは金山）に産出地を求めることができ、相知遺跡からは猪ノ鼻峠を経て讃岐山脈越え（箸蔵越え）の必要があるが直線距離で約35km以内と比較的近い位置にある。またチャートは三波川変成帯とその南で接する秩父帯によるものと思われる。この3種いずれの石材も遺跡から産出地までは、徒歩で片道1日ないし2日以内の行程で獲得できる位置関係にある。

### 地形

本遺跡の立地する井川町内の西側にある末、須賀、坊、相知、出ノ上地区は洪積世あるいは沖積世にわたってできた吉野川南岸の河岸段丘である。詳細をみると、現在の字名でいう西井川の平地は吉野川の浸食によって東西方向に長い二段に形成され、一方は吉野川の支流である里川谷川が四国山地の一塊である石堂山に源を発し標高579.9mを測る綱付山西麓を経て北流し、吉野川に注ぐことによる浸食と堆積がこれに加わって現在の地形をなしている。この堆積地が西井川でも数少ない平地を形成している。

遺跡は、里川谷川が吉野川へ注ぐ直前の西（左）岸段丘上から谷への傾斜部分にかけて立地しており、この段丘の北側と東側に向けて下る緩傾斜部分に展開する。相知遺跡が立地する吉野川南岸の河岸段丘の標高は約125m前後を測り、調査地の最高地点で約130.9m、最低地点で123.3mを測る。調査前の状況は水田（棚田）であり、その周辺に住宅が散在する。これらの水田は棚田を形成するために地山を削りこみ、その掘削土を谷側に積んで平坦部分をつくり出し階段状を形成していることから、削平を受けた部分は多少なりとも地下の遺跡に影響があることは予測された。実際、検出された遺構の中でいくつかのものは、山（南）側は残存しているが谷（北もしくは東）側は削平を受け消滅しているという遺構がみられた。とくに6、7区においてこの影響が強く調査区のおよそ3分の1という範囲が削平されているところがあった。そのために当然ながら包含層が残存しておらず、表土直下に遺構検出面が存在している地点もある。よって遺構上面が削平されることとなり、遺構深度も非常に浅いものとなっている。

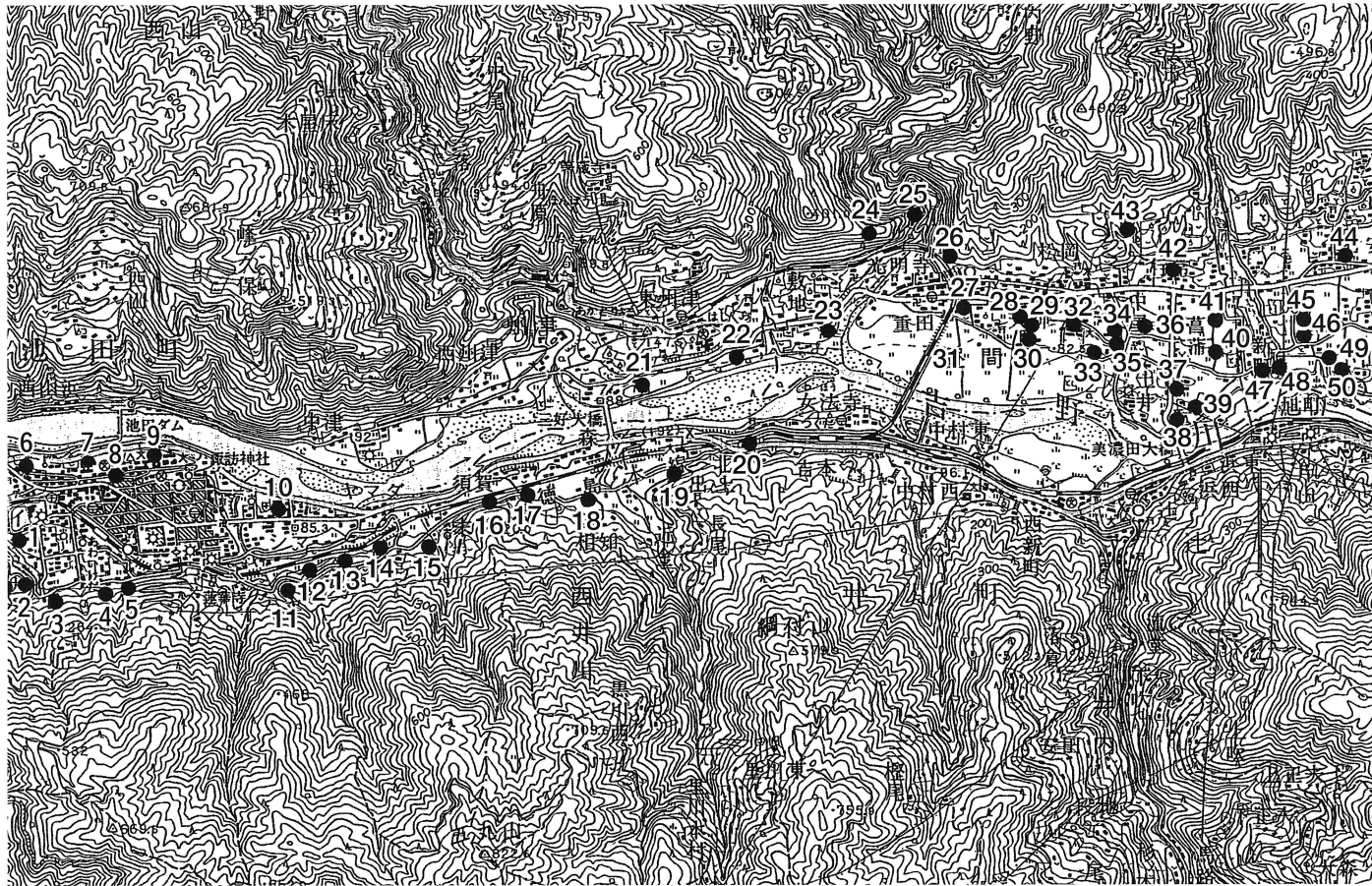
## 2 歴史的環境

### 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は井川町内には猿渡遺跡<sup>(2)</sup>が存在するのみである。そこで範囲を広げ周辺町内での遺跡の分布を見ると、池田町洞草遺跡、新山A遺跡、白地峰遺跡、井ノ久保西A遺跡、三好町土取遺跡、三野町東上野遺跡、三加茂町丹田遺跡がある<sup>(3)</sup>。これらの遺跡は主として吉野川北岸の標高150～320mを測る讃岐山地中腹や河岸段丘状に多く見られ遺跡分布の傾向に特徴がみられる。土取遺跡からはサヌカイト製ナイフ形石器、宮田山型ナイフ形石器が、丹田遺跡からは国府型ナイフ形石器が出土している。

### 縄文時代

縄文時代の遺跡も前時代と同様の分布状況を呈するが、わずかながら吉野川流域の沖積平野への進出が認められる。池田町山田遺跡（I）、ウエノ遺跡、三好町大柿遺跡、土井遺跡、三加茂町稲持遺跡、加茂谷岩陰遺跡などであるが、井川町内には当該期の遺跡の分布はみられない。加茂谷岩陰遺跡からは早期の押形文土器、前期の爪形文土器をはじめとして後・晩期の土器のほかに貝殻や獣骨などが出土している<sup>(4)</sup>。大正10（1921）年～同11（1922）年にかけて旧制池田中学（現池田高校）の校舎建設にともなって上野遺跡の発掘調査が行われ、後期中葉にあたる津雲A式の土器が出土している<sup>(5)</sup>。また、吉野川南岸に隣接した沖積地に立地する稲持遺跡からは多量の晩期前半の土器とともに集落遺構が確認された<sup>(6)</sup>。竪穴住居跡からは蛇紋岩製もしくはサヌカイト製の石鏃、石錘、石核、磨製石斧、石鋏などの製品・未製品が多量に出土したことから石器製作工房をもった集落とのみかたができる。また吉野川北岸の中州性微高地上に立地する大柿遺跡では、晩期後半の石鋏埋納遺構とともに多量の石鋏が出土している<sup>(7)</sup>。大柿遺跡に隣接する河岸段丘上の土井遺跡からも同時期の土器が出土している<sup>(8)</sup>。



- 1 宝蔵寺跡 2 経塚 3 犬伏塚寺跡 4 犬伏塚2号古墳 5 犬伏塚1号古墳 6 姫塚古墳 7 ウエノ遺跡 8 マチノ遺跡 9 山田遺跡(I) 10 山田遺跡(II) 11 お塚古墳 12 お塚古墳 13 末遺跡 14 須賀遺跡 15 坊遺跡 16 相知遺跡 17 州津遺跡 18 東州津遺跡 19 田之岡城跡 20 東山城跡 21 土取遺跡 22 窪井谷山上古墳 23 光明寺跡 24 立法寺跡 25 大柿遺跡 26 天神前遺跡 27 妙見七夕塚遺跡 28 正力遺跡 29 荒神前遺跡 30 羽根田遺跡 31 土井遺跡 32 東原遺跡 33 菖蒲遺跡 34 新町遺跡 35 行常遺跡 36 土器ノ丸城跡 37 行安遺跡 38 円通寺跡 39 円通寺塚穴古墳 40 西貝原遺跡 41 円通寺遺跡 42 円通寺遺跡(小山地区) 43 西原遺跡 44 中の段遺跡 45 上の段遺跡 46 足代東原遺跡 47 東原遺跡 48 足利城跡 49 台遺跡・中峰経塚 50 鴨埜跡 51 稲持遺跡 52 稲持塚古墳 53 雀塚古墳 54 天神塚古墳 55 大塚古墳

第5図 周辺の遺跡

## 弥生時代

弥生時代の遺跡においても遺跡分布に偏りのある傾向が見られ、三好郡内でも遺跡数は一気に増加する。前期から中期にかけては低位段丘上から沖積地にかけて多く占地する。そのうち、中期中葉から後期初頭にかけては中位段丘に分布の中心が移動し、後期以降は前期から中期に再び沖積地に戻る。

前期末の三好町大柿遺跡では北岸用水建設に伴う発掘調査で堅穴住居跡などを伴う集落跡が微高地上に確認され、四国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査では微高地縁辺部から灌漑用水施設を伴う棚田の様相が明らかとなり、生活空間と生産空間を兼ね備えた集落遺跡であるという点で注目を集めた<sup>(9)</sup>。大柿遺跡に隣接して低位段丘上に立地する土井遺跡からは、中期初頭の区画溝や土坑などが確認されている。また同町東原遺跡からも同時期の壺形土器が出土している<sup>(10)</sup>。中期中葉以降中位段丘上に展開される遺跡としては、三好町土取遺跡<sup>(11)</sup>、三野町大谷尻（館山）遺跡<sup>(12)</sup>、丸山遺跡<sup>(13)</sup>がある。これらの遺跡は高地性集落として捉えることが出来、一方沖積地において遺跡の分布がほとんどみられなくなることから、吉野川の洪水氾濫が頻発することにより生活の基盤を中位段丘上に求めた結果であるとの見方が出来る。大谷尻遺跡は中期末から後期初頭にかけての環濠集落で、環濠内からは堅穴住居跡12軒、石器製作工房1軒、祭祀遺構などが確認された。また、出土遺物には武器石器や石庖丁、石斧といった農耕石器に加えてイネやマメ類といった炭化種子などが確認されている。また、谷を挟んだ丸山遺跡からは環濠は確認されていないものの、大谷尻遺跡と同様の遺跡立地で石器の出土をみても農耕石器の出土比率が高い調査結果が得られている。さらに、前出の大柿遺跡においては当該期には大規模な棚田遺構などの生産域は確認されていない。以上のことからかんがみて、これまで高地性集落は防衛的視点に重点を置いた一時的な集落であったという点を改めて見直していく必要が生じてきている。後期から終末期になると、低位段丘上に加えて再び沖積地に遺跡分布の中心が移行してくる。池田町東州津遺跡、ウエノ遺跡、マチ遺跡、井川町相知遺跡、井出上遺跡、須賀遺跡、三好町足代東原遺跡、西原遺跡、原遺跡、西貝川遺跡、大柿遺跡、昼間遺跡群、三加茂町稻持遺跡、三野町加茂宮遺跡が代表的な遺跡である。ウエノ遺跡は前記の旧制池田中学校建設にともなって後期の壺、甕形土器が出土し、岡本健児氏により上野Ⅰ式・Ⅱ式が設定され長く県西部の当該期の土器編年指標遺跡<sup>(14)</sup>として評価された遺跡である。東州津遺跡<sup>(15)</sup>では堅穴住居跡に加えて方形周溝墓が確認されており、後述する古墳時代初頭の足代東原遺跡と絡めて墓制のあり方を再考する必要が生じている。大柿遺跡では一時衰退した灌漑用水路をとまなう大規模な棚田遺構が再び展開されるようになる。加えて堅穴住居跡が24軒確認されるがこれらはあくまで衛星的集落であり、中心集落は水田北側の微高地中央部に展開する昼間遺跡群がこれにあたるなど当該期における生産域と生活域を捉えられる好例となっている<sup>(16)</sup>。稻持遺跡は後期中葉の集落跡で蛇紋岩製の勾玉、勾玉未製品、原石、剥片、砂岩製台石、筋砥石や叩き石などが大量に出土していることから四国一円でも例の少ない玉作遺跡と考えられている<sup>(17)</sup>。

## 古墳時代

古墳時代前期の遺跡はその殆どが弥生時代後期から継続して営まれている。大柿遺跡や西原遺跡など遺跡のピークは弥生時代後期にもつが、古墳時代初頭から前期までの間に終焉を迎える。また、西原遺

跡の東側に隣接して足代東原遺跡が存在する。足代東原遺跡では前方後円形積石墓1基と小型円形積石墓が数基築造され、このことより西原遺跡が足代東原の積石墓群の造営集団集落と考えられている<sup>(18)</sup>。また前期古墳には国指定史跡の丹田古墳がある。標高約320mを測る吉野川に向かって派生する加茂山の支脈上に立地する。県西部唯一の前方後円墳である。全長約35mを測り、合掌形堅穴式石室をもつ。石室内からは鉄剣2振、袋状鉄斧1点、刀子1点、獣形鏡1面が出土している<sup>(19)</sup>。古墳時代中期は空白の時代とってよく、三好郡内から当該期の集落および古墳は把握できておらず、大柿遺跡において5世紀代の堅穴住居跡がわずかに確認されたのみで実体は不明なままである。県西部では後期になりようやく本格的に古墳が造営されるようになる。三好町妙見七夕塚は円墳であるか先の大柿遺跡が南接して立地しており、大柿遺跡において確認されたおよそ180軒にもものぼる堅穴住居跡群や約40棟を数える掘立柱建物跡に代表される大規模集落における首長墳の可能性が考えられるであろう。また三加茂町中庄一帯には消滅してしまったものもあるが45基を数える古墳が4群に分かれ築造される県西部では稀な群集墳である。これらの群集墳を造営した古墳築造集団の大規模な集落跡を把握できていないが、近隣に末石遺跡<sup>(20)</sup>や中庄東遺跡<sup>(21)</sup>などから当該期の堅穴住居跡が徐々に確認されてきていることからこれにあたるものと考えられ、吉野川南岸における一勢力であったことが推定される。また、美馬郡・三好郡の吉野川流域には「段ノ塚穴型式石室」という地域色が濃厚な横穴式石室をもつ古墳が多く分布する。前述の古墳もこれに相当する。段ノ塚穴型式石室は、美馬町大国魂古墳に初現がみられ、同町太鼓塚古墳、棚塚古墳、江の脇古墳などが7世紀前半まで連続して築造される。

## 古代

『和名類從抄』によると美馬郡には七郡が設置されていた。池田町、井川町、三加茂町の吉野川南岸側が『美豆』と呼び三津郷が比定される。ほか近隣では、吉野川北岸側の池田町州津から三好町昼間にかけての三縄郷、同じく北岸側の三好町足代から三野町にかけての三野郷がそれぞれ比定される。『三代実録』によると卷四貞観二（860）年の三月二日の条に「割阿波国美馬郡、置三好郡」との記述がみられ、美馬郡を分割して三好郡（三縄郷、三津郷、三野郷の3郷）を設置したことが読みとれる。当該期の代表的な遺跡は、井川町相知遺跡、井出上遺跡、三好町大柿遺跡、土井遺跡、三加茂町末石遺跡、中庄東遺跡、三野町加茂宮遺跡がある。相知遺跡は吉野川南岸の扇状地上に立地しており、讃岐へと通じる猪ノ鼻峠を北正面に見据える。発掘調査の結果掘立柱建物跡が数棟確認され、石製巡方が出土した。これらの掘立柱建物跡は区画溝に囲まれ主軸をそろえることや交通の要衝に占地するなど郡衙もしくはそれに準ずる施設の可能性が考えられるが、断定するまでには至っていない<sup>(22)</sup>。中庄東遺跡からは帯金具や和同開珎が出土していることから周辺に官衙的な施設が存在していたことが推測される<sup>(23)</sup>。

## 中世

三好郡内の中世遺跡は大きく沖積地や低位段丘上に立地するものと、中位段丘や山頂に占地するものがある。前者は集落遺跡や館跡、後者は沖積城郭（山城）である。

三好郡内においては平安末期から鎌倉期以降南北朝期にかけて、福田庄や田井庄など六つの荘園が相次いで成立した。井出上遺跡が所在する井川町は井川町井内ほか山城町、西祖谷山村西部、池田町、三好町昼間を庄域にもつ西園寺家領田井庄は鎌倉期の資料にみるることができるものの成立についての背景は不明である。また、南北朝期には祖山一族の兵糧料所として預け置かれていたといわれる井川庄が井

川町井内谷川流域に比定されており、近世の東井川村、西井川村があてられる。成立時期や背景は不明である。

井川町内においてこれら荘園と関わりがあげられる遺跡は今のところ散見できないが、田井庄の一部に比定される大柿遺跡では、梁間2間、桁行き2間の総柱式掘立柱建物跡の柱穴に建物廃絶にともなう地鎮祭祀が確認されている。中央柱穴列の南北側には白磁四耳壺と瓦質四耳壺が、それ以外の柱穴には土師質土器杯・皿が破碎されて埋納されており地鎮祭祀の様子が詳細に把握できる<sup>(24)</sup>。井出上遺跡において確認された掘立柱建物跡においても同様の地鎮祭祀が行われたものと思われるが、大柿遺跡ほど顕著ではなく柱の抜き取りの際土器や円柱状の結晶片岩礫を納めている程度である。また、三好町昼間の土井遺跡では灰原をともなう煙管状土器焼成窯が確認され徳島県内では上板町神宮寺遺跡、美馬町薬師遺跡に次いで3例目である。この煙管窯では土師質土器や須恵質土器などの杯や椀といった供膳具が主体として生産されており、須恵質土器の製作技法が香川県西村遺跡の西村型須恵器碗と類似する点はいくつか観察できることから須恵器椀製作技法の伝播が指摘されている<sup>(25)</sup>。また三野町加茂野宮遺跡では土坑内から菊花楓双鳥文鏡を埋納する際に稲藁を敷き粉をまく行為が確認されており当該期における祭祀行為のあり方や特異な村落景観がうかがえる<sup>(26)</sup>。三加茂町中庄東遺跡では、土師質土器の杯や皿の出土から14世紀を初現とする方形区画溝が確認され屋敷地の存在が推定されている<sup>(27)</sup>。中世後半には円通寺遺跡（小山地区）において大規模な土塁と堀によって区画された館跡が確認された。この館は鎌倉時代に初現をもち、15世紀後半に土塁と堀をともなう堅牢な城館に構築されたことが調査成果としてあげられている。城館の南に隣接して県の史跡名勝である美濃田の淵がある。美濃田の淵は吉野川が一気に狭まり水運の要所として捉えられるために水上交通の掌握の目的のためここに占地したものと考えられている。これらの調査成果から円通寺遺跡は三野田保の荘官に相当する役職の城館の意味合いを含めて当地域の開発領主の城館と位置づけられている<sup>(28)</sup>。

## 註

- (1) 『井川町誌』 井川町 1982
- (2) 早淵隆人 「旧石器遺跡の立地についての一視点 - 吉野川北岸域を中心として -」 (財) 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要『真珠』創刊号 1992
- (3) 前出(2)に同じ
- (4) 森 浩一・松藤和人 「徳島県三好郡三加茂町所在加茂谷川岩陰遺跡群」同志社大学文学部考古学調査報告第10冊 同志社大学文学部文化学科 1999
- (5) 岡本健児「弥生土器-四国5-」『考古学ジャーナル』93号 1974  
『池田町史 上巻』池田町 1983
- (6) 湯浅利彦 『稲持遺跡』徳島県教育委員会
- (7) 栗林誠治ほか 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 18 大柿遺跡』  
徳島県埋蔵文化財センター調査報告第37集 2001
- (8) 菅原康夫・大北和美ほか 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 19 土井遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告第38集 2001



- (9) 前出(6)に同じ
- (10) 小泉信司『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 25 東原遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第50集 2004
- (11) 同志社大学考古学研究室 『土取遺跡調査報告』徳島県教育委員会 三好郡三好町教育委員会 1973
- (12) 原 芳伸 「大谷尻遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.7 1995年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター1996
- (13) 久保脇美朗 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 23 丸山遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告第45集 2000
- (14) 前出(4)のほかに 石尾一仁 『ウエノ遺跡 - 池田警察署庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』(財)徳島県埋蔵文化財センター調査報告第22集 1988
- (15) 『池田町史・上巻』池田町 1983
- (16) 前出(6)に同じ
- (17) 前出(5)に同じ
- (18) 菅原康夫 『日本の古代遺跡37 徳島』 保育社 1988  
谷 恒二 「西原遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.8 1996年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター1997
- (19) 森 浩一・伊藤勇輔 『徳島県三好郡三加茂町丹田古墳調査報告』同志社大学 1970
- (20) 原 芳伸 「末石遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.11 1999年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 2000
- (21) 大橋育順 「中庄東遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.12 2000年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 2001
- (22) 藤川智之 「相知遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.8 1996年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1997
- (23) 小泉信司 「中庄東遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.10 1998年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1999
- (24) 前出(6)に同じ
- (25) 前出(7)に同じ
- (26) 矢田公洋 『加茂野宮遺跡-四国電力株式会社三野変電所新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』三野町教育委員会 1997
- (27) 河野啓介 「中庄東遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.13 2001年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 2002
- (28) 菅原康夫・辻佳伸ほか 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 15 円通寺遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第28集 (財)徳島県埋蔵文化財センター 2000

## 参考文献

- 石田啓祐ほか「阿讃山脈西部の和泉層群と中央構造線-徳島県三好町域の地質と地形」『総合学実調査「三好町」』郷土研究発表会紀要 第39号 阿波学会・徳島県立図書館 1993
- 岡田篤正「中央構造線の第4紀断層運動」『地質学論集』 18号 1980
- 岡田篤正「徳島県と周辺の中央構造線に関する文献」『徳島県立博物館準備調査報告』 2号 1988
- 奥村 清ほか『自然の歴史シリーズ④徳島「自然の歴史」』コロナ社 1988
- 東 潮ほか『川と人間 -吉野川流域史-』溪水社 1999

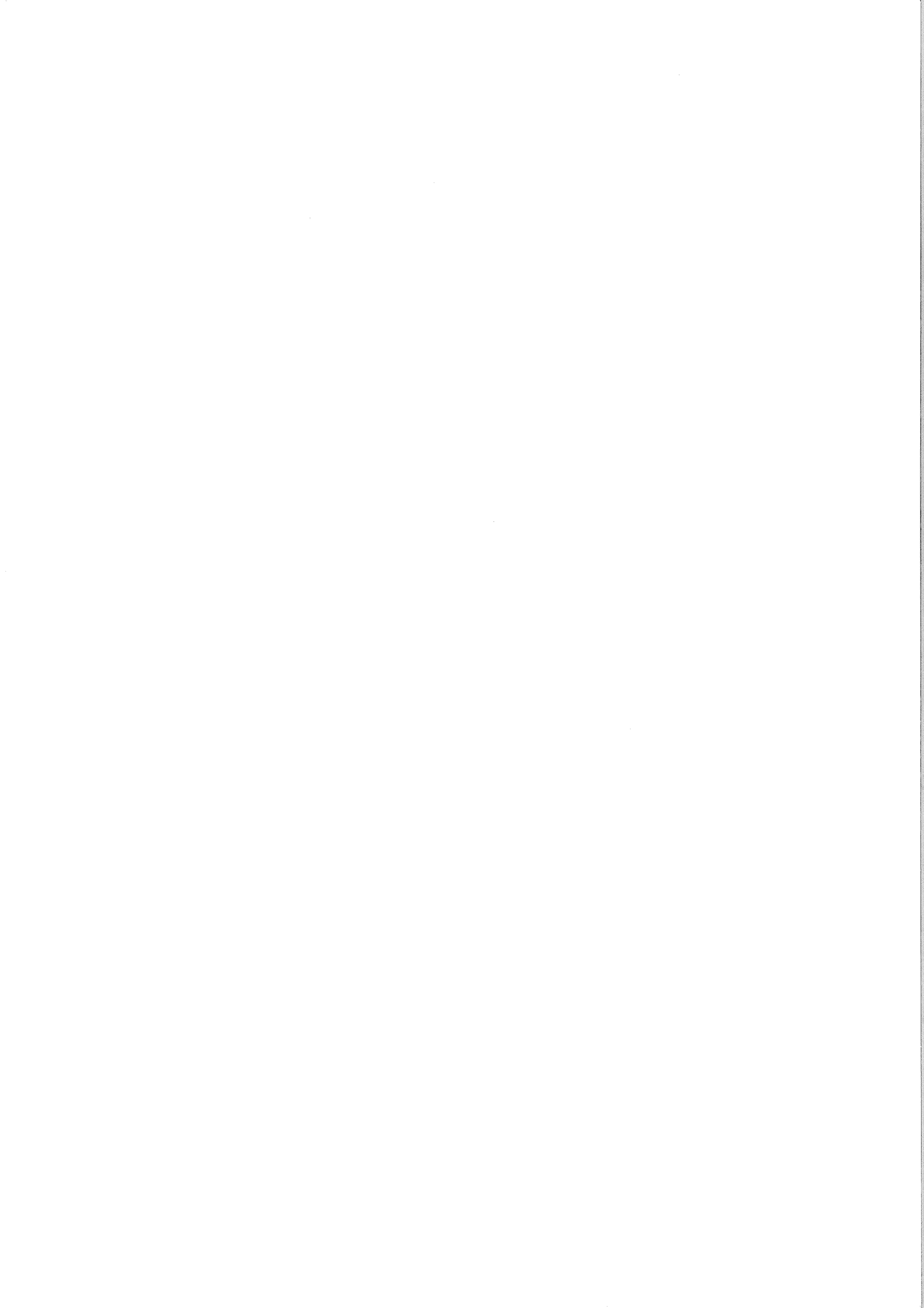


『角川日本地名大辞典 36 徳島県』角川書店 1986

「徳島県の地名」『日本歴史地名体系 37』平凡社 2000

塩田次男ほか「井川町の基盤岩の地質」『総合学術調査報告「井川町」』阿波学会紀要 第44号 阿波学会・徳島県立図書館  
1998

### Ⅲ 調查成果



## 1 基本層序（第6～8図）

本遺跡は吉野川によって形成された南岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は現地表面で110～123mを測り、南西から北東へ向かって緩やかに傾斜している。調査地の現況は水田などの耕作地のほか、宅地として利用されていた。また、大部分の調査対象範囲の水田および宅地は平坦面を得るために、緩傾斜地を開削し階段状に斜面を削り込み、その削った土を谷側に盛り土して平坦面を形成している。そのために現水田区画の山側あたる部分は削平が遺構検出面以下にまでおよんでおり、遺跡の保存状態としては部分的にせよ破壊を受けている。一方で、谷側にはわずかではあるが遺物包含層および遺構面が残存していることが十分予想された。

また、調査地は東西に大きく分かれ、1～5区は西側に、6・7区は東側にある。この両調査地の間にある南側の山裾にはいくつもの小さな谷が入るが、いずれの調査地も標高約110～120m付近におさまり、山際の平坦部分に占地している。

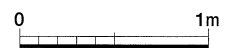
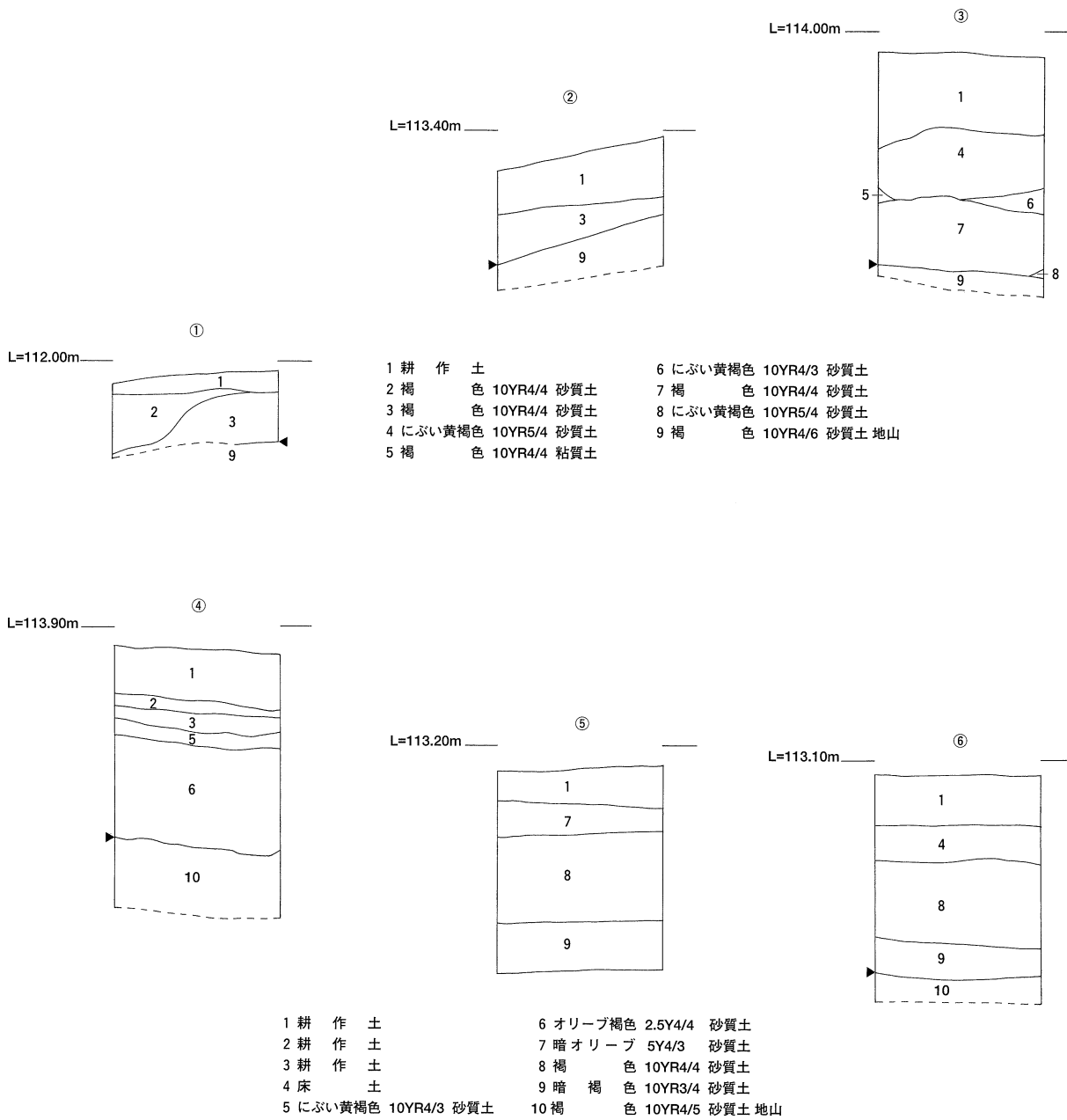
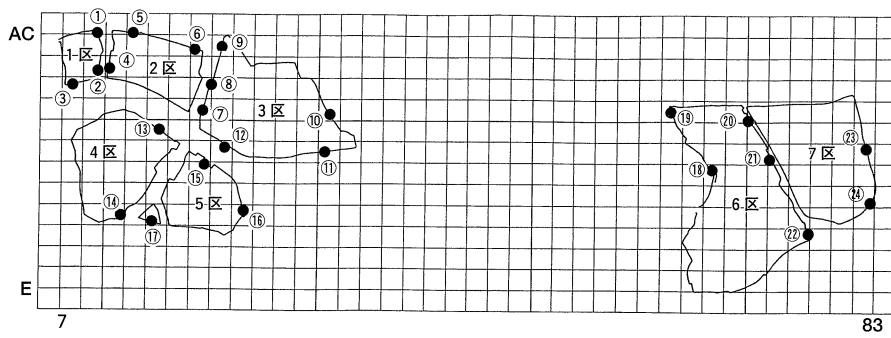
各地点における土層の堆積状況は基本的に上層には現耕作土および床土が堆積している。それ以下には水田の平坦面を形成するための客土および盛り土がところによっては厚く堆積し、砂質土層を挟んで遺物包含層へと至る。遺物包含層は、おおむね褐色を呈する砂質土が主体となり、後述する地山層中に岩盤礫を多く含む地点によってはφ10cm前後の岩盤角礫を含んでいる。しかし、遺物包含層は大きく削平を受けている地点が多く、十分な残存状況を示している地点は少なかった。

この客土・盛り土および遺物包含層を除去後、その直下層上面において遺構検出面を確認した。遺構面はこの1面のみである。遺構面形成土層は部分的に多くの礫を含む地山層であるが基本的な土質は砂質土層で、地点によっては大きく破壊を受けているもののキーベッドとして捉えうる。この地山層は調査区内においては現地表面と大きな差はなく緩やかに北側に傾斜しており、東側は里川谷川によって形成された谷地形の影響も加えて北東または東に向けての緩傾斜となる。

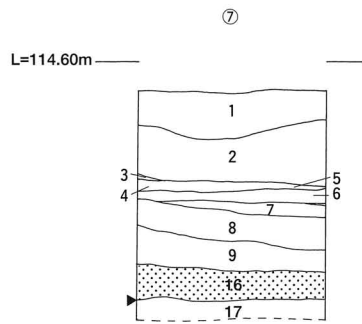
調査地の西側に当たる1～5区は一部現水田による削平を受けていたものの、遺構の残存状況としては比較的良好であり、3区の西側を中心としてやや広い範囲で遺物包含層の堆積を確認できた。第17層がこれに該当する。色調はオリブ褐色を呈し、土質は砂質土である。調査区の南側では削平を受けて残存していなかったり層厚が薄かったりしているが、北側では10～20cmの層厚を測る。

5区においてのみ遺構面が2面検出できた。しかし、第1遺構面は近世以降に属するもので確認レベルも高い。よって、5区を除くほかの調査区の遺構面と対応する面は、5区においては第2遺構面である。だが、1～4、6、7区と面をあわせて第1遺構面にすると5区の近世以降を指す第1遺構面と混乱することが予想されたので、遺構面表示はそのままにすることにした。つまり1～4、6、7区の第1遺構面と5区の第2遺構面は同一面と捉えることにする。

一方東側の調査地になる6・7区では、宅地の基礎による破壊が7区において特に著しく、部分的に遺物包含層および遺構面の残存を確認したにとどまり、検出された遺構は皆無であった。また、盛り土も厚く約1～1.5mほどの堆積を見せる。一方、6区においては現在の水田を構築する際に地山に至るまで削平された影響も若干みられ、遺構が集中する部分と全く存在しない部分があるなど疎密が顕著であった。土層の堆積状況においてもこの様子は明確に表れており、5ヶ所の観察地点においていずれも盛り土直下に地山層を検出しており包含層は残存していなかった。

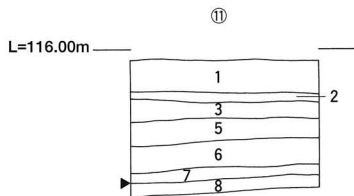
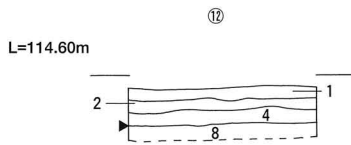
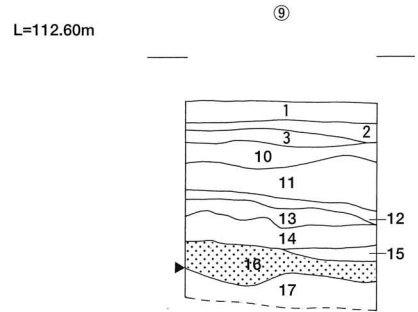
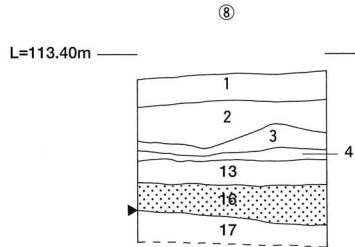


第6図 基本土層図(1)

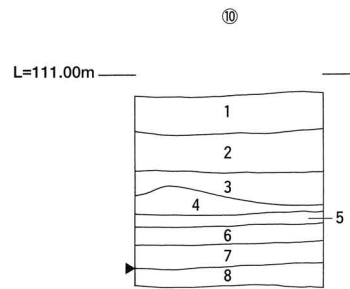


1~9 耕作土  
 10 床土  
 11 オリーブ褐色 2.5Y4/5 砂質土  
 12 オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土  
 13 オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土

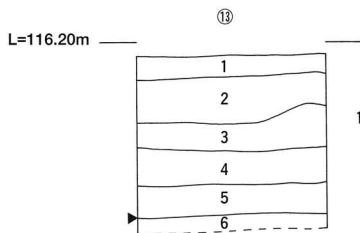
14 褐色 10YR4/4 砂質土  
 15 褐色 10YR4/4 砂質土  
 16 包含層  
 17 褐色 10YR4/5 砂質土地山



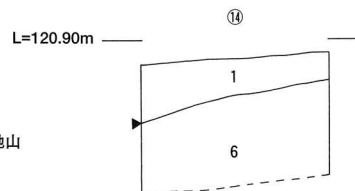
1 耕作土  
 2 床土  
 3 旧耕作土  
 4 旧耕作土  
 5 オリーブ褐色 2.5Y4/6 砂質土  
 6 オリーブ褐色 2.5Y4/6 砂質土  
 7 包含層  
 8 地山



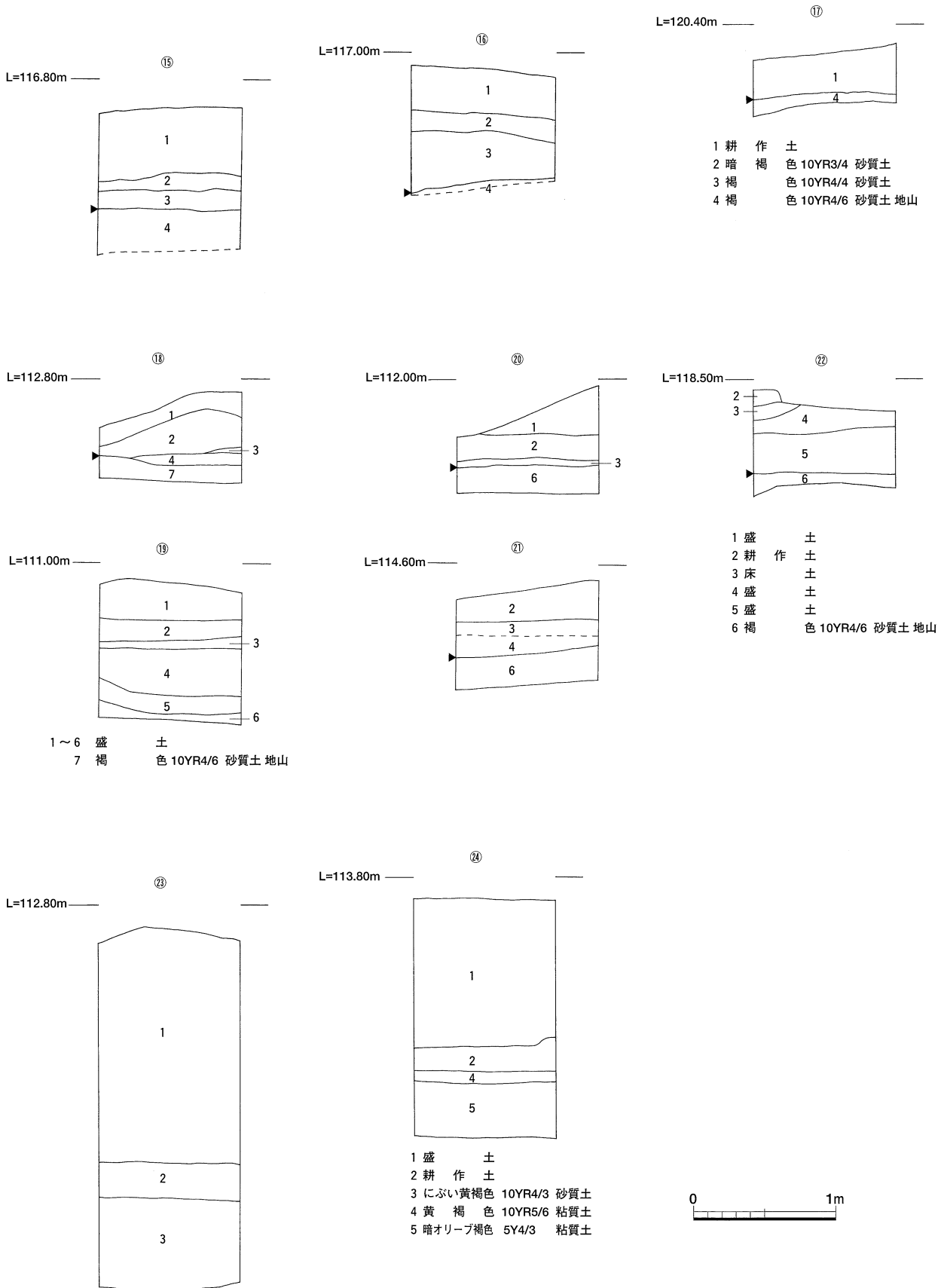
1 耕作土  
 2 盛土  
 3 盛土  
 4 旧耕作土  
 5 黄褐色 2.5Y5/3 砂質土  
 6 オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 炭化物少量含む  
 7 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土  
 8 黄褐色 10YR5/6 砂質土地山



1~5 客土  
 6 褐色 10YR4/6 砂質土地山



第7図 基本土層図(2)



第8図 基本土層図(3)

## 2 遺構と遺物 (第2表)

遺構の総数は、柱穴・小穴 (SP) が約850基あまりを数えるほか掘立柱建物跡 (SA)、土坑 (SK)、溝 (SD) など比較的多く検出されている。その検出された遺構の分布には、後世の破壊による影響もあるが大きな偏重傾向があり、ある程度の遺跡または集落範囲の特徴をつかむことができるであろう。まず帰属時期を別にして特徴的な遺構ごとにその分布を見てみると、掘立柱建物跡が確認できたのは3区と6区に限られており、このことから、ある程度居住空間や生活域といったものは限定されていたことがうかがえる。

また、7区では調査区全体におよぶ破壊が著しく、一部包含層および遺物の残存が確認できたものの、遺構を検出することはできなかった。

なお、各調査区における検出遺構総数は以下の一覧表にまとめてあるので参照して頂きたい。

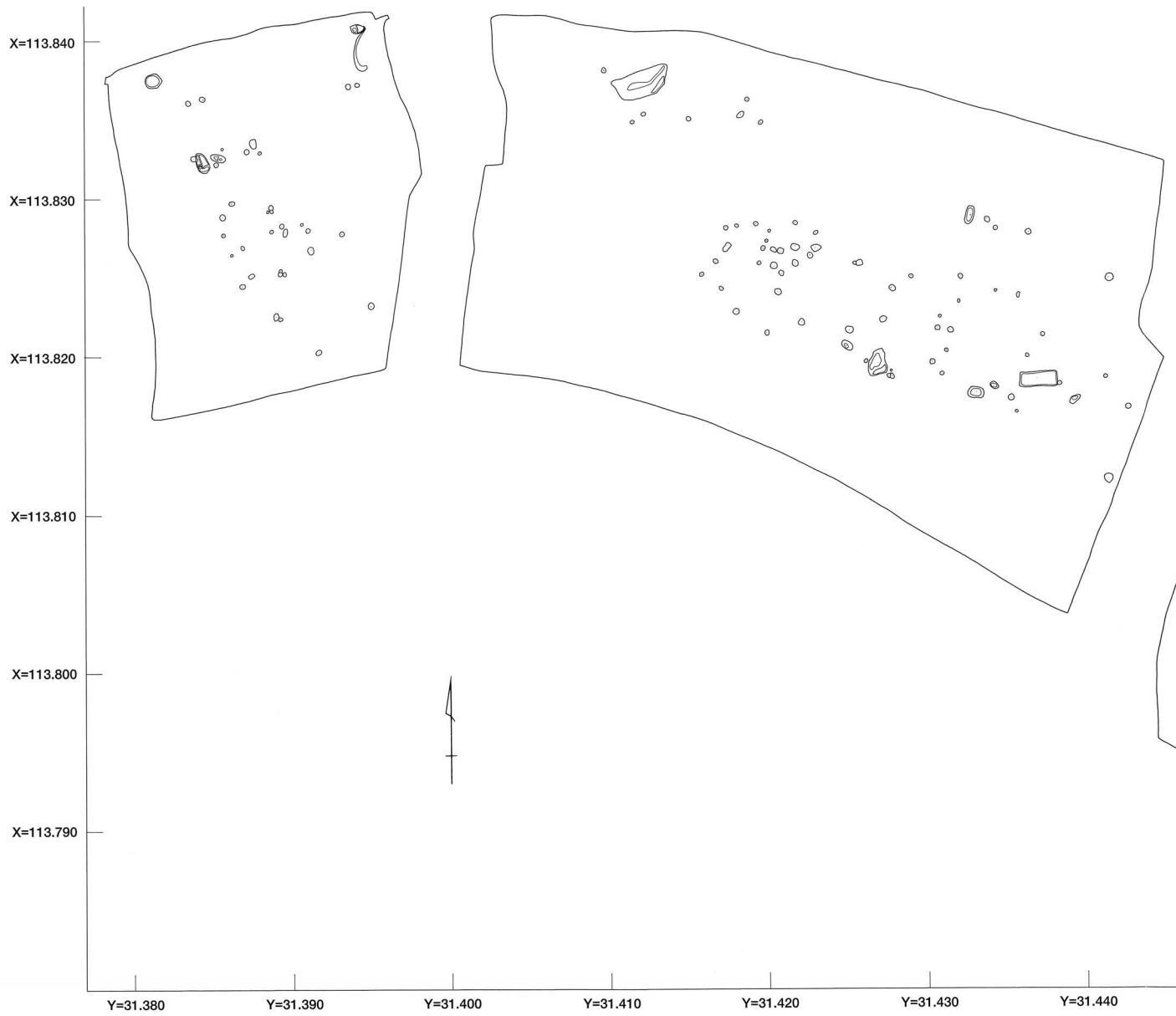
しかし遺構に伴って出土した遺物はさほどみられず、その多くは包含層より出土したものである。従って、年代を決定し得た遺構は多くはない。その中でも時期を決定し得た遺構の年代をみると、弥生時代後期、古代、中世と大きく3時期の遺構群がみられた。以下時代ごとに項目立てて触れていくことにする。

	SA	SG	SK	SD	SP	SR	SX	計
1区	0	0	5	0	34	0	0	39
2区	0	0	8	0	64	0	0	72
3区	12	0	15	4	305	1	11	348
4区	0	0	7	1	75	0	0	83
5区	0	0	2	0	3	0	0	5
6区	10	2	28	5	387	0	0	432
7区	0	0	0	0	0	0	0	0
計	22	2	65	10	868	1	11	979

第2表 相知遺跡検出遺構数一覧表







第9図 相知遺跡遺構配置図



第10図 相知遺跡遺構配置図 (4・5区全体)

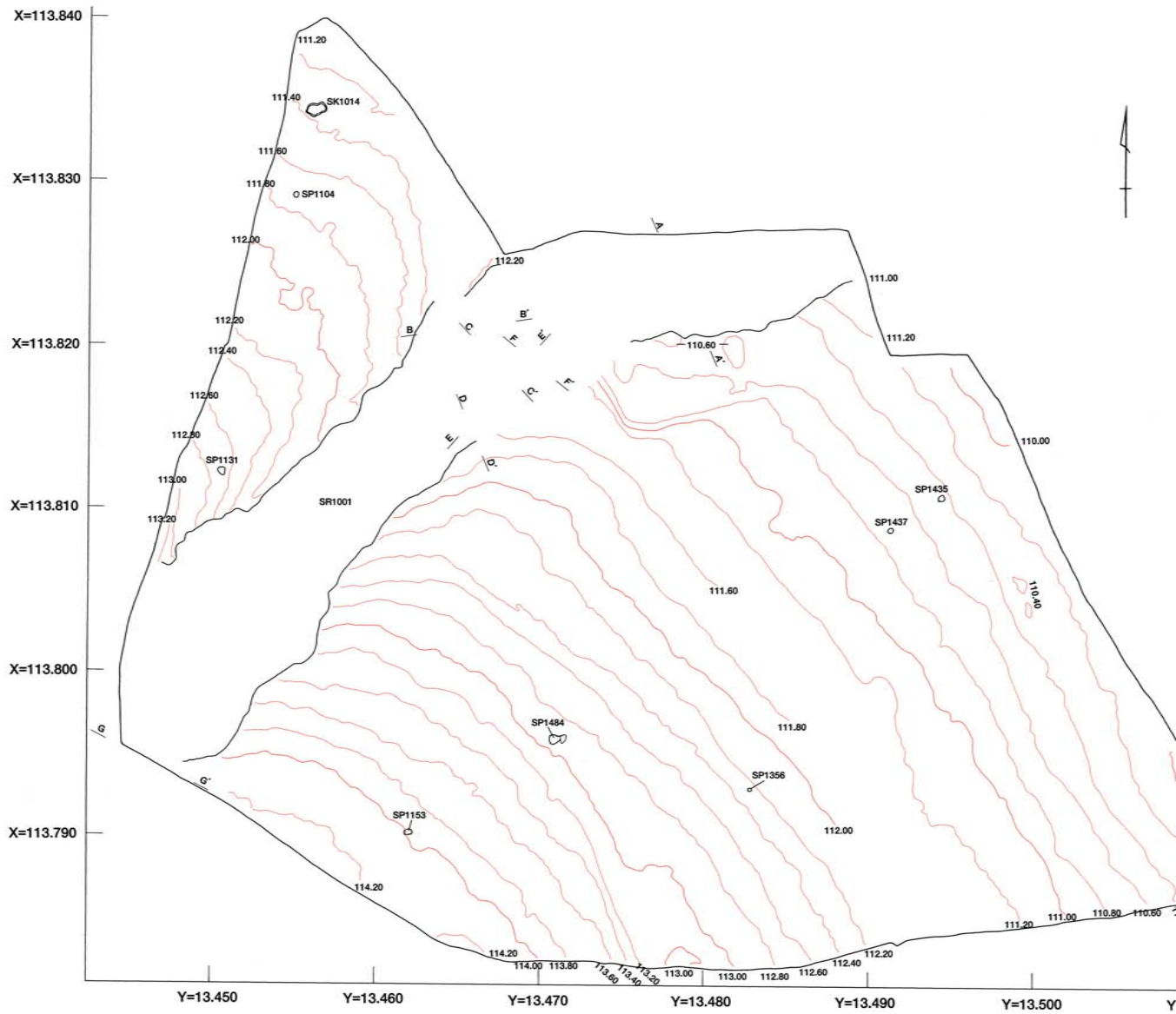


跡遺構配置図 (6・7区全体)



Y=31.710      Y=31.720      Y=31.730      Y=31.740      Y=31.750      Y=31.760

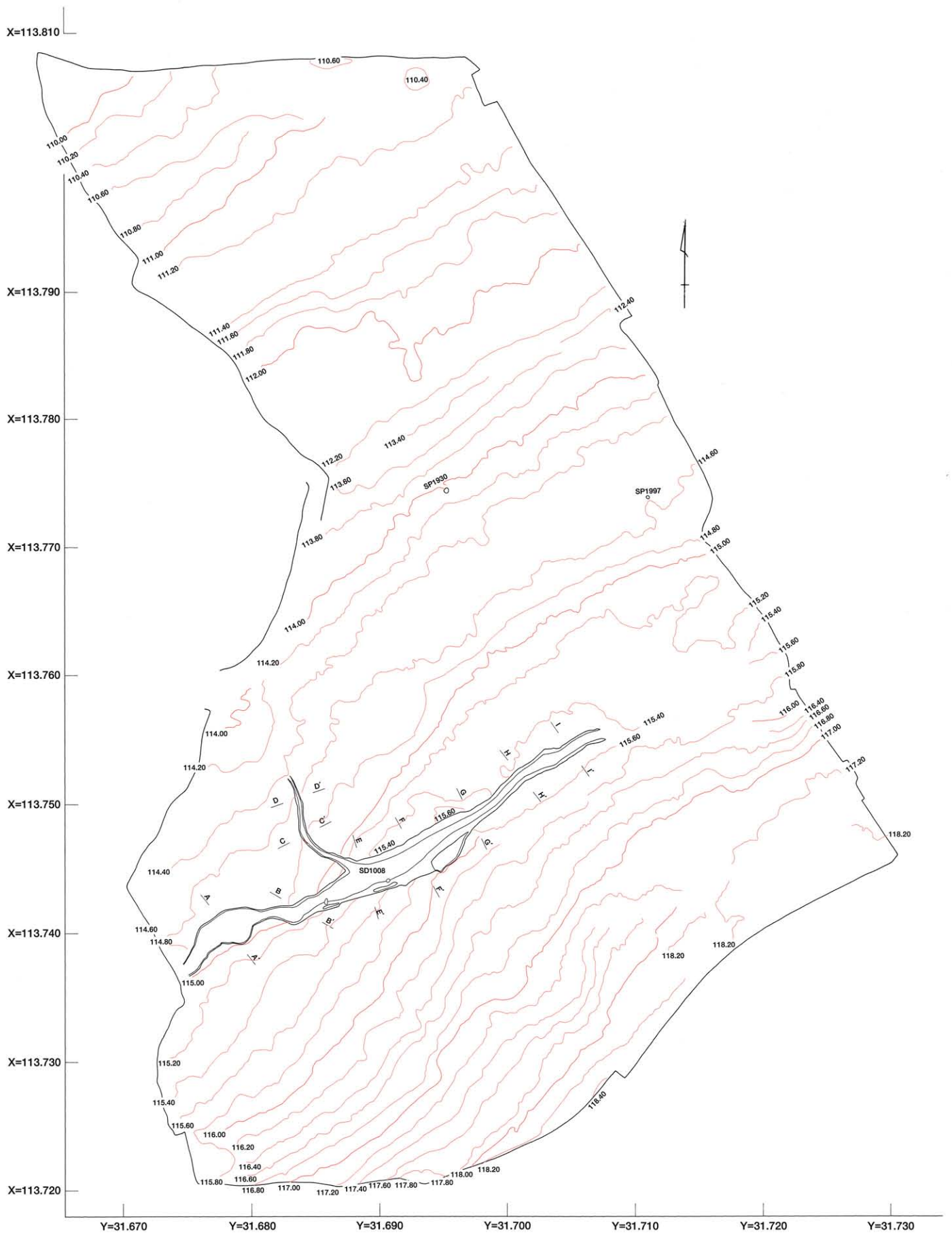




第12図 相知遺跡遺構配置図 (3区弥生時代)



第13図 相知遺跡遺構配置図（4・5区弥生時代）



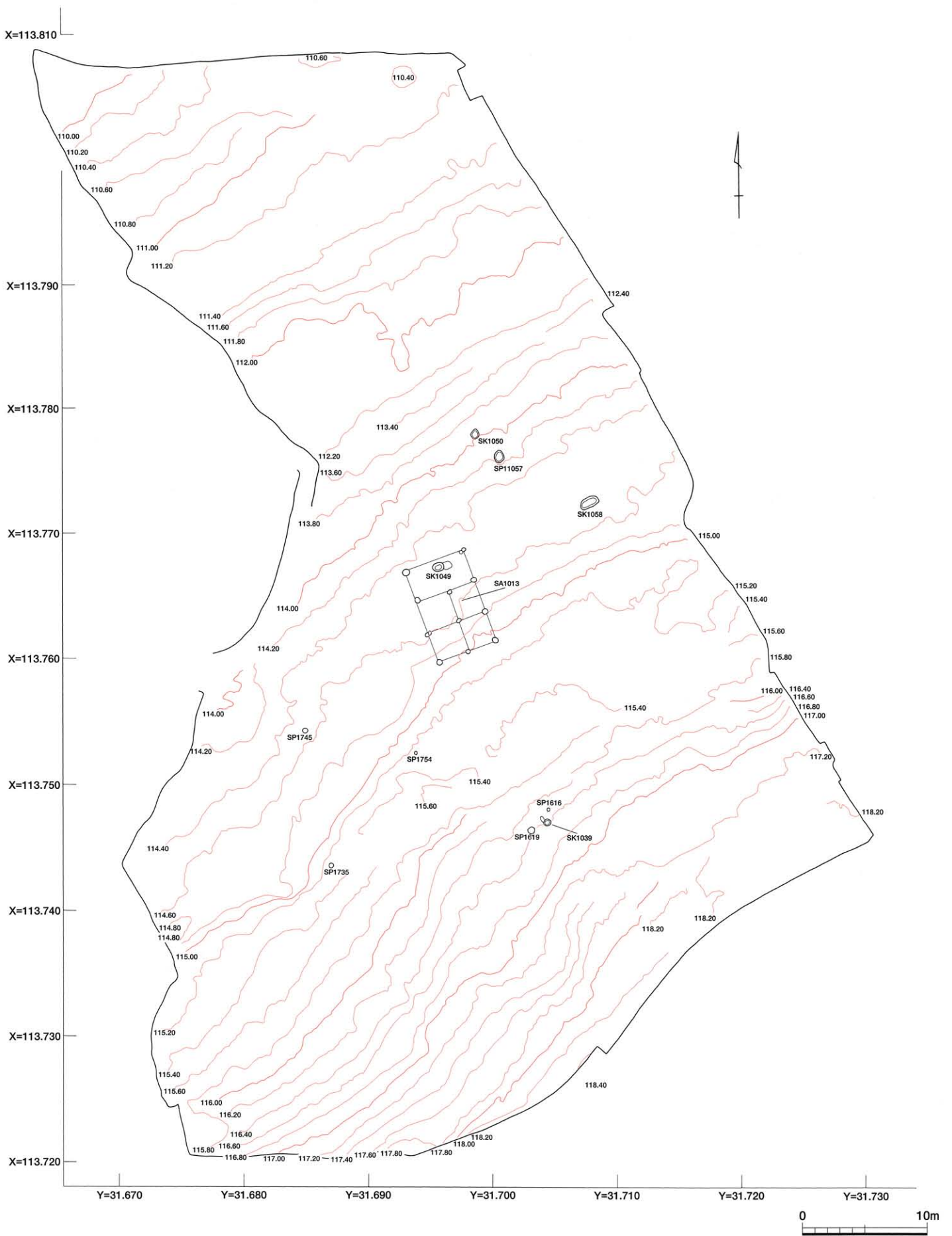
第14図 相知遺跡遺構配置図（6区弥生時代）



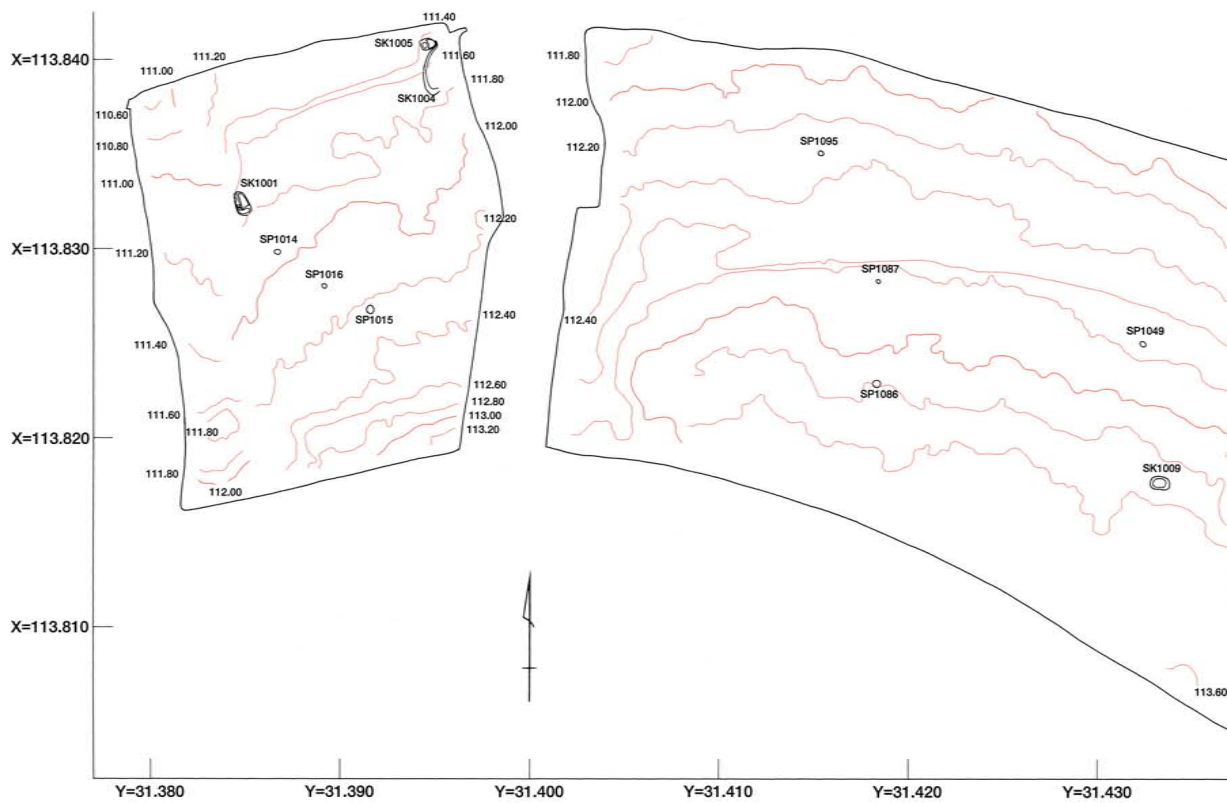




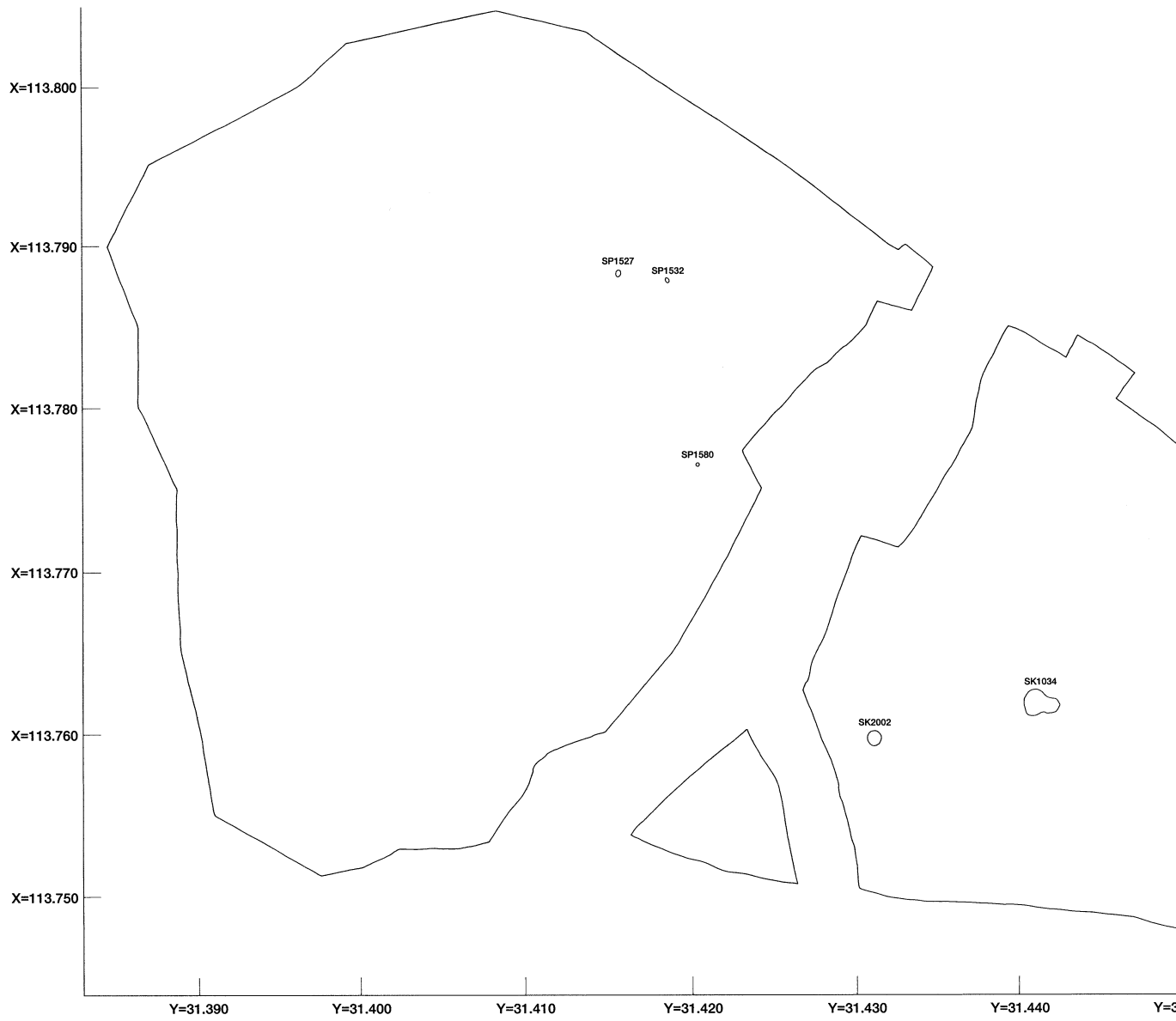
第16图 相知遺跡遺構配置図 (4・5区古代)



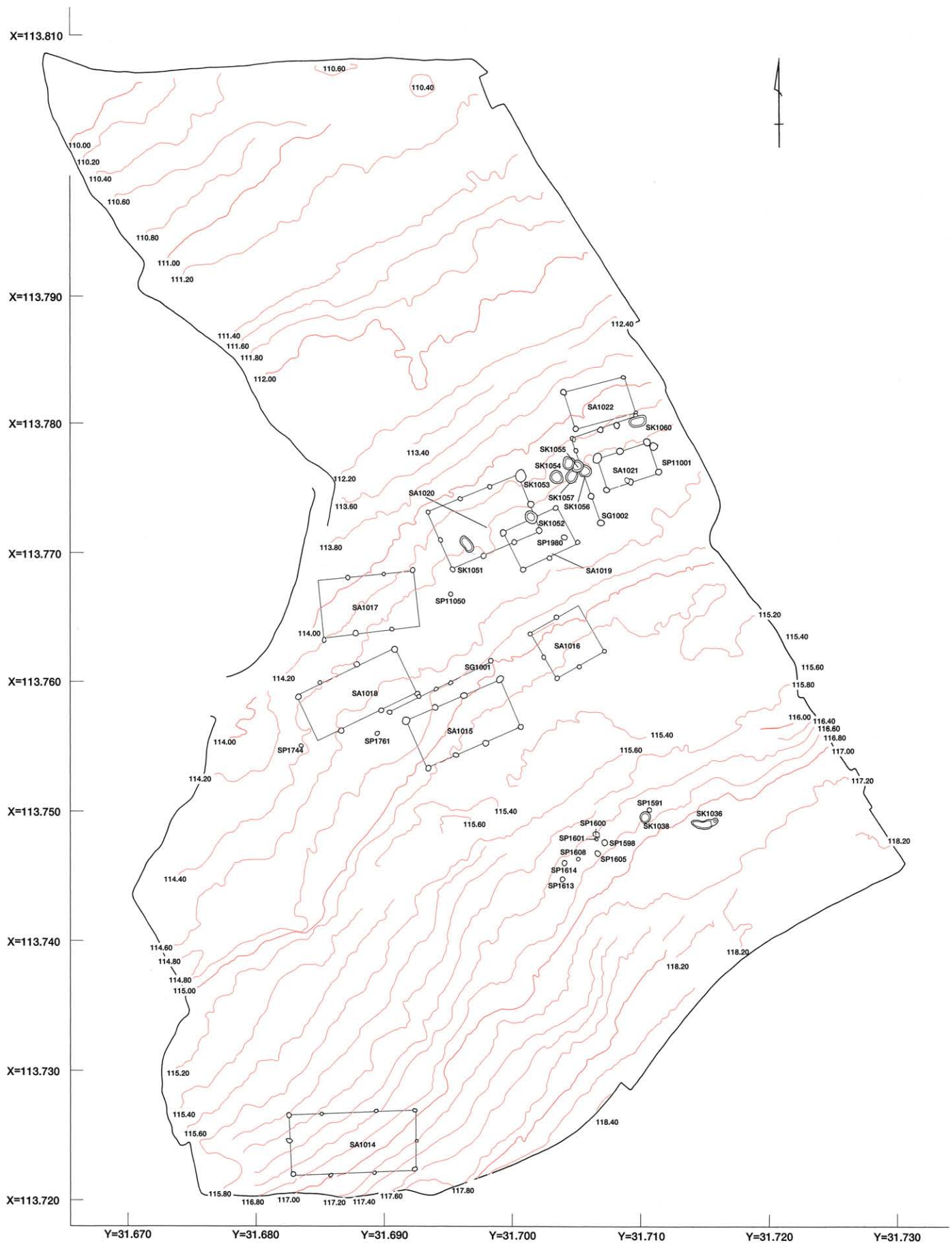
第17図 相知遺跡遺構配置図（6区古代）



第18図 相知遺跡遺構配置図（1・2区中世）

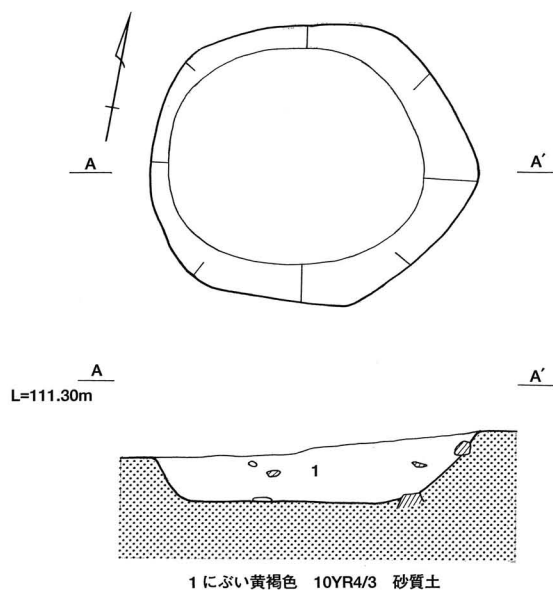


第19図 相知遺跡遺構配置図（4・5区中世）

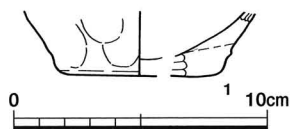


第20図 相知遺跡遺構配置図（6区中世）





第21図 1区 SK1003遺構平・断面図



第22図 1区 SK1003出土遺物実測図

### (1) 弥生時代 (第9～14図)

弥生時代の遺構および遺物はこれ以降の時代のものと同様、3区および6区に集中してみられた。しかし、遺構数自体は3区に若干多くみられるものの、古代・中世の遺構に比べて当該期の遺構数は極端に少ない。さらにそれぞれの調査区においても遺構の分布に疎密がみられ、包含層出土遺物をみても3区では自然流路(SR1001)を境にして北～北西側、6区では南西側に集中するという偏りがある。

1区～7区の調査地全体では、土坑3基、溝1条、自然流路1条、柱穴・小穴7基の合計12基が確認されたにすぎない。

### 土坑 (SK)

#### 3号土坑 (SK1003) (第21・22図)

1区の北西側、AB-7グリッドで検出した。平面形状は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、遺構規模は長軸1.08m、短軸0.92m、深度0.24mを測る。遺構断面形状は東および南側の傾斜がやや緩やかな逆台形を呈す。

遺構覆土はにぶい黄褐色を呈する砂質土が堆積す

る単一層である。

遺物は遺構覆土中より弥生土器の甕底部片が出土している。1の甕底部は平底を呈し、わずかな残存ながら緩やかに開いて立ち上がる体部をもつ。外面には幅広ながらタテ方向のヘラミガキを施す。図化できたのはこの1点のみである。

遺構の時期は出土遺物から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

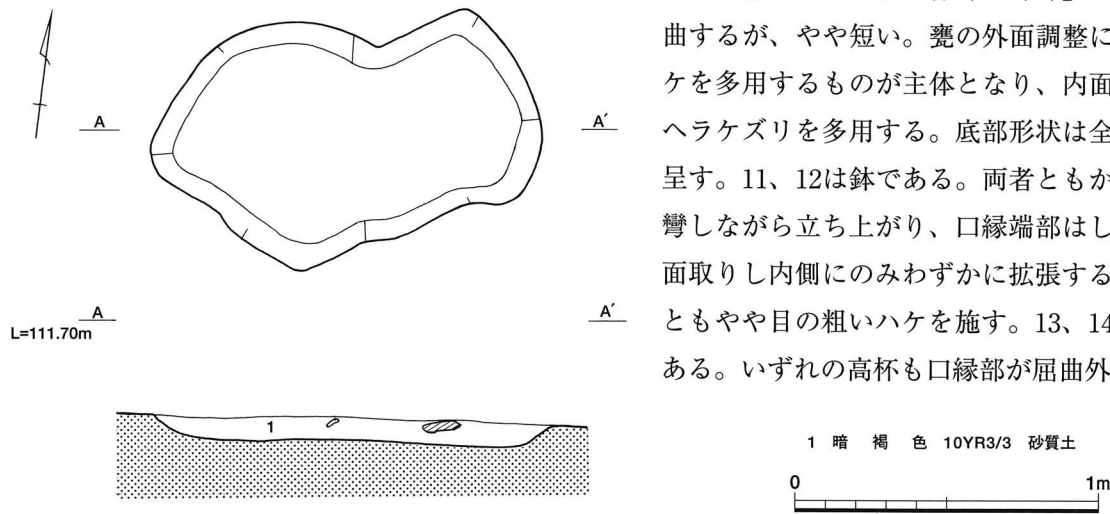
#### 14号土坑 (SK1014) (第23～25図)

3区の北西側、AA-22グリッドで検出した。遺構平面形状は東西に長軸をもち、その中央部にくびれるように短軸をもつ不整楕円形を呈する。遺構規模は長軸1.3m、短軸0.65m、深度0.1mを測る。遺構断面形状は浅い船底形を呈する。

遺構覆土は暗褐色を呈する砂質土が堆積する単一層である。

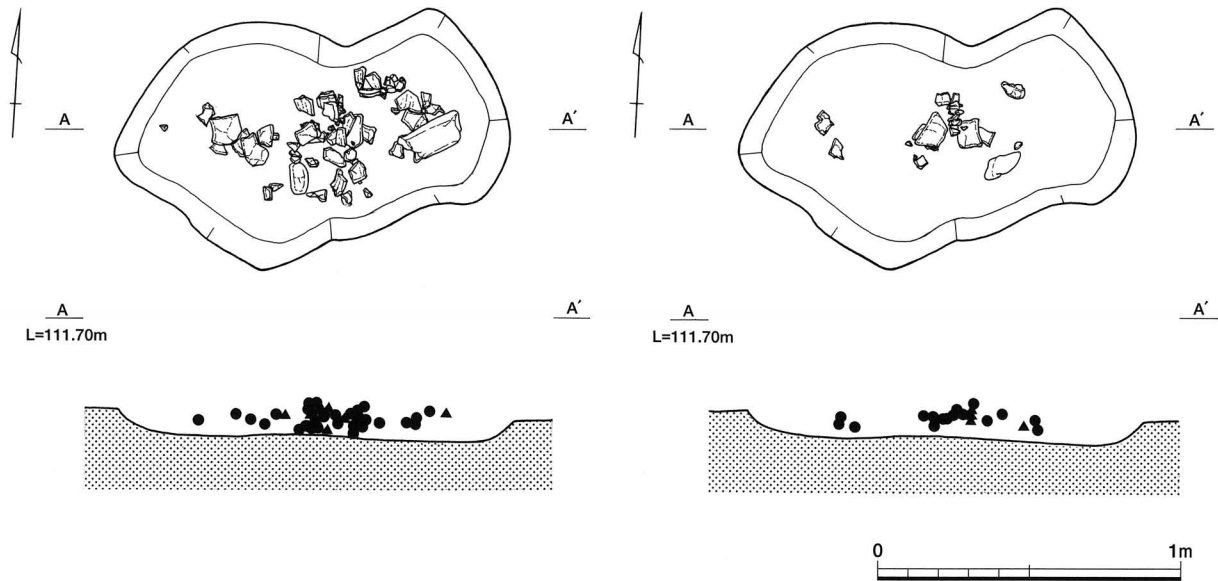
遺物は、遺構中央部からやや東側にかけてまとまって土器片や結晶片岩礫が出土している。しかし、いずれの土器も破片であり床面から若干浮いた状態であるため全ての遺物が遺構に伴うものとはいえない。廃棄されたものであろうか。

2～3は壺である。2は広口壺の口縁部のみが残存しており、わずかに外反しながらも大きく開く。口縁端部は下方に若干拡張するためか面取りはされているものの、断面は三角形に近い形状を呈する。外面はタテ方向のハケ、内面はヨコ方向のハケを施す。4～10は甕である。6、7の口縁端部には凹線が



第23図 3区 SK1014遺構平・断面図

施されるもののかなり退化してきており5に至っては施されない。口縁部は「く」の字状に屈曲するが、やや短い。甕の外面調整にはタテハケを多用するものが主体となり、内面調整にはヘラケズリを多用する。底部形状は全て平底を呈す。11、12は鉢である。両者ともかすかに内彎しながら立ち上がり、口縁端部はしっかりと面取りし内側にのみわずかに拡張する。内外面ともやや目の粗いハケを施す。13、14は高杯である。いずれの高杯も口縁部が屈曲外反した立



第24図 3区 SK1014遺物出土状況図

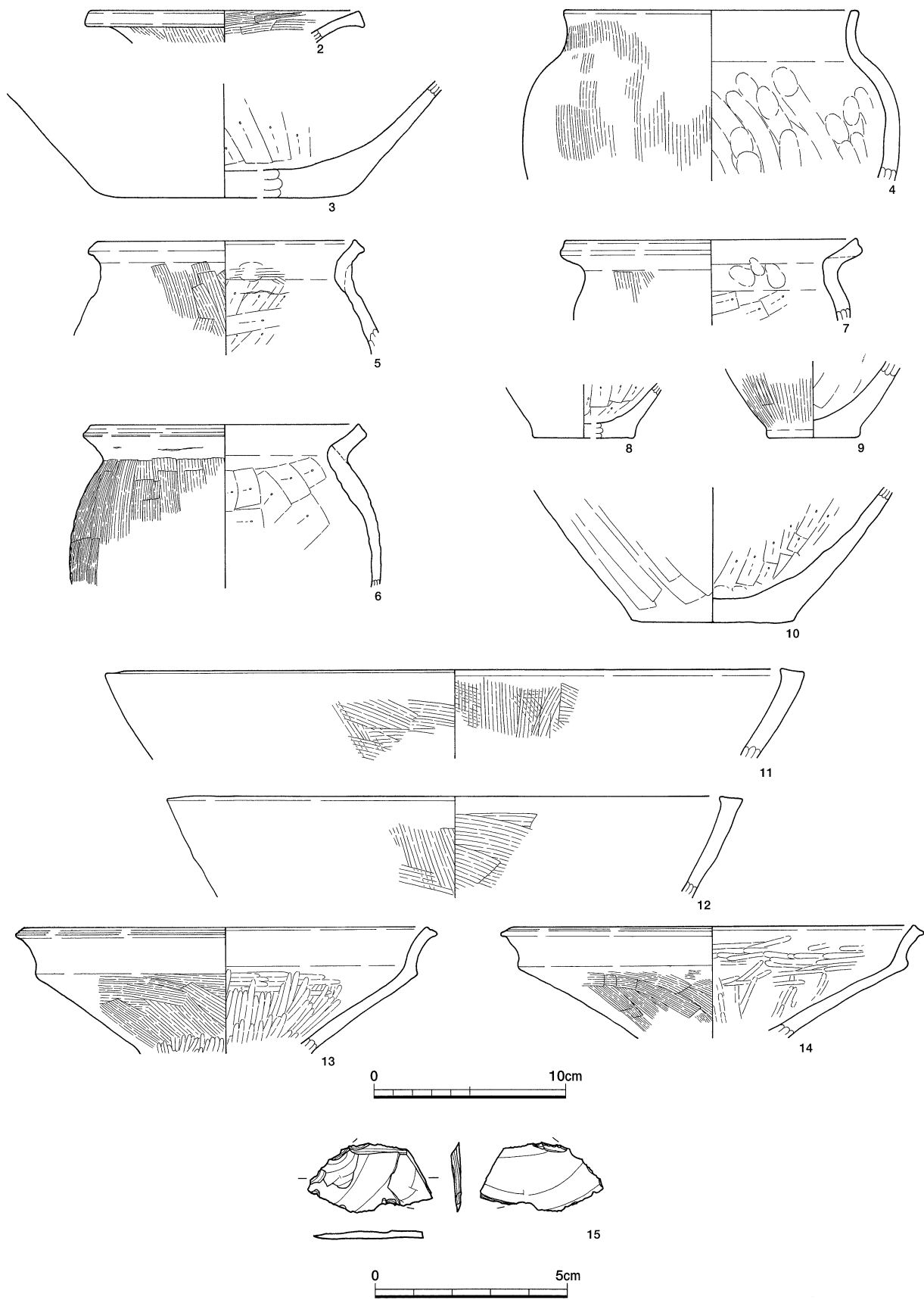
ち上がりをもち、杯部外面中に鋭い稜をもつなど弥生時代後期前半の特徴を示す。口縁端部は面を取り方形におさめる。外面調整は比較的細かいハケで仕上げ、内面調整には放射状のヘラミガキと横位のヘラミガキを施す。15はサヌカイト製の剥片である。

遺構の時期は、弥生時代後期中頃～後半である。

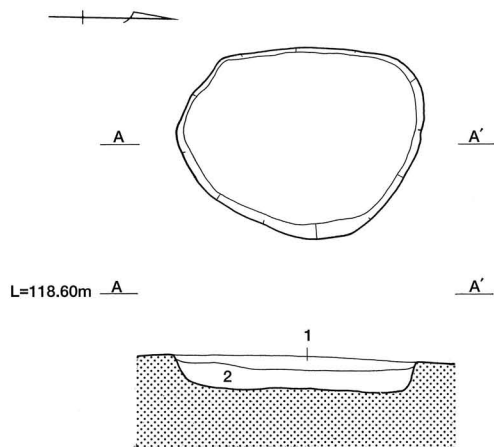
35号土坑 (SK1035) (第26・27図)

5区の中央やや西より、M-19グリッドで検出された。遺構平面形状は南北に長軸をもつ楕円形を呈する。遺構規模は長軸0.83m、短軸0.635m、深度0.11mを測る。遺構断面形状は浅い船底形である。





第25图 3区 SK1014出土遺物実測図

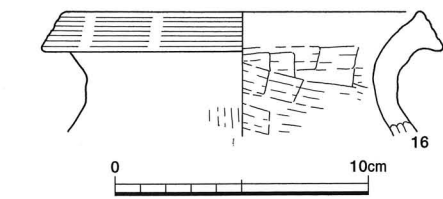


第26図 5区 SK1035遺構平・断面図

遺構覆土は2層に分層することができ、第1層が赤褐色、第2層が褐色を呈する砂質土が堆積していた。両者とも比較的水平的安定した堆積状況を示し、自然堆積による埋没がなされたと思われる。しかし遺構検出面は削平を受けていると思われ、遺構深度は非常に浅い。

遺物は弥生土器の壺1点のみを図化することができた。

16は広口短頸壺である。口縁部を肥厚させ、口縁端部は上下に拡張する。さらに3条の凹線文を巡らす。器面調整は、外面はタテ方向のハケ、内面の頸部以下はヨコ方向のやや粗いハケを施して仕上げる。遺構の時期は弥生時代後期前半である。



第27図 5区 SK1035出土遺物実測図

1	赤褐色	2.5YR4/6	砂質土	焼土	炭化物含む
2	褐色	10YR4/4	砂質土	焼土	2割程度含む

## 溝 (SD)

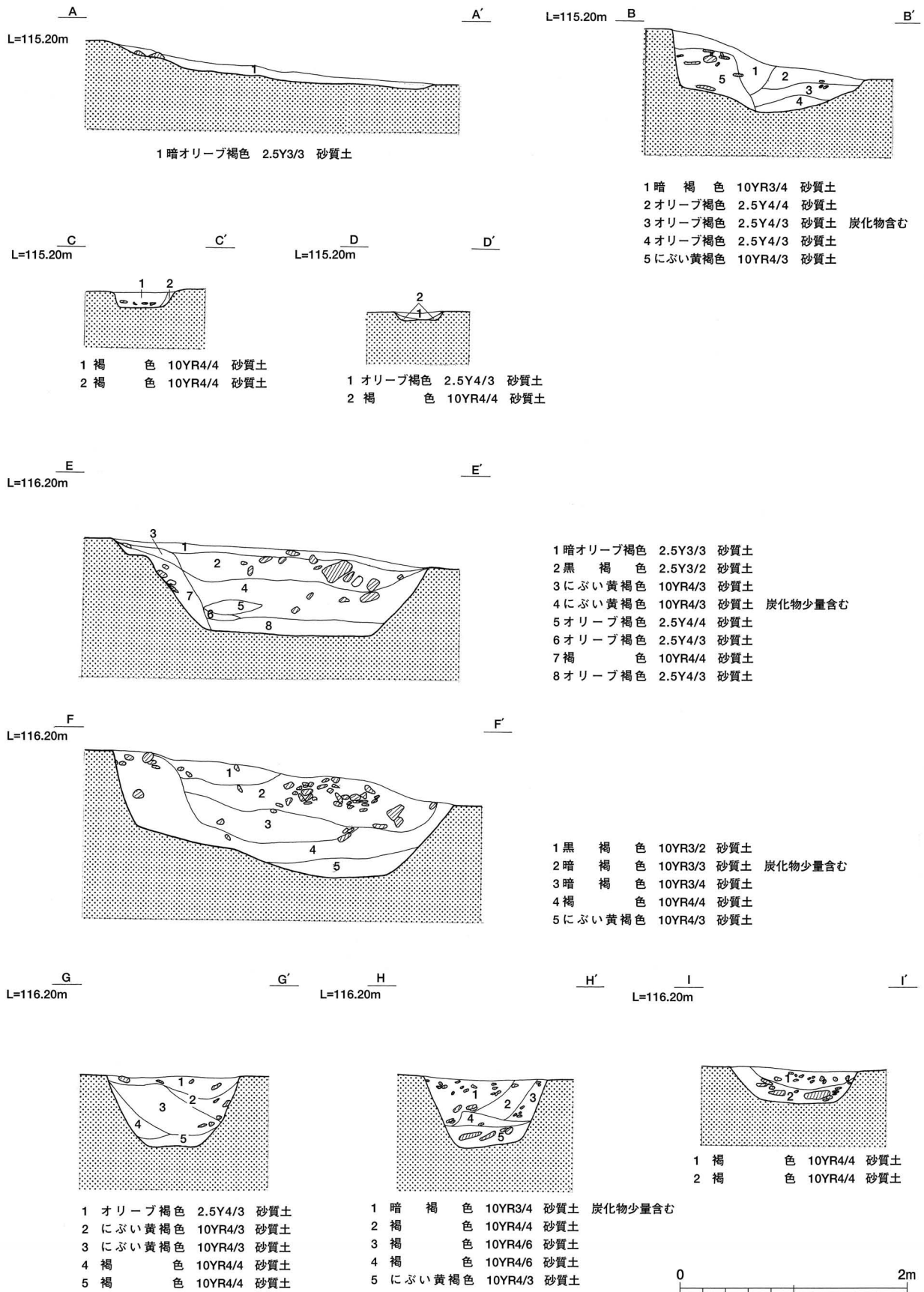
### 8号溝 (SD1008) (第14・28~30図)

6区の中央やや南側、H~L-66~72グリッドで検出された。総延長37.25m、最深深度1.07mを測る。遺構断面形状は遺構深度に深浅があるためばらつきはあるが、おおむね逆台形を呈する。

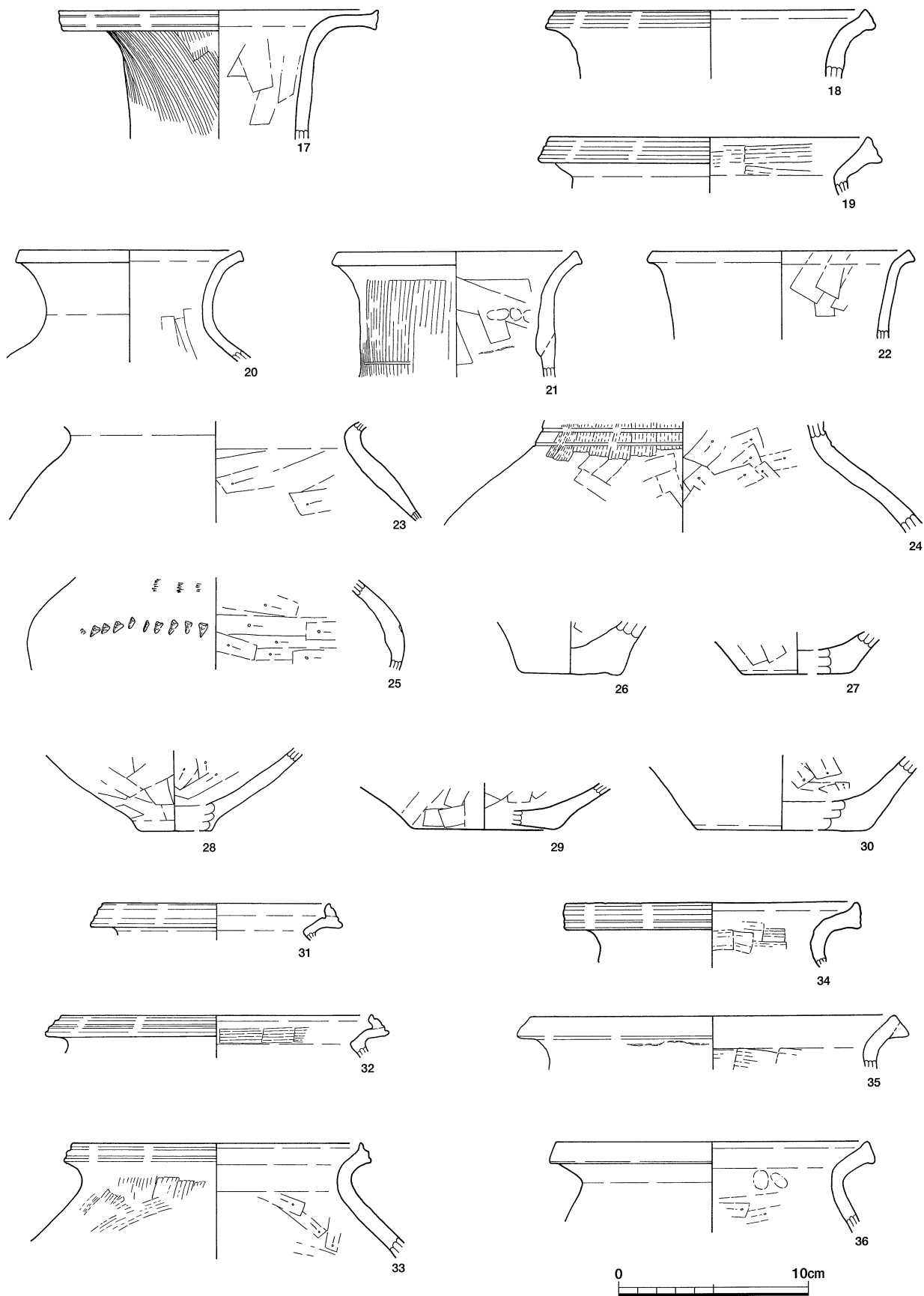
遺構覆土は観察地点により堆積層の違いがみられるが、最大で8層に分層することができた。全体を通しての土質は砂質土が堆積しているのみでシルト質または粘質土などの流水および滞水状況を示す堆積はみられなかった。堆積土の色調はおもに褐色系を呈し、各層に礫を多く含み部分的に炭化物を含んでいた。また土層断面観察により堆積状況をみると、B-B'では1~4層、E-E'では1~3層、F-F'では1~3層、G-G'では1~4層、H-H'では1~4層、I-I'では1層において明らかに逆台形を呈する溝の断面形状が見て取れる。よって、この6ヶ所の断面観察の結果において土質や堆積土の色調において明確な差はみられないものの、当該遺構は再掘削が行われた可能性があるとみて良いであろう。

遺物は完形品の出土はなく、溝の床面より浮いた状態で出土した。いずれも破片であるが44点を図化することができた。

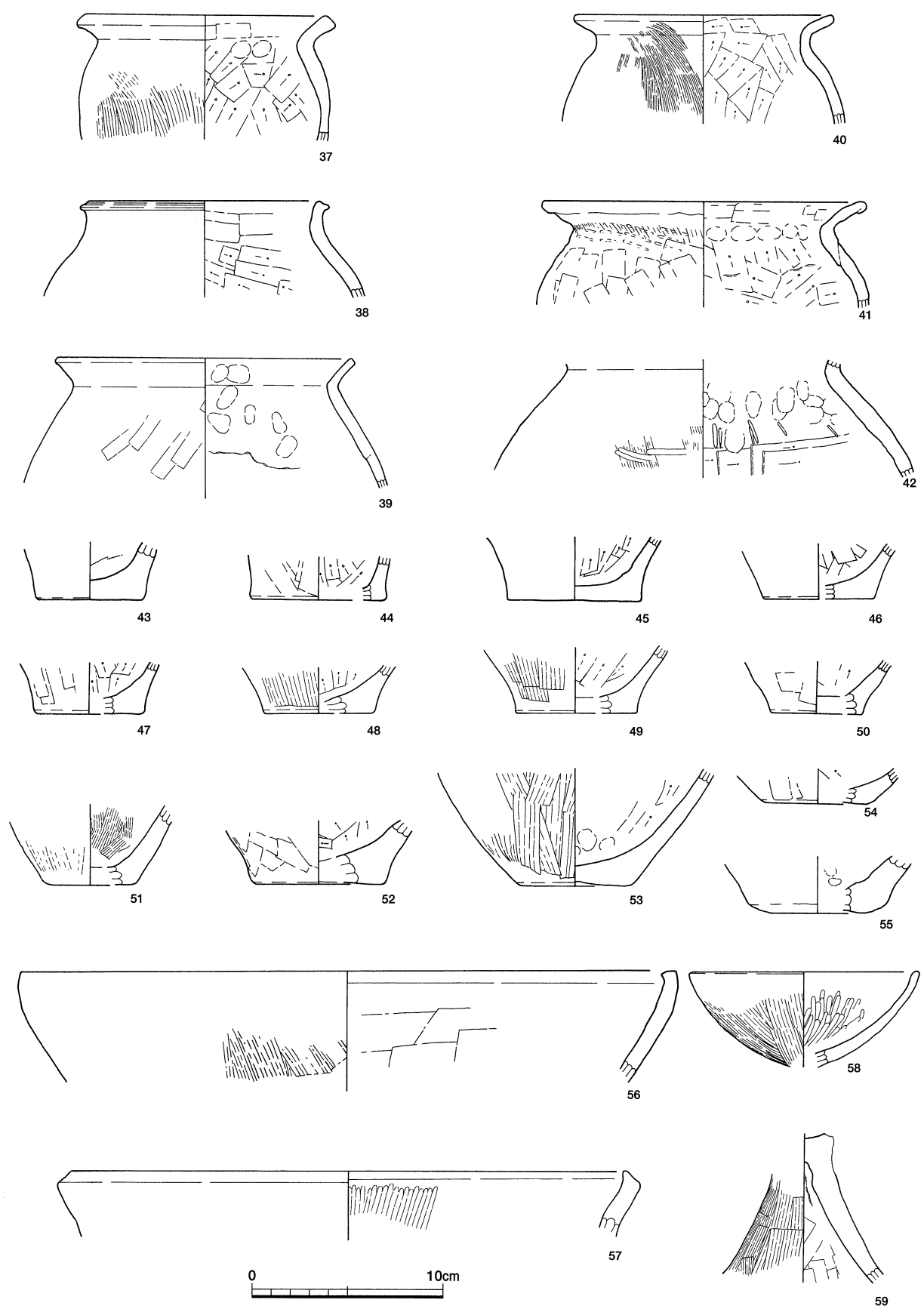
17~30は壺である。18と19は口縁端部を上下に拡張し、明確な凹線を2条施している。一方17は口縁端部がわずかに上下方向に拡張するものの凹線文は退化傾向にある。さらに20~22に至っては口縁端部の拡張も弱まり凹線文も施されず、ヨコナデで仕上げられるのみである。底部はいずれも平底を呈す。31~55は甕である。口縁端部に凹線をもつ31、32、33、34、38口縁部が屈曲または大きく外反する。口縁部が「く」の字状を呈する41は胴部をタタキにより成形したのちにタテ方向のハケを施し、さらに板



第28図 6区 SD1008土層断面図



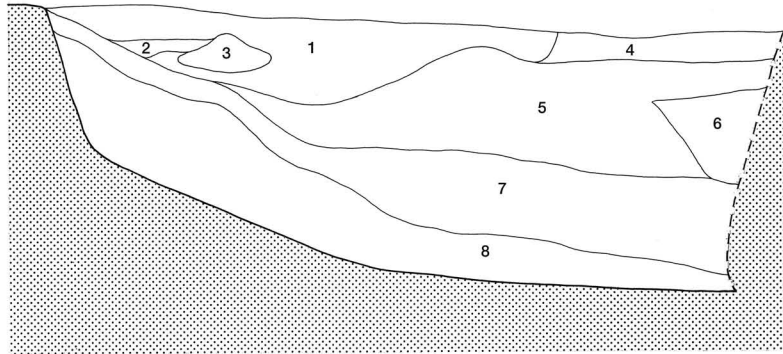
第29图 6区 SD1008出土遺物実測図(1)



第30图 6区 SD1008出土遗物实测图(2)

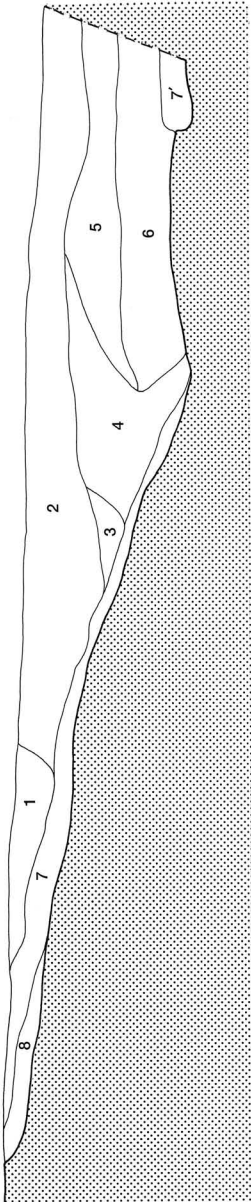
L=111.80m B

B'



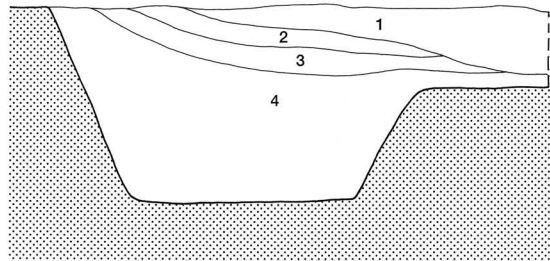
- 1 褐色 10YR4/4 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 3 褐色 10YR4/4 砂質土
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 5 褐色 10YR4/5 砂質土 炭化物極少量含む
- 6 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土
- 7 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 炭化物極少量含む
- 8 オリーブ褐色 2.5Y4/6 砂質土

A'



L=111.80m C

C'



- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土
- 2 暗褐色 10YR3/4 砂質土 炭化物少量含む
- 3 褐色 10YR4/4 砂質土 炭化物少量含む
- 4 褐色 10YR4/6 砂質土

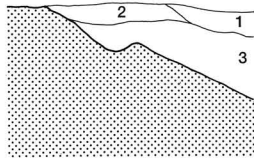


A  
L=112.00m

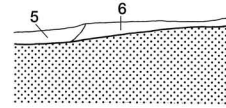
- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土
- 2 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土
- 3 オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 炭化物含む
- 4 褐色 10YR4/4 砂質土 炭化物含む
- 5 オリーブ褐色 2.5Y4/6 砂質土 炭化物含む
- 6 褐色 10YR4/6 砂質土
- 7 暗褐色 10YR3/4 砂質土
- 7' 暗褐色 10YR3/4 砂質土 炭化物含む
- 8 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土

第31図 3区 SR1001土層断面図(1)

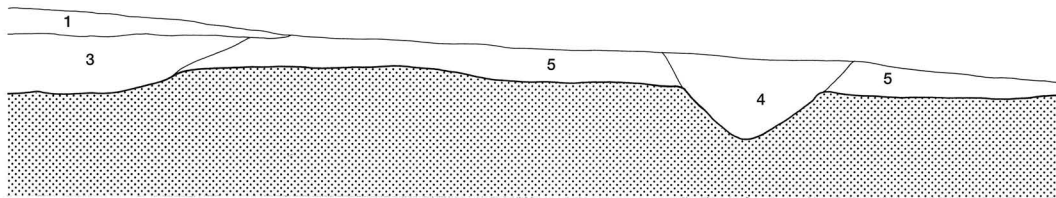
D  
L=112.00m



L=112.00m F

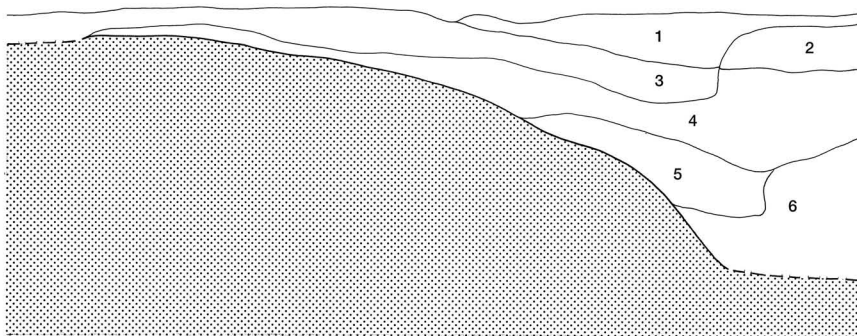


E  
L=112.00m



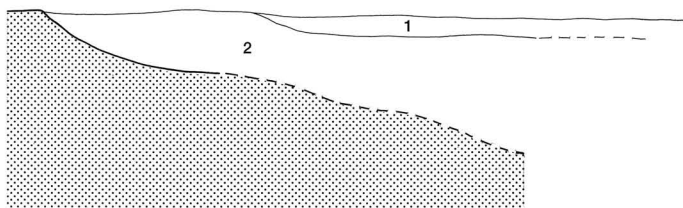
- 1 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土
- 2 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土
- 3 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 5 暗褐色 10YR3/4 砂質土
- 6 褐色 10YR4/4 砂質土

G  
L=114.80m



- 1 にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質土
- 2 オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルト質土
- 3 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト質土
- 4 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト質土
- 5 オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土
- 6 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質土

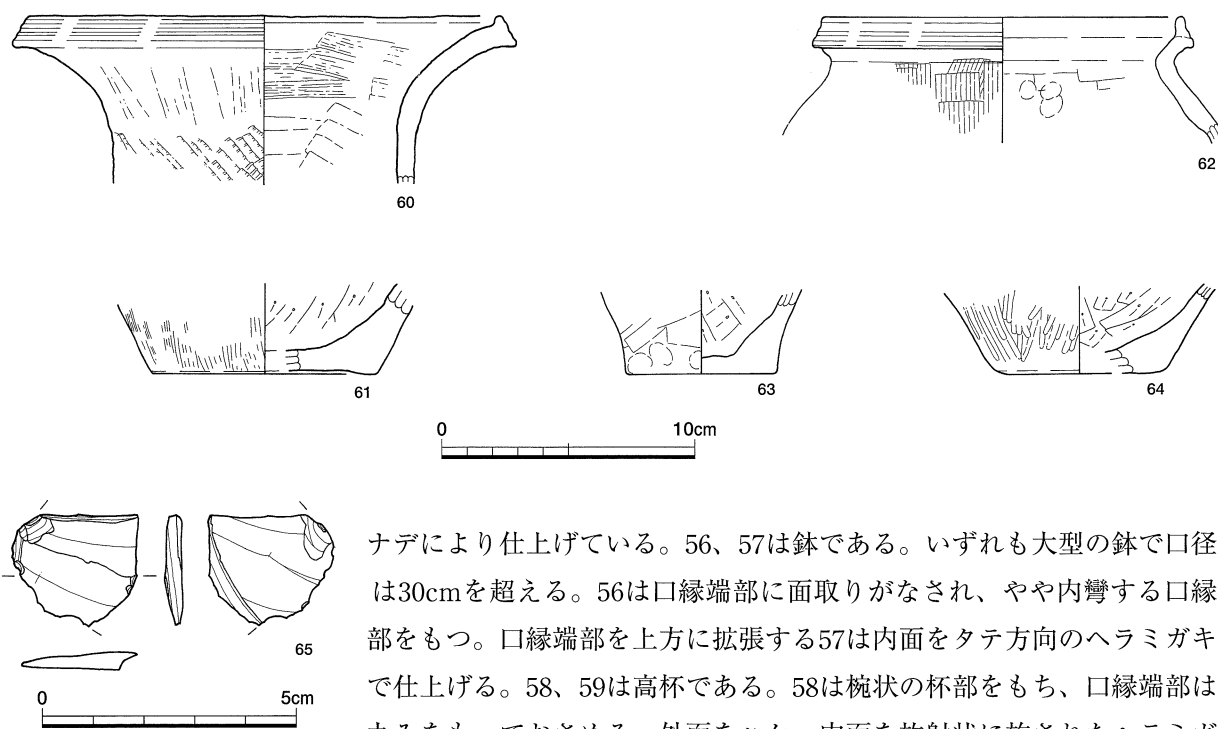
H  
L=115.90m



- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土
- 2 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土



第32図 3・4区 SR1001土層断面図(2)



第33図 3・4区 SR1001  
出土遺物実測図

ナデにより仕上げている。56、57は鉢である。いずれも大型の鉢で口径は30cmを超える。56は口縁端部に面取りがなされ、やや内彎する口縁部をもつ。口縁端部を上方に拡張する57は内面をタテ方向のヘラミガキで仕上げる。58、59は高杯である。58は椀状の杯部をもち、口縁端部は丸みをもっておさめる。外面をハケ、内面を放射状に施されたヘラミガキで仕上げる。

以上出土した壺、甕を通じて観察してみると口縁部に明瞭な凹線を数条施すものと、退化した凹線文や擬凹線文を施したものがある。また、口縁部が「く」の字状に屈曲した素口縁の甕や杯部が椀状を呈し内面に放射状のヘラミガキを施す高杯もみられる。このことから、出土土器に時期差があることが読みとれる。よって古い様相をもつものが本遺構の開削時期を示し、最新の様相をもつものが遺構埋没の最終段階に混入したものと考えられる。

遺構の時期は弥生時代後期前半に開削され、後期中頃～後半に埋没したものと思われる。

## 流路 (SR)

### 1号流路 (SR1001) (第13・31～33図)

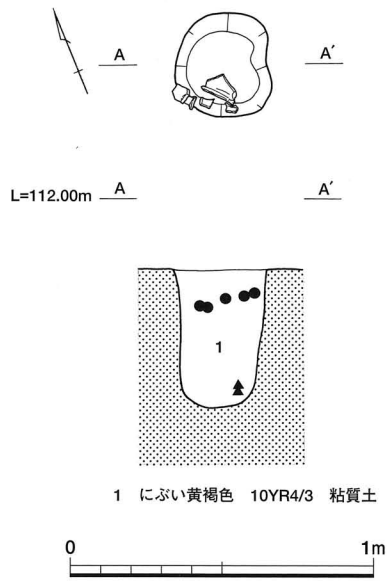
3区の北西から4区の東および5区の西側にかけて位置する自然流路である。3区においては北側で調査区外へと延び、南側は調査区の西側に沿って続き4・5区方向へと延びる。4区では流路上端の一部が確認されあまり広がり認められず、5区においては流路東側の立ち上がりが蛇行を繰り返して南側の調査区外へと延びてゆく。3～5区の地形がいずれも北側に向けての傾斜方向をもつことから、この流路の流水方向は南から北へとするものと考えられる。調査地全体がそうであるようにこの流路も全体的な削平を受けていると思われ、また3区において溝SD1001～1003に切られる。確認できた規模は総延長9.5m、最大幅10.4m、最大深度は約1.5m以上を測る。遺構断面形状は不整船底形を呈する。

遺構覆土には褐色系の砂質土が多く堆積していたが、一部オリーブ褐色を呈するシルト層が堆積していることから、一時期緩やかな流水もしくは滞水状況にあったことが推測される。

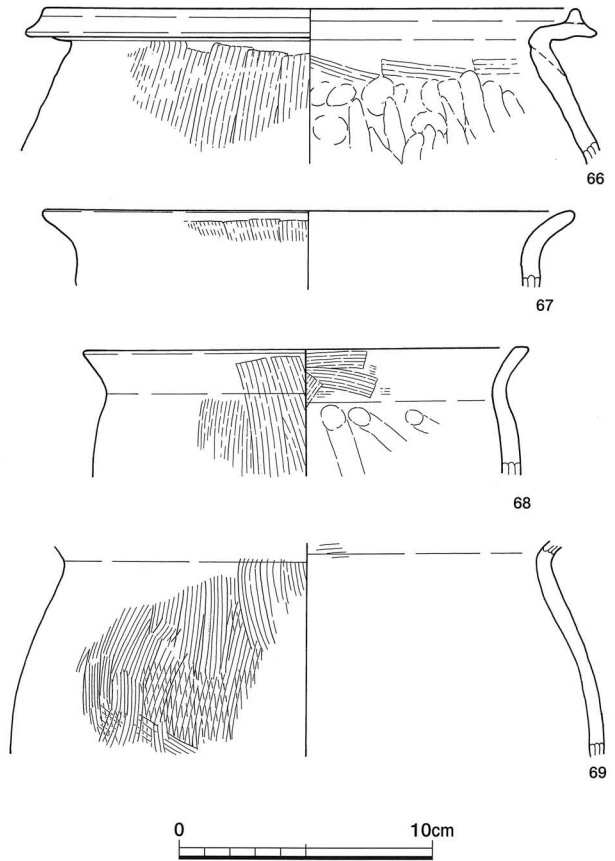
遺物は部分的な調査のため出土量自体は少なかったが、壺2点、甕3点、楔形石器1点の計6点を図化することができた。

60、61は壺である。60は大きく外反する口縁部をもち、口縁端部は上下にわずかに拡張したのち3条

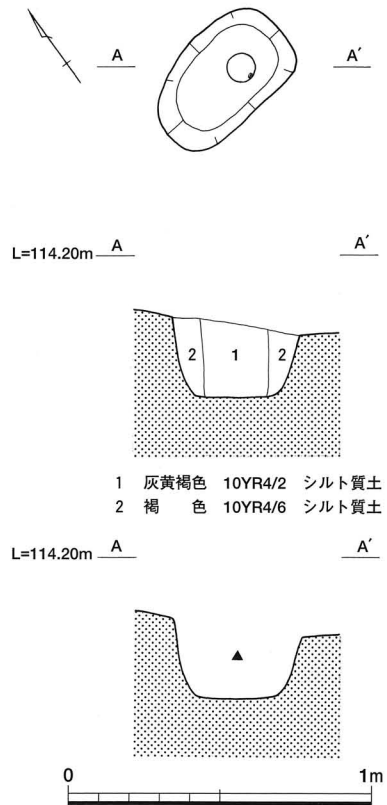




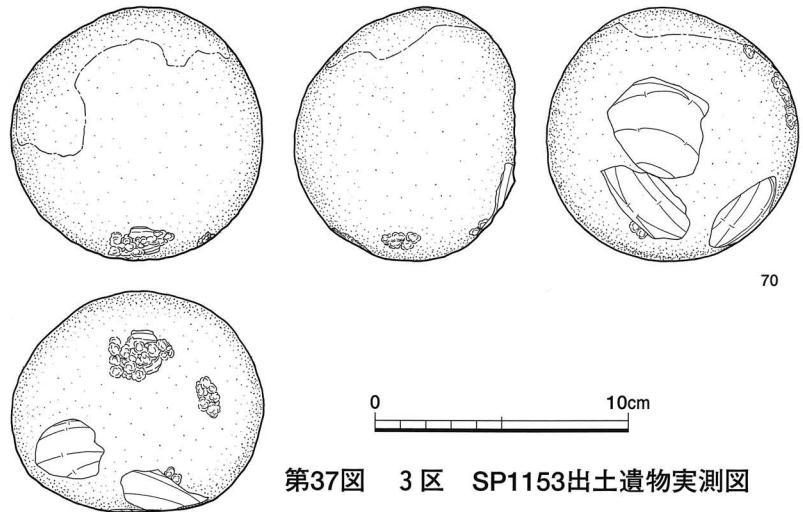
第34図 3区 SP1104遺構平・断面図



第35図 3区 SP1104出土遺物実測図



第36図 3区 SP1153遺構平・断面図



第37図 3区 SP1153出土遺物実測図

の凹線を施す。外面はタテのちナナメ方向のハケを施し、ハケ工具のエッジ痕を明瞭に残す。62～64は甕である。62は「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部はわずかに下方に拡張する一方大きく上方にも拡張し2条の凹線を施す。外面はタテ方向のハケを施し、内面の頸部直下には指頭圧痕がわずかに認められる。61～64の底部は、壺・甕ともに平底を呈する。65の楔形石器はサヌカイト製である。

遺構の時期は遺構の切り合いとおおむね出土遺物から判断して、弥生時代後期前半に埋没したものと考えられる。

## 柱穴・小穴（SP）

### 104号小穴（SP1104）（第34・35図）

3区の西側に位置する。検出グリッドはX-18グリッドである。遺構平面形状は不整形円形を呈し、遺構断面形状は船底形を呈する。遺構規模は径0.36m、遺構深度0.45mを測る。

遺構覆土はにぶい黄褐色を呈する粘質土が堆積する単一層である。

遺物はいずれも底から浮いた状態にあったが、遺構の南側に偏り出土している。

遺物は弥生土器4点を図化することができた。66～69は甕である。66は口縁部の屈曲がつよく、口縁端部は上下に拡張する。外面はタテ方向のハケを施し、内面は頸部付近にヨコ方向のハケが施されるものの胴部から続くユビナデが強く施され、部分的にユビオサエを補足している。67～69は口縁部の屈曲は比較的緩やかで「く」の字状を呈し、口縁端部は丸くあるいは面取りがされておさまる。いずれも外面はタテ方向のハケが施される。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半頃と考えられる。

### 153号小穴（SP1153）（第36・37図）

3区の南側に位置する。検出グリッドはS-23グリッドである。遺構平面形状は北東-南西に主軸をもつ不整形楕円形を呈し、遺構断面形状は逆台形を呈する。遺構規模は長軸0.52m、短軸0.42m、遺構深度0.26mを測る。

遺構覆土は2層に分層することができ、灰黄褐色を呈する第1層と褐色を呈する第2層が堆積していた。いずれの土質もシルト質を呈する。

遺物は遺構中央やや北よりの位置で、底から浮いた状態で敲石が1点出土した。

70は閃緑岩を用いた敲石である。球形に近い形状の礫を素材としており、大きく2ヶ所に敲打痕が認められる。

### 356号小穴（SP1356）（第38図）

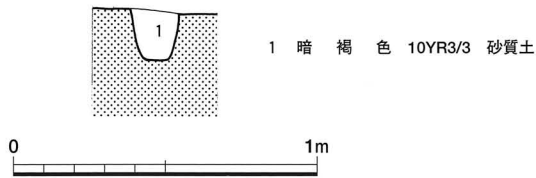
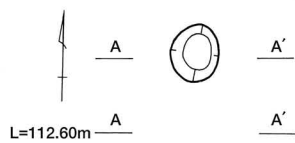
3区の中央南側に位置する。検出グリッドはS-27グリッドである。遺構平面形状は円形を呈し、遺構断面形状は逆台形を呈する。遺構規模は径0.2m、遺構深度0.17mを測る。

遺構覆土は暗褐色を呈する砂質土が堆積する単一層である。

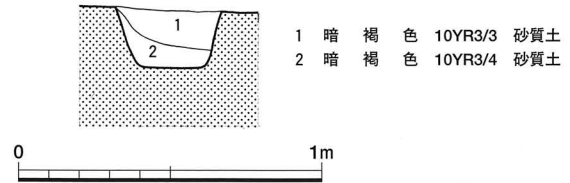
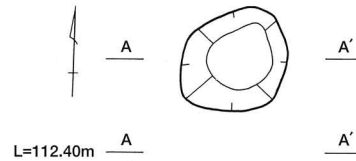
遺物は図化することはできなかったが、弥生土器片が出土している。

### 435号小穴（SP1435）（第39図）

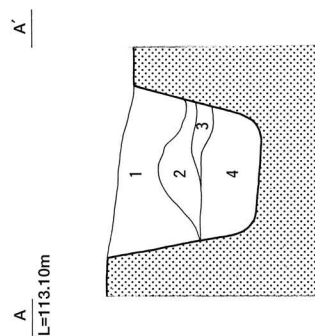
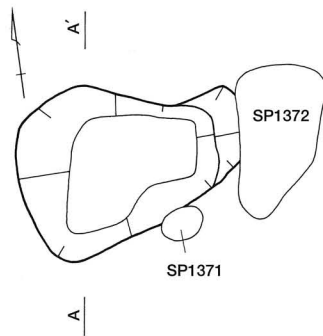
3区の中央やや東よりに位置する。検出グリッドはW-29グリッドである。遺構平面形状は不整形円形を呈し、遺構断面形状は逆台形を呈する。遺構規模は径0.4m、遺構深度0.2mを測る。



第38図 3区 SP1356遺構平・断面図



第39図 3区 SP1435遺構平・断面図



- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土 炭化物含む
- 2 黒褐色 10YR2/3 砂質土 炭化物含む
- 3 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 4 灰褐色 10YR4/2 砂質土 炭化物含む

第40図 3区 SP1484遺構平・断面図

遺構覆土は2層に分層することができ、いずれも暗褐色を呈する砂質土が堆積していた。

遺物は図化することはできなかったが、弥生土器片が出土している。

#### 484号小穴（SP1484）（第40図）

3区の中央やや南寄りに位置する。検出グリッドはT-25グリッドである。遺構の東側と南側をそれぞれSP1372とSP1371に切られる。遺構平面形状は北側がくびれる不整楕円形を呈し、遺構断面形状は逆台形を呈する。

遺構覆土は4層に分層することができた。多少差があるもののいずれも褐色系の色調を呈する砂質土が堆積し、1、2、4層には炭化物を含んでいた。

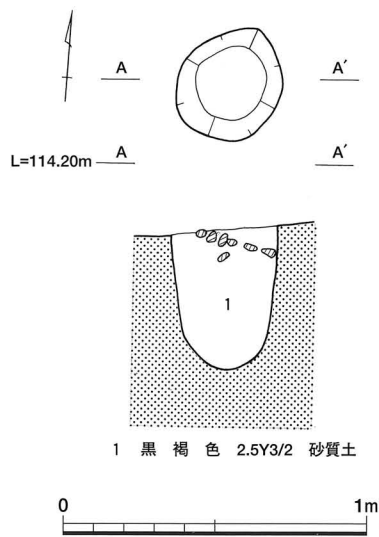
遺物は図化することはできなかったが、弥生土器片が出土している。

#### 930号小穴（SP1930）（第41・42図）

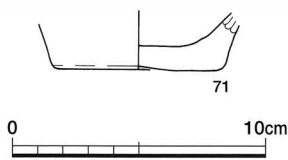
6区の中央やや北寄りに位置する。検出グリッドはO・P-70グリッドである。遺構平面形状は円形を呈し、遺構断面形状は船底形を呈する。遺構規模は径0.4m、遺構深度0.48mを測る。

遺構覆土は黒褐色を呈する砂質土が堆積する単一層である。

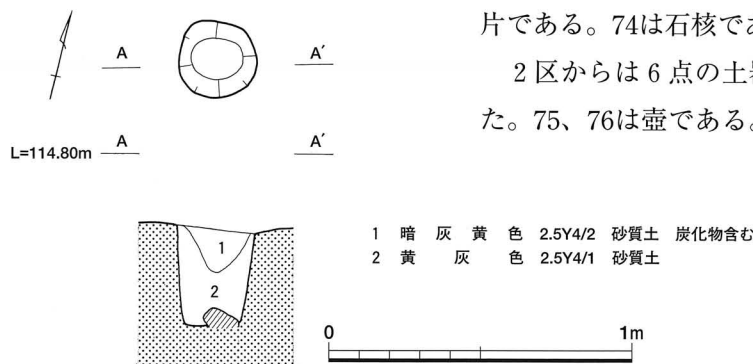
遺物は弥生土器を1点図化することができた。71は甕の底部片である。平底を呈し、外面はナデ、内面は板ナデによる調整が施される。



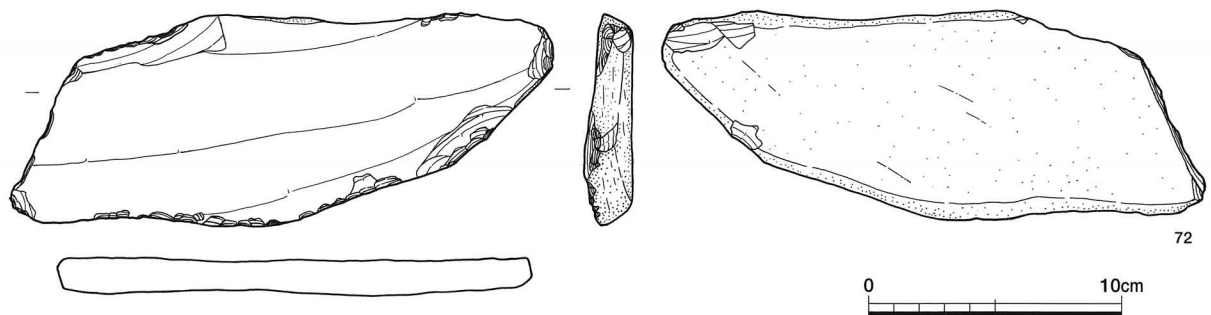
第41図 6区 SP1930遺構平・断面図



第42図 6区 SP1930出土遺物実測図



第43図 6区 SP1997遺構平・断面図



第44図 6区 SP1997出土遺物実測図

### 997号小穴 (SP1997) (第43・44図)

6区の中央東側に位置する。検出グリッドはO-73グリッドである。遺構平面形状は円形を呈し、遺構断面形状は逆台形を呈する。遺構規模は径0.26m、遺構深度0.32mを測る。

遺構覆土は2層に分層することができ、暗灰褐色と黄褐色を呈するいずれも砂質土が堆積していた。また、1層には炭化物を含んでいる様子が確認できた。

遺物は石核が1点出土している。72は板状の結晶片岩を石材とした石核である。

### 包含層出土遺物 (第45~54図)

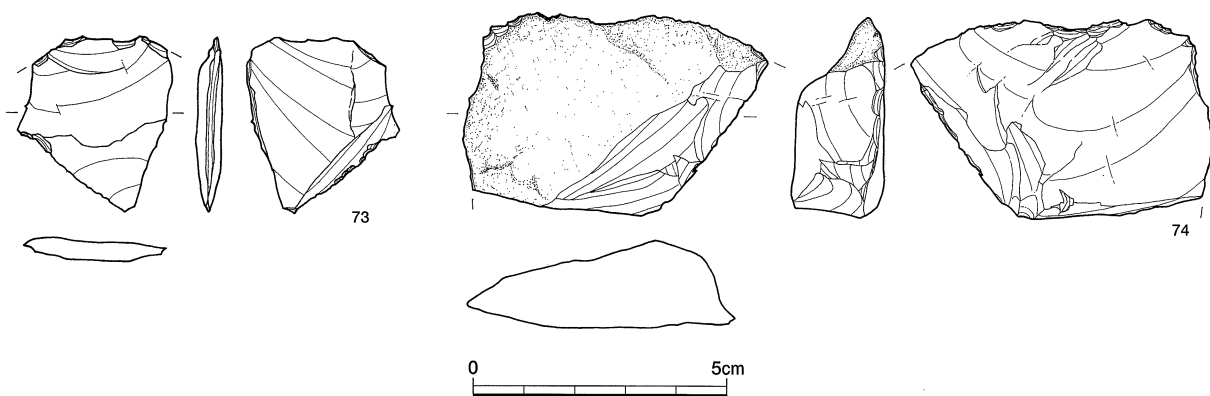
当該期の包含層出土遺物は主に3区から多く出土しており(第47~49図)、さらにこれらの遺物は3区の中でも南西から北東への流水方向をもつ自然流路の北側(調査区の北西側)に集中する傾向にある。これは同様の範囲に弥生時代中期最末~後期にかけての遺構群が広がりを見せていることと合致する。出土遺物の内の一部は遺構が削平された際に流出したものと考えられる。

1区においては、図化できるような当該期土器の出土はなく、2点の石器を図化したにとどまる。73はサヌカイトの剥片である。74は石核である。石材には頁岩を使用する。

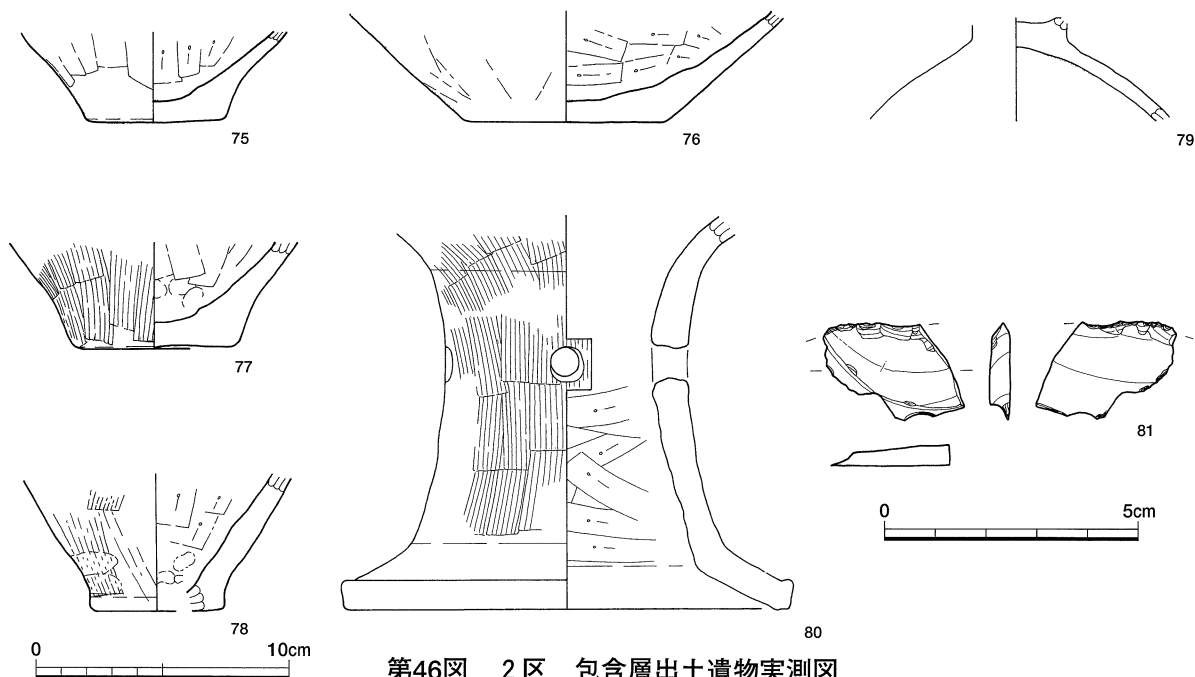
2区からは6点の土器と1点の石器を図化することができた。75、76は壺である。77、78は甕である。壺・甕のいずれも底部のみの出土であり、平底を呈す。79は全体的に磨滅しているものの肥厚部の調整がやや粗く、底部としてはやや華奢な感もみられるため蓋とした。80は器台であ

る。器受け部は欠損するが、胴部上半以下は残存している。胴部はあまりくびれることはなく、屈曲しながら開く底部をもつ。底端部は上方にわずかに拡張し、しっかりと面取りされている。外面調整はタテ方向のハケが施されたのちに4方向の円形透し孔が穿孔される。内面はヨコあるいはナナメ方向のヘラケズリで仕上げられる。81はサヌカイトの剥片である。

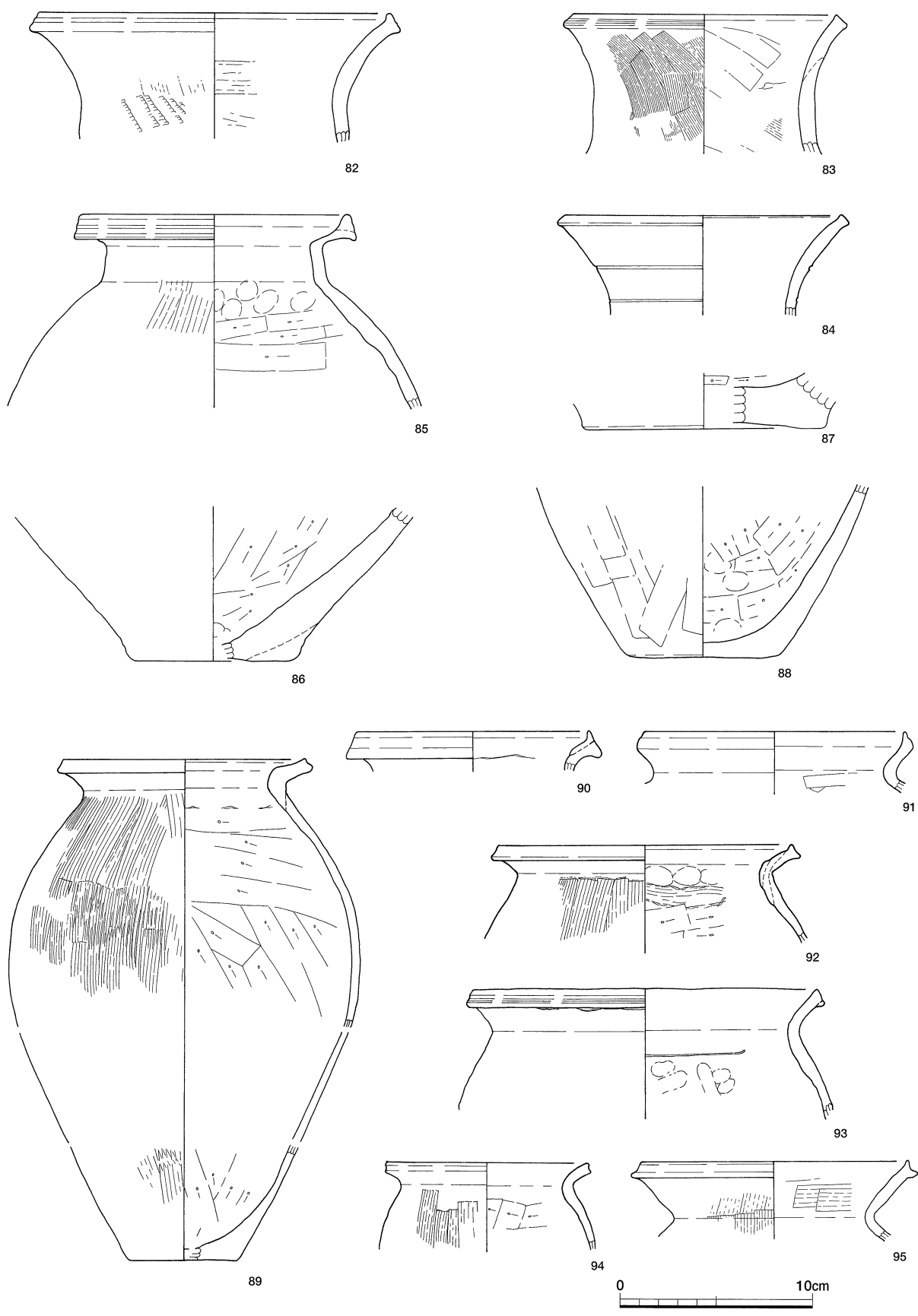
3区からは29点の土器と1点の石器を図化することができた。82~88は壺である。長頸壺82~84は緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部はわずかに上下方向に拡張する。いずれの口縁端部にも凹線は施されているものの不明瞭である。84は外面に沈線を2条とどめる。広口壺85は短く直立する頸部と大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は上方に大きく拡張され、2条の凹線を施す。89~101は甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、89~95は口縁端部が上方または上下方にわずかに拡張するものの



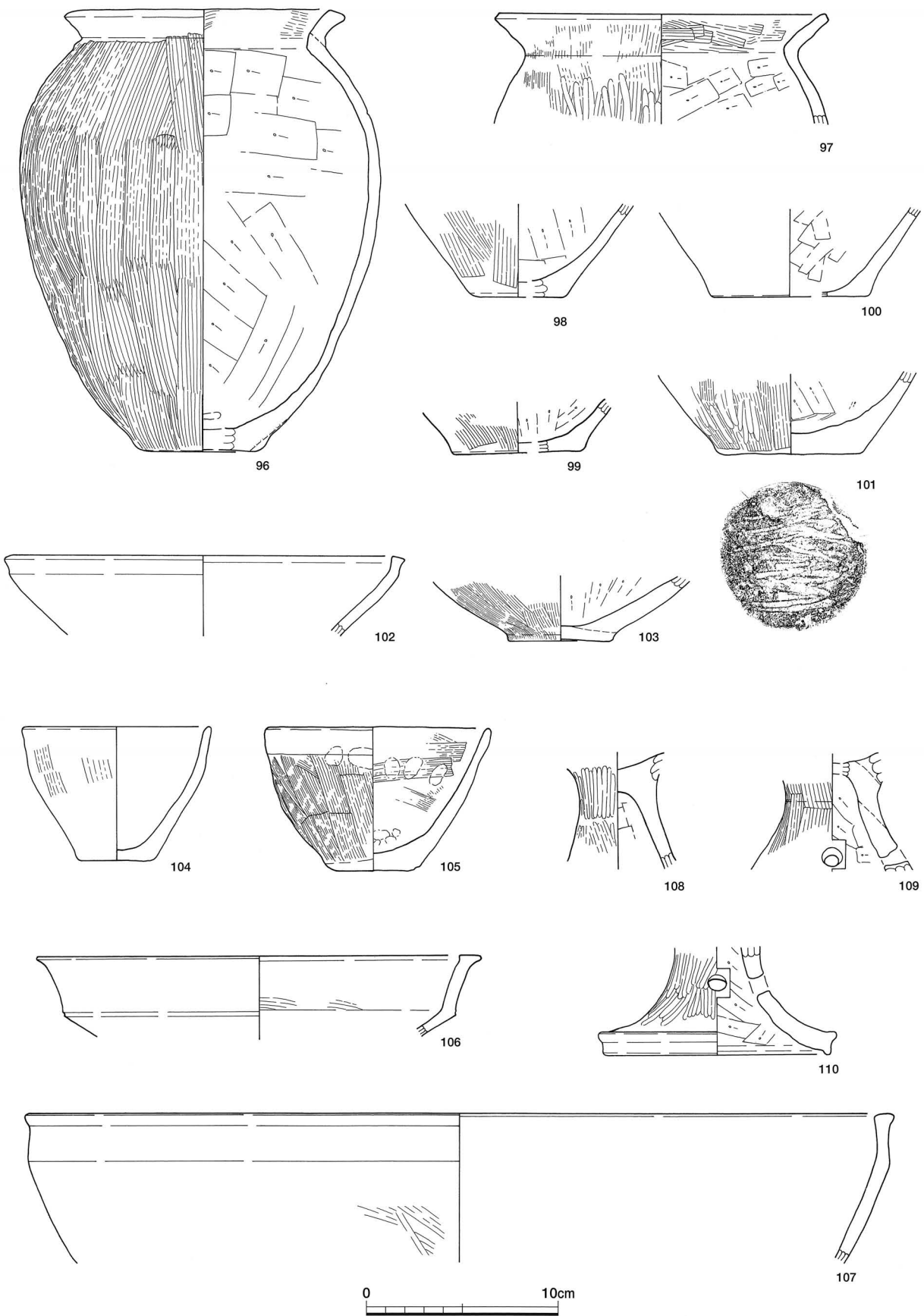
第45図 1区 包含層出土遺物実測図



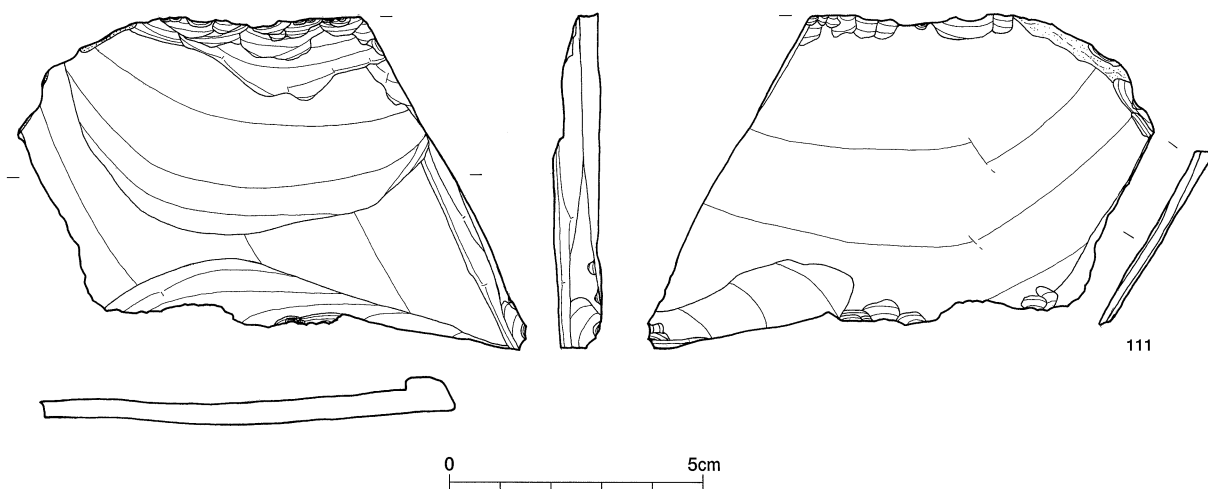
第46図 2区 包含層出土遺物実測図



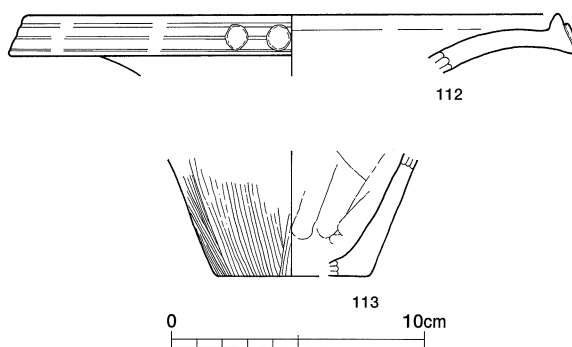
第47图 3区 包含层出土遗物实测图(1)



第48图 3区 包含層出土遺物実測图(2)



第49図 3区 包含層出土遺物実測図(3)



第50図 4区 包含層出土遺物実測図

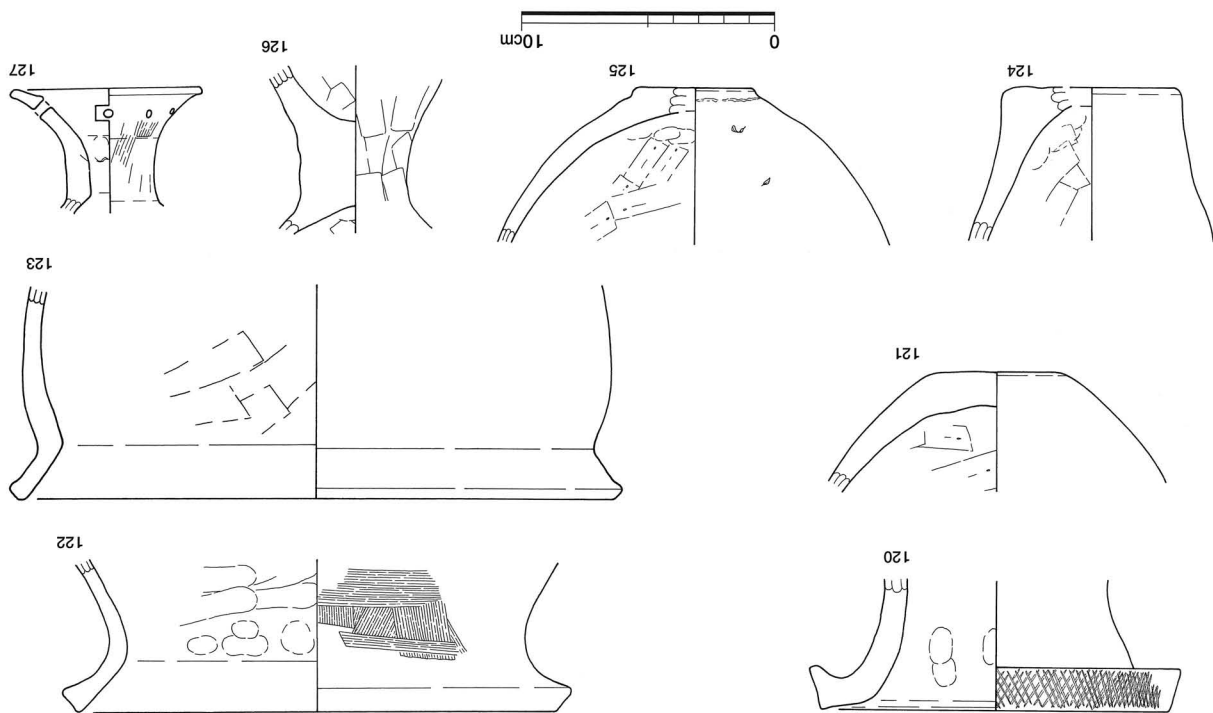
凹線は不明瞭である。96、97は口縁端部の拡張はなくなり、胴部最大径を肩部付近にもつ。97は外面調整においてタテ方向のハケののちにタテ方向のヘラミガキが施されている。内面はいずれもヨコ方向のヘラケズリである。102～105は鉢である。102は大きく開きながら立ち上がり、口縁部はほぼ垂直になる。口縁端部は面取りがなされ、外方にわずかに拡張する。104、105は胴部が上方に大きく延び、平底を呈す。いずれも口縁端部は丸くおさめられる。106～110は高杯である。106は屈曲しながら立ち上がり、面取りされた口縁端部は大きく外方に拡張する。107は大型の杯部をもち内彎しながら立ち上がり、面取りされた口縁端部は外方にわずかに拡張する。111はサヌカイトの大型剥片である。

4区からは2点の土器を図化することができた。112は口縁部のみの残存であるが、広口壺である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は上方に拡張し3条の凹線文を施したのち2個一対の円形浮文を貼付する。113は甕である。平底を呈し、外面にはタテ方向のハケ、内面にはタテ方向のユビナデが施される。

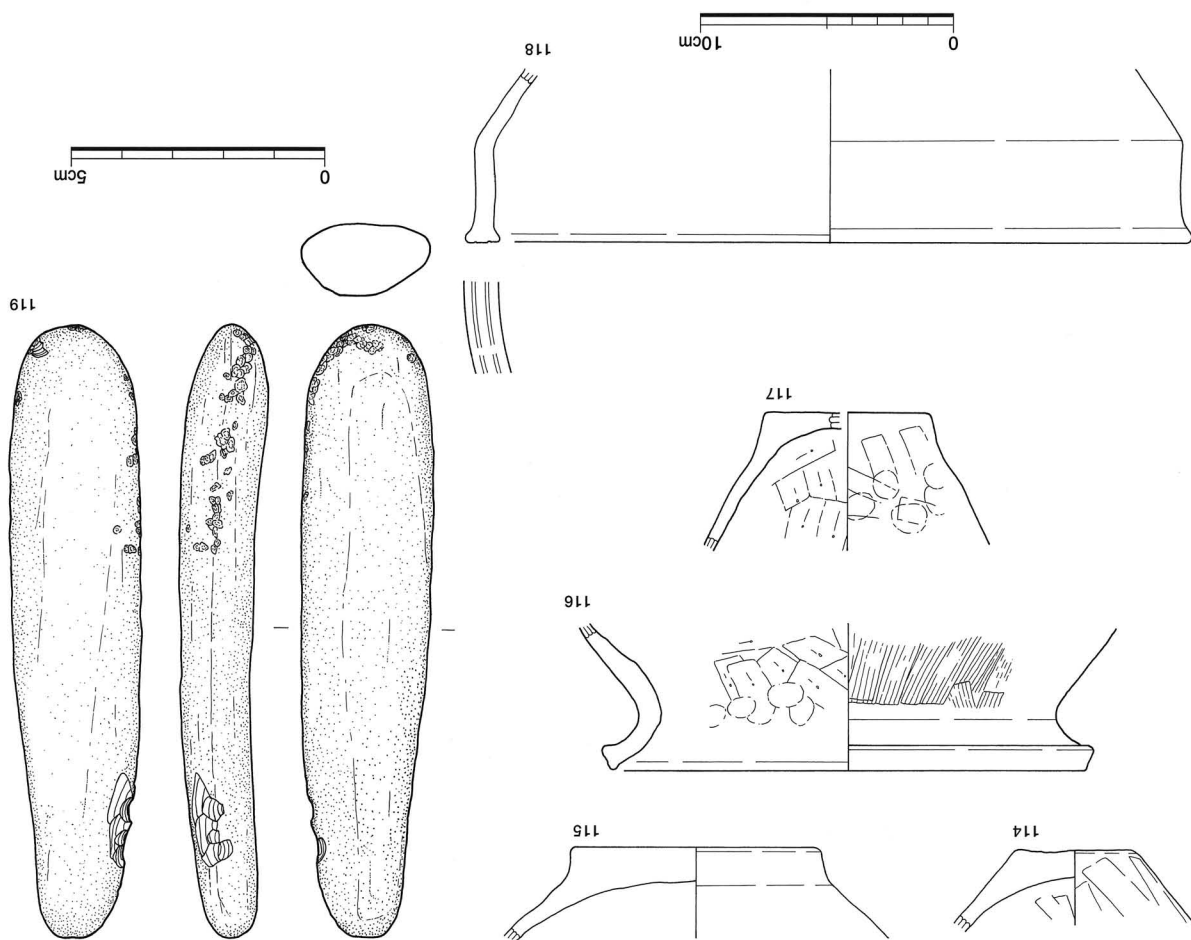
5区からは5点の土器と1点の石器を図化することができた。114、115は壺の底部である。116、117は甕である。実242は緩やかに屈曲する口縁部をもつ。口縁端部はかすかに上下に拡張し、端面の凹線はほとんど退化してしまっている。外面はタテ方向のハケが施され、内面はタテ方向のヘラケズリが施されたのちに頸部付近にユビオサエが部分的に施される。118は大型の高杯である。口縁部は垂直に立

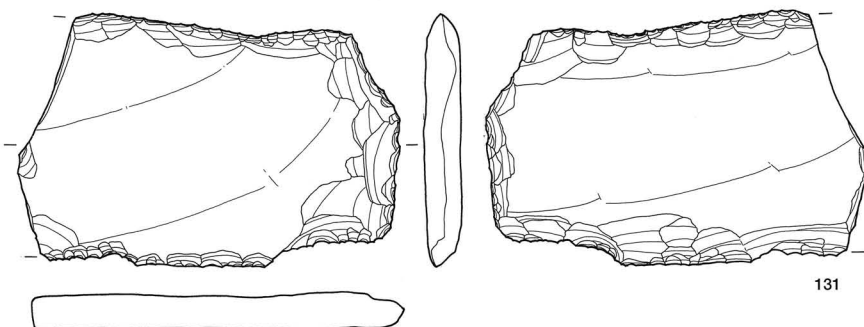
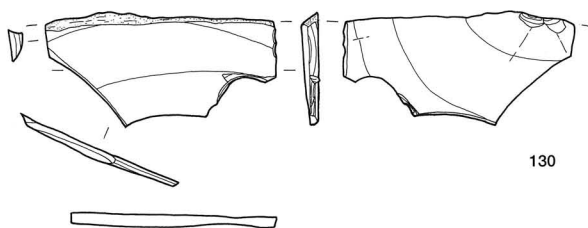
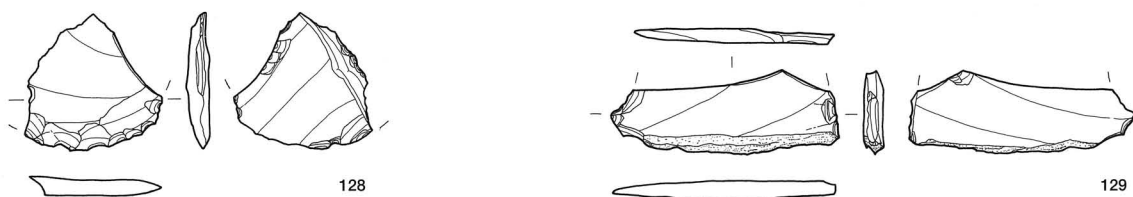


第52图 6区 包含层出土遗物美测图 (1)

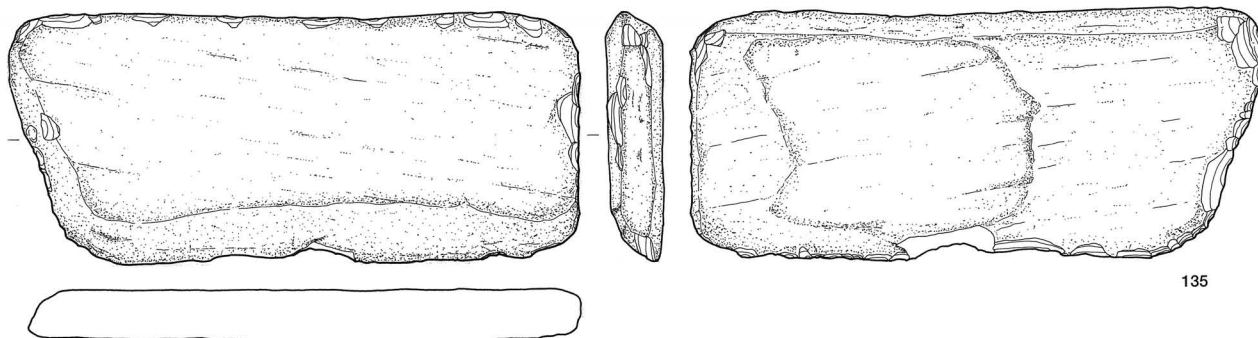
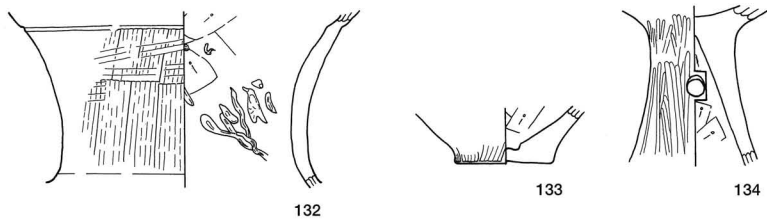


第51图 5区 包含层出土遗物美测图





第53图 6区 包含層出土遺物実測図(2)



第54图 7区他 包含層出土遺物実測図

ち上がり、口縁端部は内外に拡張し端面には凹線が2条施される。器面調整はない外面ともにナデである。119は棒状の結晶片岩礫を用いた敲石である。側縁部のわずかな範囲に敲打痕をとどめるが、敲石としてはあまり使用頻度が高くなかったように思われる。

6区からは8点の土器と4点の石器を図化することができた。120、121は壺である。120は垂下口縁をもつ壺である。口縁部外面には櫛描斜格子文が加飾される。122～124は甕である。122、123はいずれも「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部は外方へわずかに拡張し凹線は施されなくなっている。外面調整はタテのちヨコ方向のハケが施されている。125は鉢である。丸みをもった胴部を呈し、平底の底部はやや突出する。外面にはナデが施され、内面は胴部にタテ方向のヘラケズリ、底部付近にはユビオサエが顕著に看取できる。126、127は高杯である。いずれも脚台部のみの残存である。126は内外面とも板ナデが多用される。127は比較的短い脚柱をもち、裾部付近に焼成前の計2cm程度の小径の透し孔が残存部分では5ヶ所確認できる。この透し孔が全周するとすれば計8ヶ所を数えるものである。128～130は剥片である。いずれもサヌカイトを石材としている。131は紅簾片岩製の石庖丁である。挟りはもたず、左側を欠損する。

7区からは3点の土器と1点の石器を図化することができた。132は壺である。頸部のみの出土ではあるが、口縁部が緩やかに外反する広口壺であろうと思われる。外面にはタテ方向のハケのちヨコ方向のハケを施し、さらに沈線が1条巡る。内面にはヘラケズリが施され、部分的に工具痕をとどめる。133は甕である。平底を呈する。134は高杯である。脚柱部のみの残存である。外面はタテ方向のヘラミガキを施したのちに円形の透し孔を2ヶ所において穿孔する。

## (2) 古代 (第15～17図)

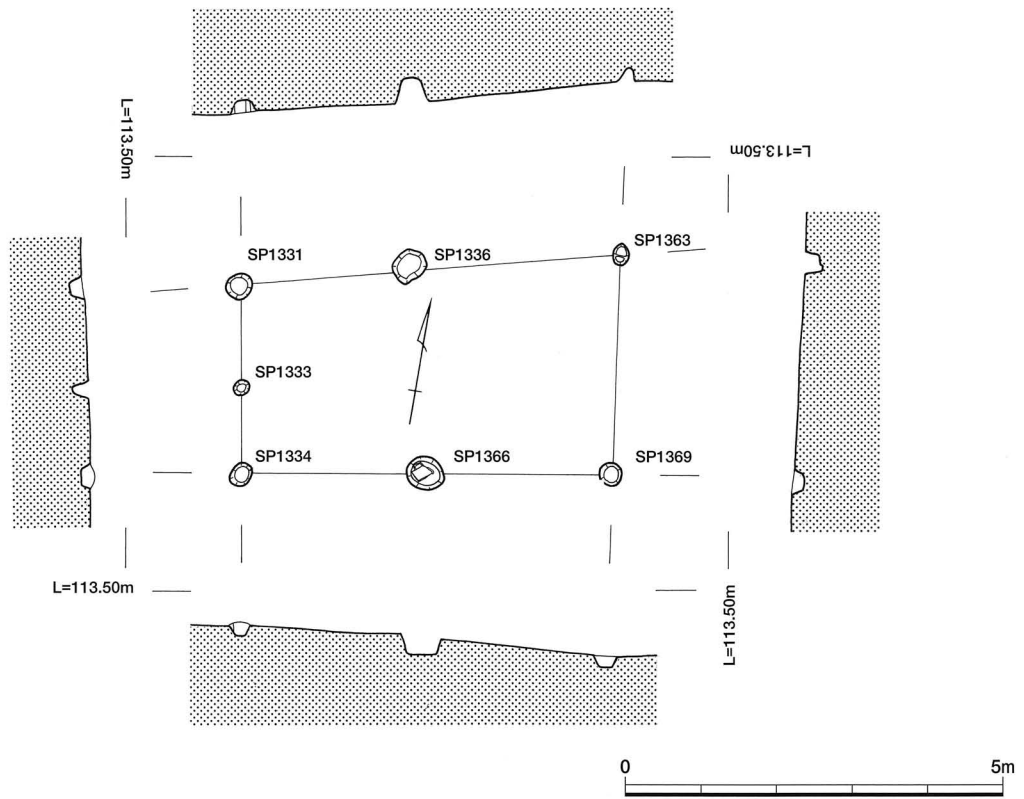
古代の遺構および遺物は主に3区の南側を分布の中心にして検出された。1区～7区の調査地全体では古代に属する遺構は、掘立柱建物跡13棟、土坑8基、溝4条、不明遺構3基、柱穴・小穴21基の合計49基が確認された。

### 掘立柱建物跡 (SA) (第15・17・20図)

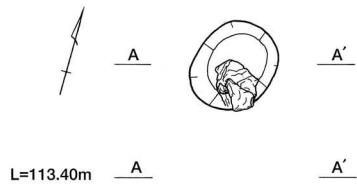
掘立柱建物跡は3区と6区において検出され、これ以外での調査区においては確認できなかった。さらにそれぞれの調査区の中でもこれらの建物が集中する部分がみられ、都合3ヶ所の集中部分を数えた。そこで便宜的にそれらを屋敷地とよび、3区の区画溝 (SD1001～1003) の西側の集中区を屋敷地1、東側を屋敷地2、6区の中央やや北側を屋敷地3とする。ただし当該期においては1棟のみであり、この屋敷地3を形成するのは中世段階になってからである。特にこの中でも屋敷地1では5棟の建物が主軸方向をあわせ並立している。これらはその配置状況から倉庫である要素が強く考えられるが、貯蔵具とされる遺物の出土がないため仮にこれらの建物群が倉庫だったとしても貯蔵物を特定できるまでには至らない。

#### 1号掘立柱建物跡 (SA1001) (第55～62図)

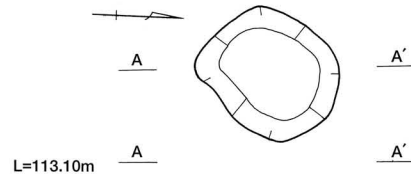
3区の屋敷地1の南端、調査区の壁付近に位置する。検出グリッドはQ・R-26～28グリッドである。建物の北西角にあたる柱穴がSX1004を切る。遺構の規模は桁行2間×梁間2間を測る側柱式であるが、西側の一辺がやや短い。主軸はN-79°-Eを向き、SA1005～1012とほぼ同じ方向を示す。柱間距離は桁行では平均値で253.0cm、梁間では平均値で145cmを測り、床面積は14.67m<sup>2</sup>を測る。



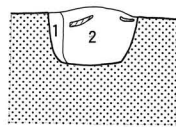
第55図 3区 SA1001遺構平・断面図



L=113.40m



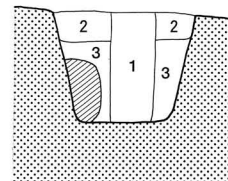
L=113.10m



- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土
- 2 黒褐色 10YR3/2 砂質土 炭化物含む



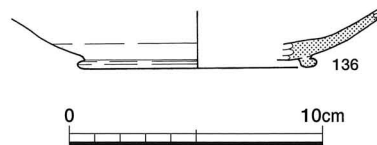
第56図 3区 SP1334遺構平・断面図



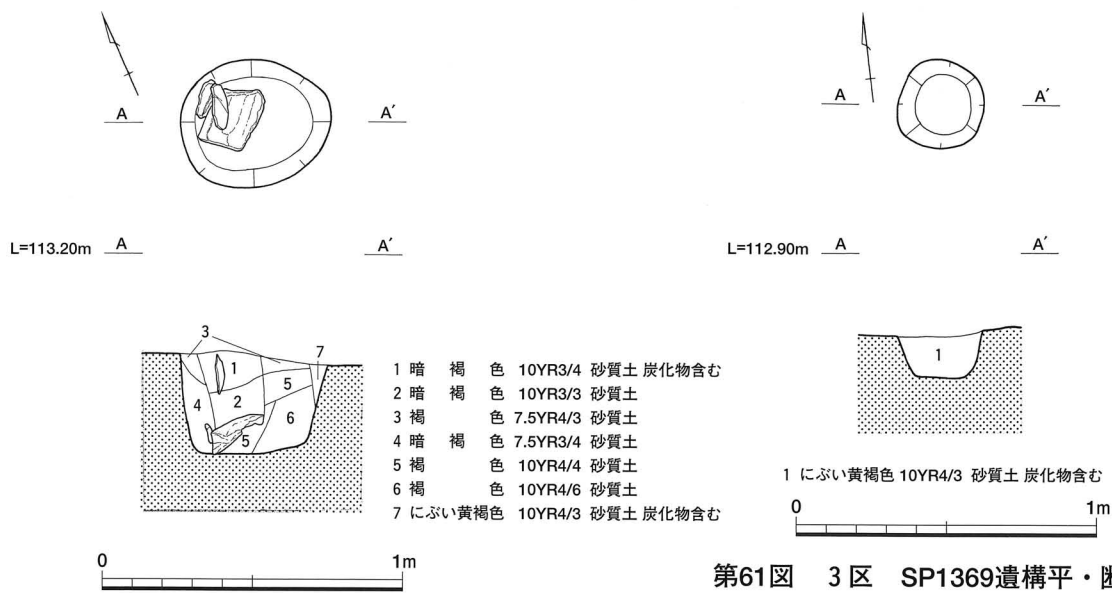
- 1 暗オリーブ褐色 2.5YR3/3 砂質土 炭化物含む
- 2 暗褐色 10YR3/3 砂質土
- 3 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土



第57図 3区 SP1336遺構平・断面図

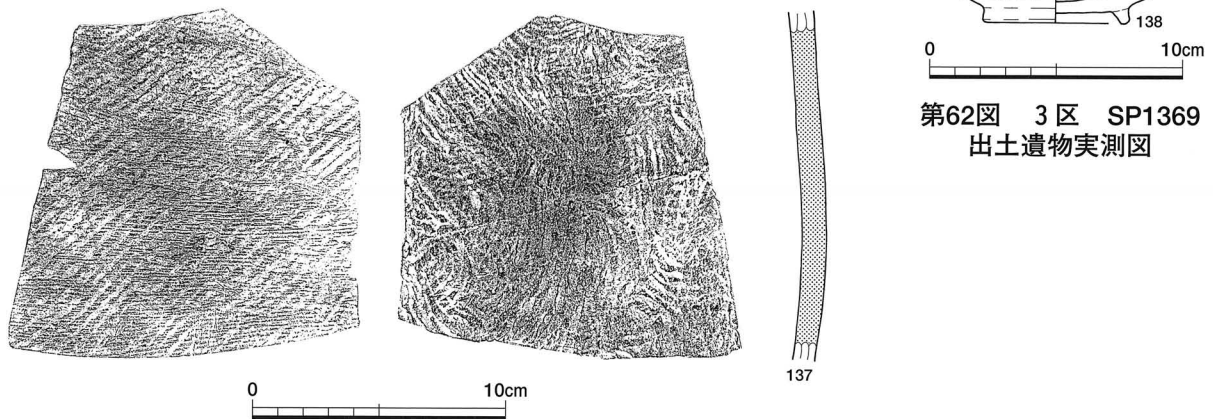


第58図 3区 SP1336出土遺物実測図



第59図 3区 SP1366遺構平・断面図

第61図 3区 SP1369遺構平・断面図



第60図 3区 SP1366出土遺物実測図

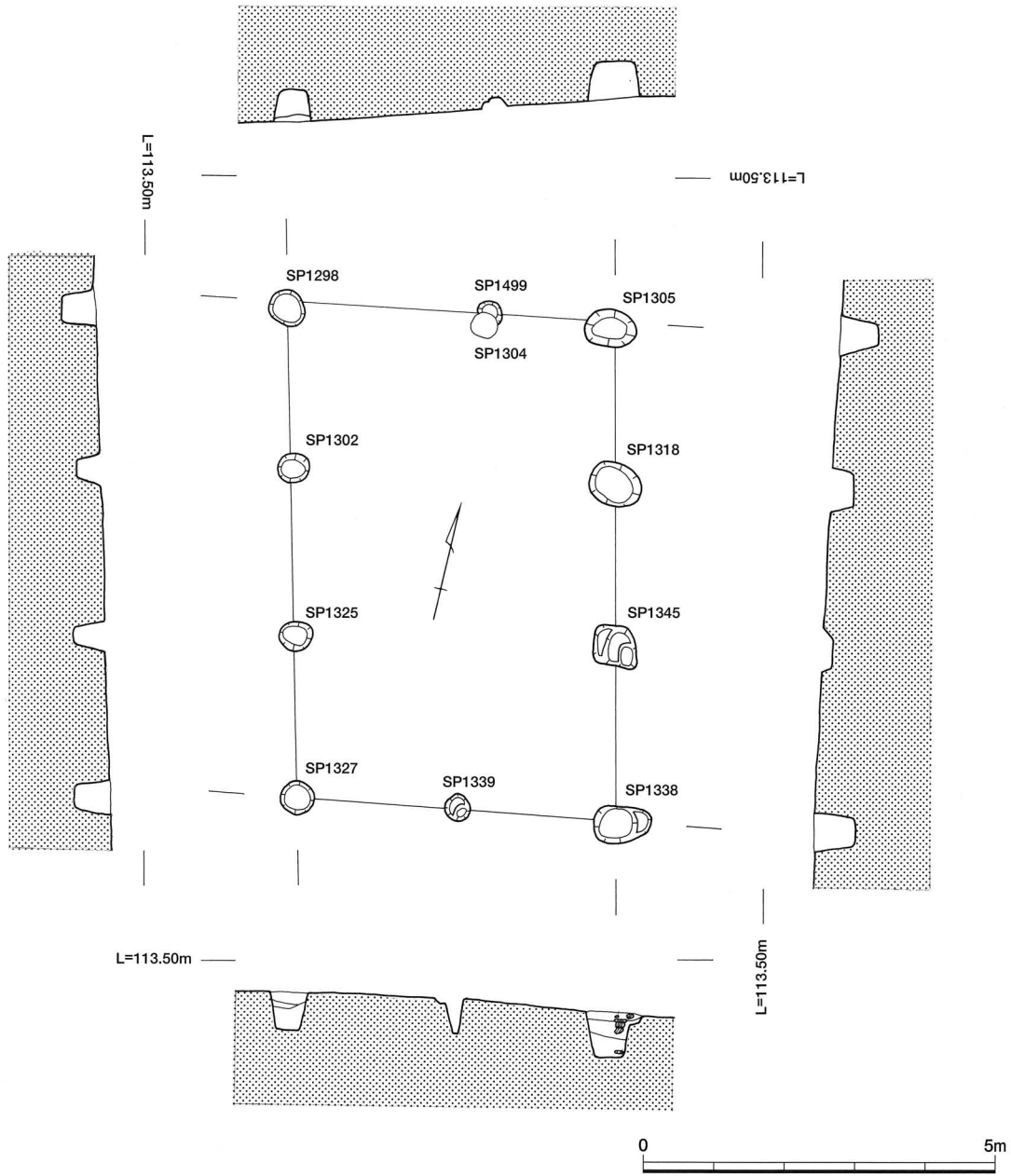
第62図 3区 SP1369  
出土遺物実測図

各柱穴の規模はそれぞれ異なるものの、平面形状は全て円形を呈し、遺構断面形状は逆台形または船底形を呈する。

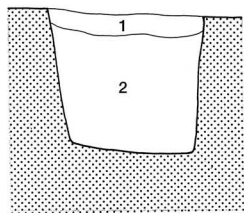
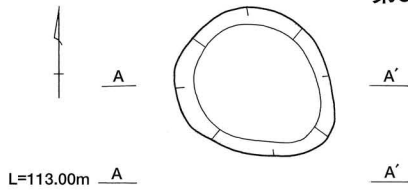
土層観察の結果、SP1331、1336、1366において柱痕跡が確認できた。またSP1334、1366においては根石と思われる結晶片岩の板石が検出された。とくにSP1366においては根石を安定させるために土を敷き、しかしながら多少板石の上面が傾斜するものの礎石として使用されたことが土層観察により復元できる。

遺物はSP1336、1366、1369よりそれぞれ1点ずつ出土している。136はSP1336から出土した須恵器の椀である。立ち上がりは緩やかに大きく開く。底部は回転ヘラ切りによる切り離しののちに低く丸みをもった高台が貼付される。137はSP1366から出土した須恵器の甕片である。内面には青海波文が顕著に残るが、一部をナデ消している。138はSP1369から出土した黒色土器のA類椀である。内外面にヨコ方向のヘラミガキが施される。底部は回転ヘラ切りによる切り離しののちにやや丸みをもった台形状の高台を貼付する。

遺構の時期は12世紀後半頃と思われる。



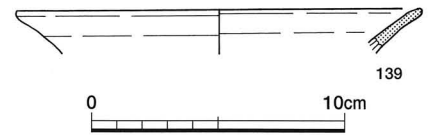
第63図 3区 SA1002遺構平・断面図



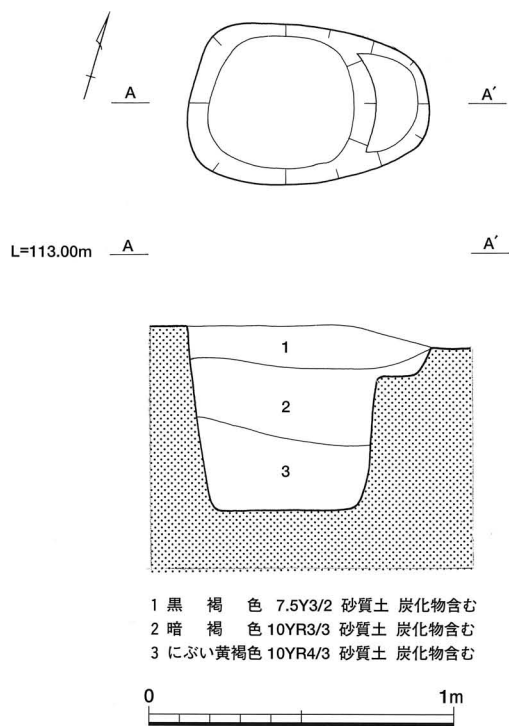
- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土 炭化物含む
- 2 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土



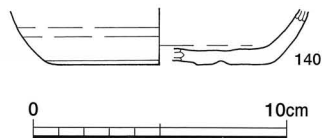
第64図 3区 SP1298遺構平・断面図



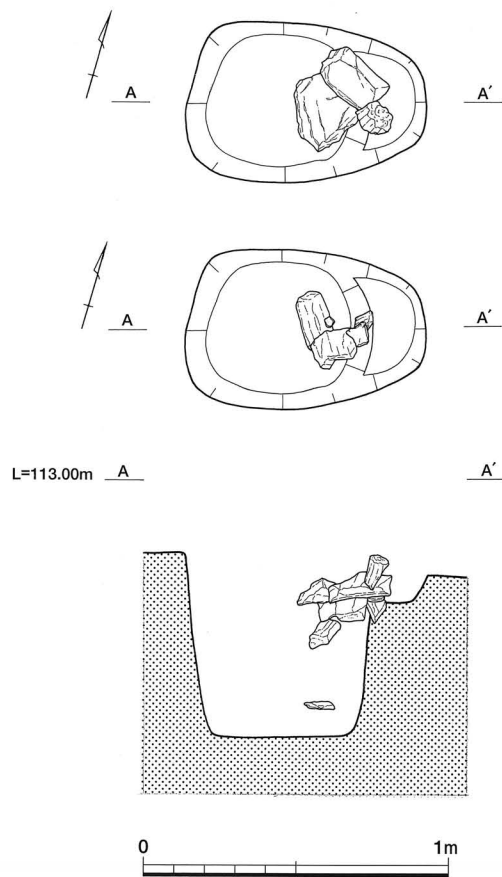
第65図 3区 SP1298出土遺物実測図



第66図 3区 SP1338遺構平・断面図



第68図 3区 SP1338出土遺物実測図



第67図 3区 SP1338遺物出土状況図

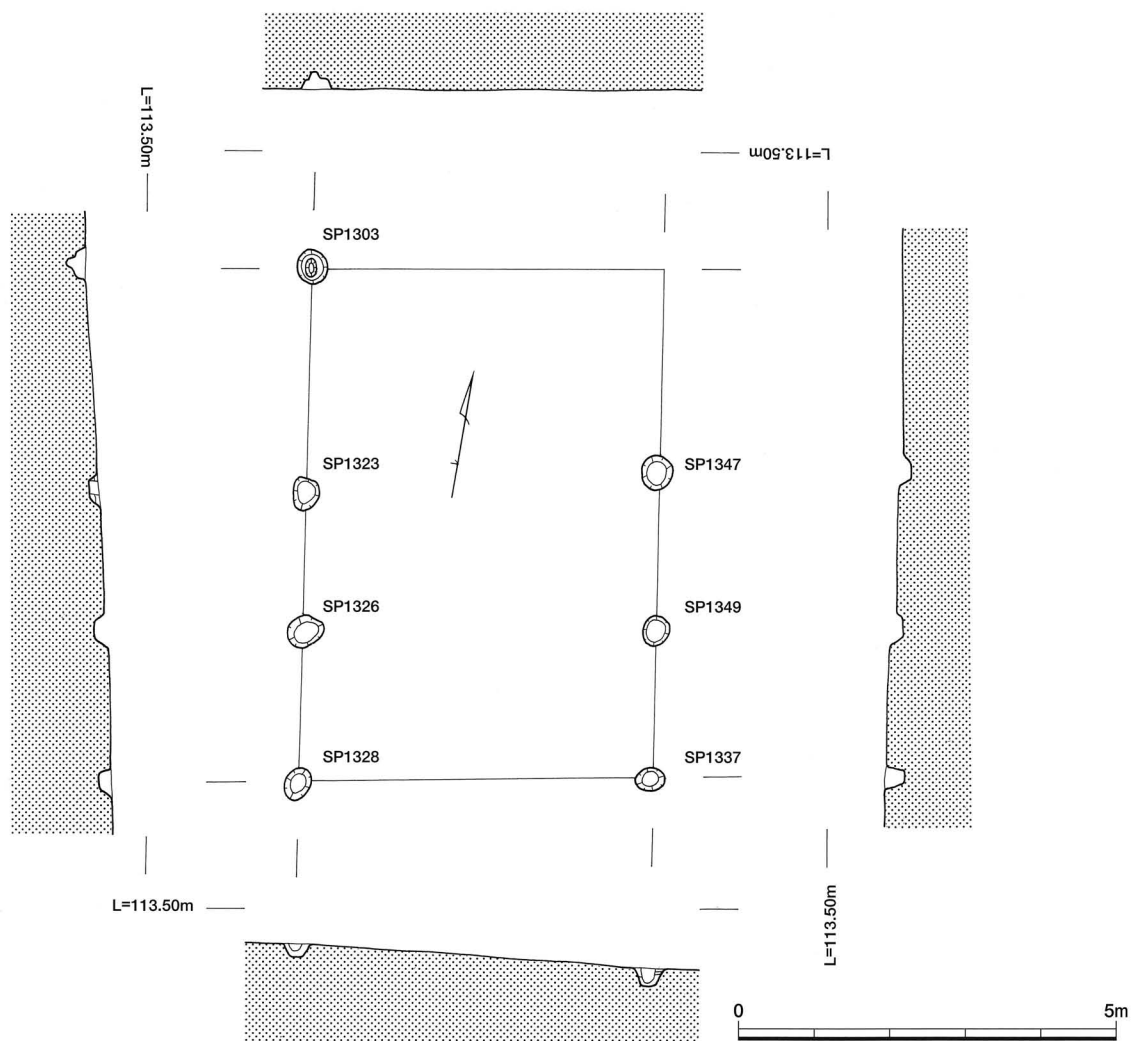
## 2号掘立柱建物跡 (SA1002) (第63~67図)

3区の屋敷地1の南東側に位置する。検出グリッドはR~T-25~27グリッドである。SA1003と重複し、SA1008に切られる。遺構の規模は桁行3間×梁間2間を測る側柱式である。主軸はN-13°-Wを向き、SA1003、1004とほぼ同じ方向を示す。柱間は桁行側では平均値で232.7cm、梁間で230.0cmを測り、床面積は32.11m<sup>2</sup>を測る。

各柱穴の規模は若干異なるものの遺構平面形状はおおむね円形を呈し、SP1338、1345の2基において隅丸方形を呈する。またSP1338においては標高112.6m前後に位置するテラス状部分の底の肩付近に、結晶片岩の角礫がまとまって確認された。しかしこの礫群が土層の堆積状況と含めて、建物と直接・間接的に関わるものかということまでは判断できない。

また、土層観察の結果、柱痕跡や抜き取りを示す痕跡などは確認できなかった。

遺物はSP1298、1338よりそれぞれ1点ずつ出土している。139はSP1298から出土した須恵器の椀である。緩やかに大きく外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。140はSP1338から出土した土師器の杯である。底径9.1cmを測り、底部は回転ヘラ切りによる切り離しのちにナデを施している。



第69図 3区 SA1003遺構平・断面図

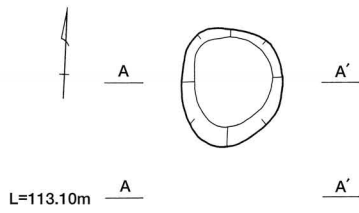
### 3号掘立柱建物跡（SA1003）（第69～75図）

3区の屋敷地1のはぼ中央からやや南東寄りに位置する。検出グリッドはR・S-26・27グリッドである。南西側から北東側へ緩やかに傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行3間×梁間1間を測る側柱式である。桁行の間に位置するSP1323、1326、1347、1349の4基の柱穴はやや南寄りに位置し、北側の1間と距離を保つことからSP1323とSP1347の間を結ぶラインで間仕切りを設けていたことが想定できるかもしれない。主軸はN-10°-Wを向き、SA1002、1004とほぼ同方向を示す。SA1002、1011と重複する。柱間距離は桁行側では平均値で226.7cmを測り、床面積は31.96m<sup>2</sup>を測る。

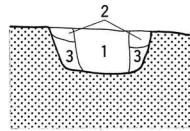
各柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈するものに限られる。遺構断面形状はいずれも逆台形を呈している。また、SP1323の土層断面観察において柱痕跡が確認できた。

遺物はSP1323より2点、SP1326より1点、SP1349より3点の計6点を図化することができた。141は土師器の皿である。142は土師器の椀である。底部は回転ヘラ切りによる切り離しで、のちに台形状の高台を貼付する。外面底部には煤が付着している。143は須恵器の杯底部である。回転ヘラ切りによる切り離しで、のちにナデを施す。144は土師器の杯である。回転ナデにより成形し、口





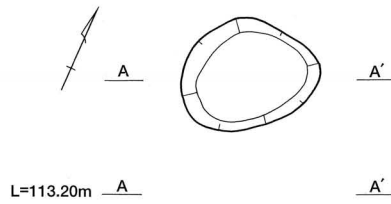
L=113.10m



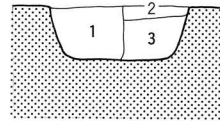
- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土 炭化物含む
- 2 褐色 10YR4/4 砂質土 炭化物含む
- 3 オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土



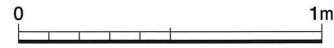
第70図 3区 SP1323遺構平・断面図



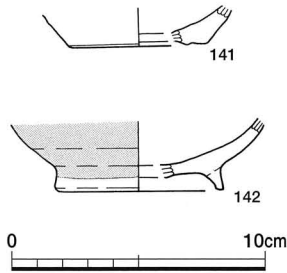
L=113.20m



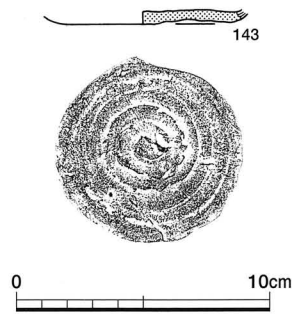
- 1 黒褐色 10YR3/2 砂質土
- 2 オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土
- 3 褐色 10YR4/4 砂質土



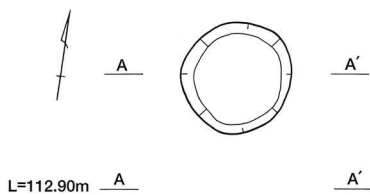
第72図 3区 SP1326遺構平・断面図



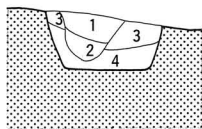
第71図 3区 SP1323出土遺物実測図



第73図 3区 SP1326出土遺物実測図



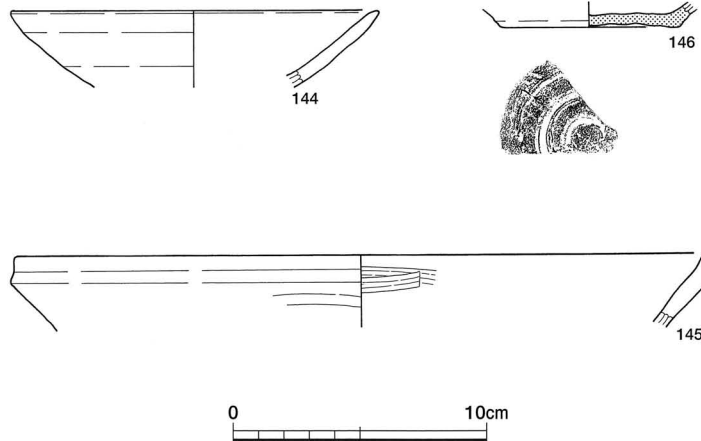
L=112.90m



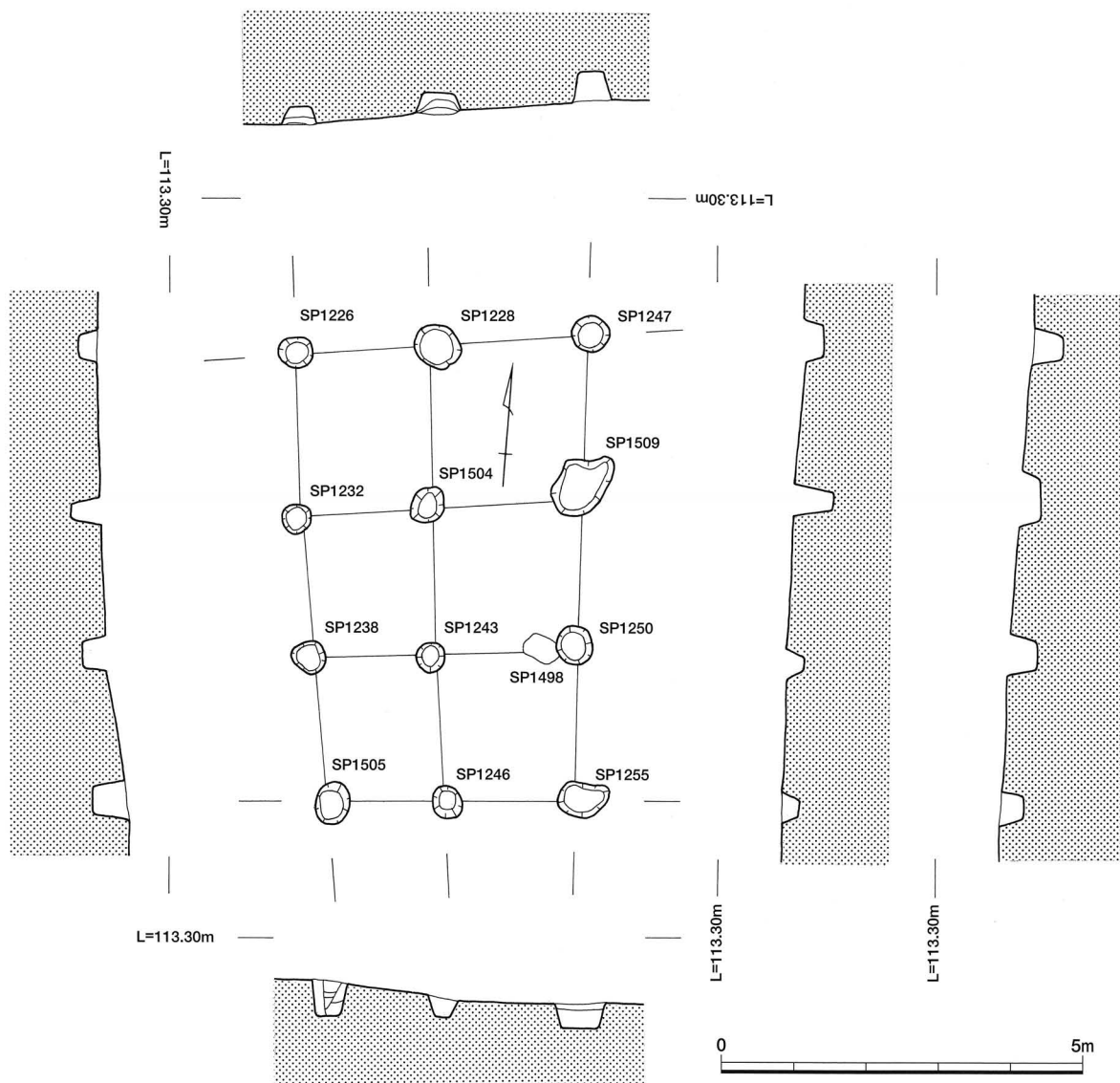
- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土 炭化物含む
- 2 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土
- 3 黒褐色 10YR3/2 砂質土 炭化物含む
- 4 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土



第74図 3区 SP1349遺構平・断面図



第75図 3区 SP1349出土遺物実測図



第76図 3区 SA1004遺構平・断面図

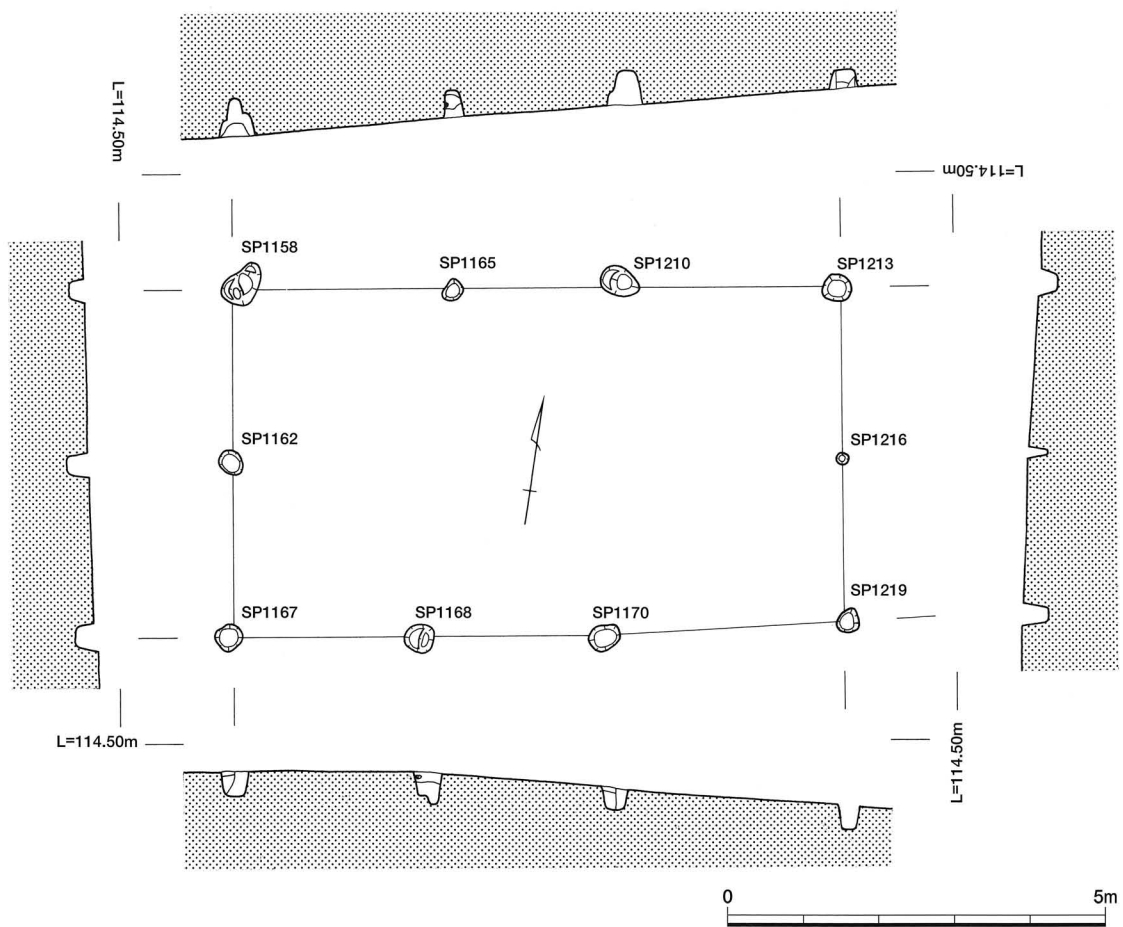
縁端部は薄く丸みをもって仕上げる。145は土師器の甕である。口縁端部は上方へ拡張し、内面はヨコ方向のハケにより仕上げる。146は須恵器の杯底部である。回転ヘラ切りによる切り離しである。

#### 4号掘立柱建物跡 (SA1004) (第76図)

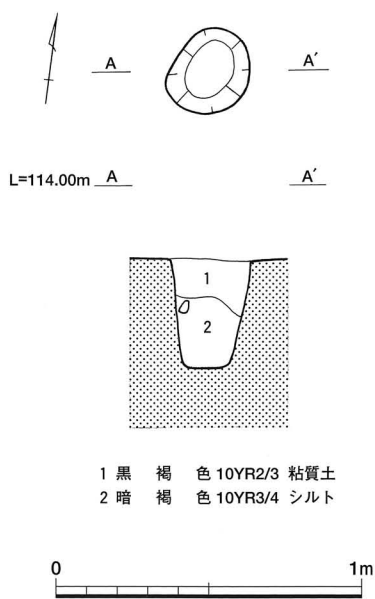
3区の屋敷地1の北側に位置する。検出グリッドはU・V-24・25グリッドである。南西から北西に向けて緩やかに下る傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行3間×梁間2間を測る総柱式である。主軸はN-6°-Eを向き、SA1002、1010とほぼ同方向を示す。建物の南側はSA1009と重複し、SP1498を切る。柱間距離は桁行側では平均値で212.0cm、梁間側では202.0cmを測り、南側の梁間が北側に比べて0.7mほど短い。床面積は25.69m<sup>2</sup>を測る。

各柱穴の遺構平面形状は一部不整形を呈するものがあるが、おおむね円形を呈する。また土層断面の観察により、SP1505において柱痕跡と思われる堆積状況を確認できた。

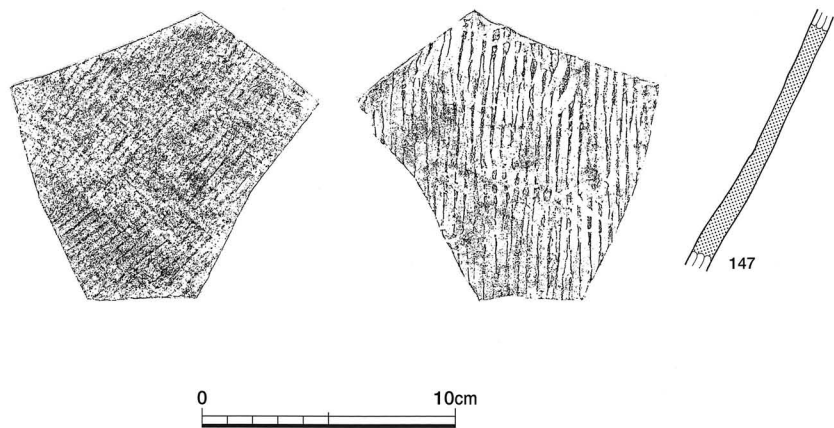
遺物は図化できるものはなかったが、この建物の北東角に位置するSP1247から須恵器壺の胴部



第77図 3区 SA1005遺構平・断面図

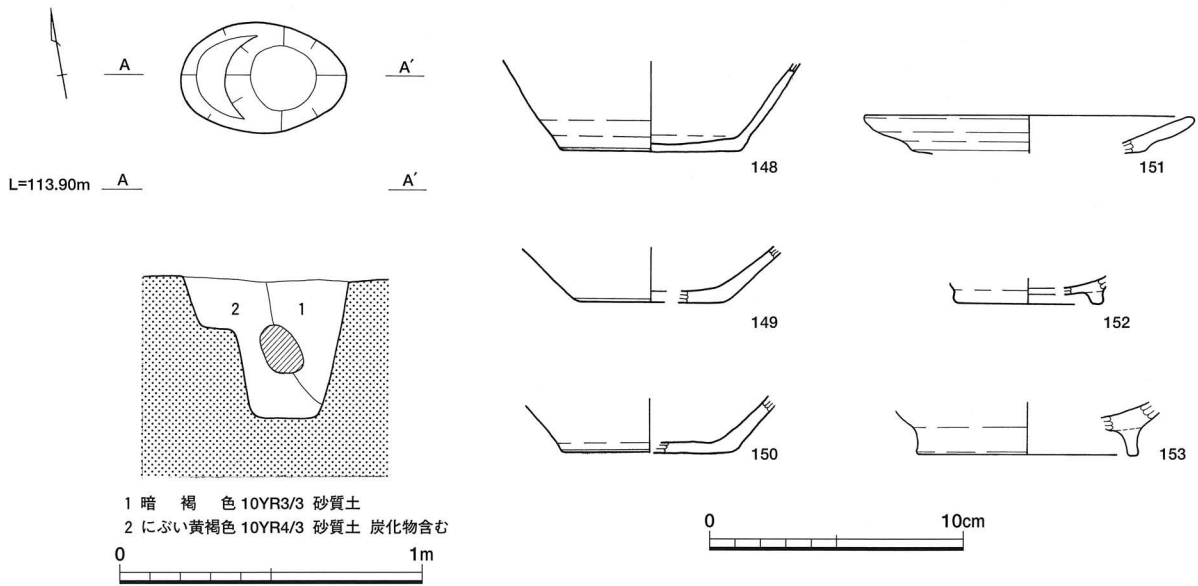


1 黒褐色 10YR2/3 粘質土  
2 暗褐色 10YR3/4 シルト



第78図 3区 SP1165遺構平・断面図

第79図 3区 SP1165出土遺物実測図



第80図 3区 SP1210遺構平・断面図

第81図 3区 SP1210出土遺物実測図

片が出土している。このSP1247が北東隅に位置していることから、地鎮のために破碎した土器を埋納した可能性が考えられるが、断定するまでには至っていない。

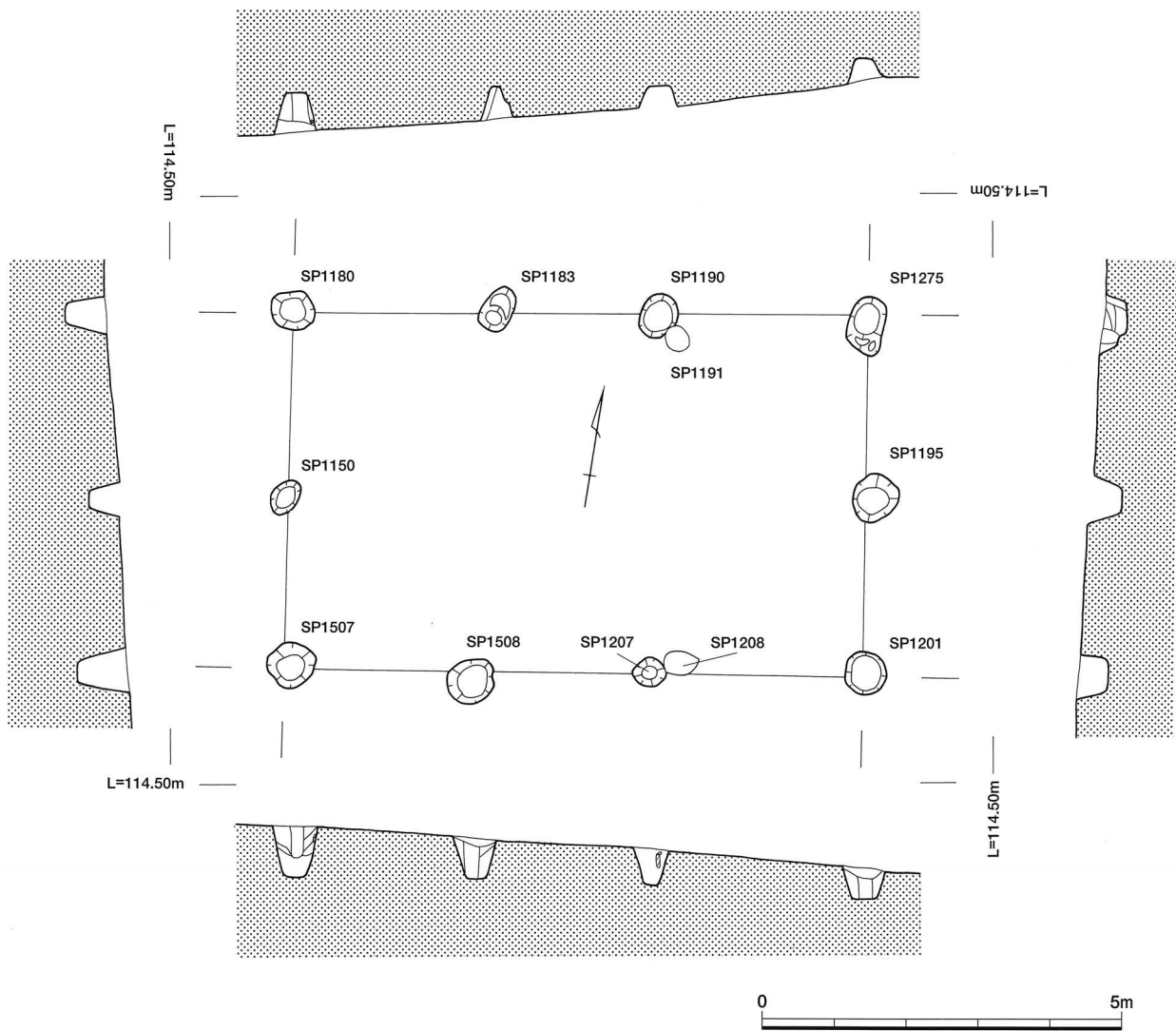
遺構の時期は、出土した遺物の残存部分が少ないため明確な根拠にはよわいが、おそらく12世紀後半頃であろうと考えられる。

#### 5号掘立柱建物跡 (SA1005) (第77~81図)

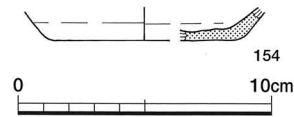
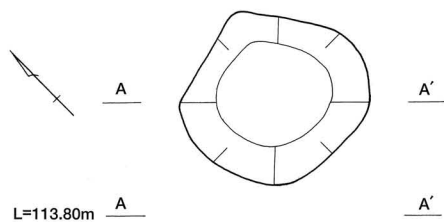
3区の屋敷地1の南西側に位置する。検出グリッドはV・W-28~30グリッドである。南西から北東に向けて緩やかに下る傾斜地に立地している。遺構の規模は桁行3間×梁間2間を測る側柱式である。主軸はN-81°-Eを向き、SA1001、1005~1009、1011とほぼ同方向を示し、SA1003、1006、1009、1011と軒を並べて建ち建物群を構成する。当該建物は、この建物群のなかで南西に位置している。柱間距離は桁行側では平均値で271.7cm、梁間側で227.5cmを測り、東側の梁間とくに東側の梁間でも南側の1間が若干短いためわずかにいびつな平面形を呈する。床面積は37.08m<sup>2</sup>を測る。

各柱穴は遺構規模に若干の差は認められるものの平面形状は円形を呈するものが主体となり、一部に楕円形を呈するものがみられる。遺構断面形状はいずれも逆台形を呈している。堆積土の観察においてはSP1170で柱痕跡が確認できた。

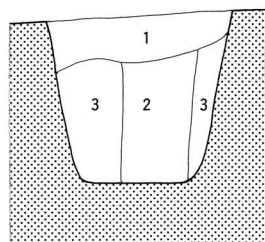
遺物はSP1165より1点、SP1210より6点の計7点を図化することができた。147は須恵器の甕である。胴部下半の破片と思われ、外面には格子タタキ、内面には青海波紋ののちにタタキを施している。148~150は土師器の杯である。いずれも回転ナデ成形で底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。148には切り離し後の底面に工具痕をとどめる。151は土師器の皿である。底部は回転ヘラ切りによる切り離しでのちによわいなデを施す。152、153は土師器の椀である。両者とも貼付高台をもつ。



第82図 3区 SA1006遺構平・断面図



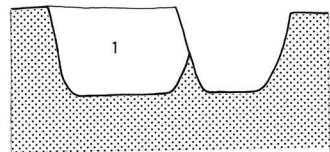
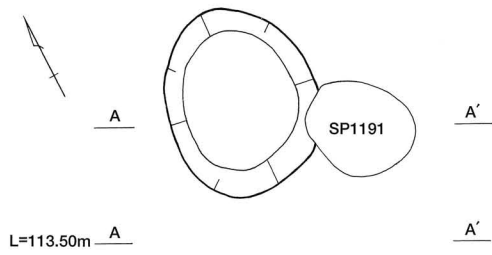
第84図 3区 SP1180出土遺物実測図



- 1 褐 色 10YR4/4 シルト
- 2 暗 褐 色 10YR3/4 粘質土
- 3 褐 色 10YR4/3 シルト 炭少量含む



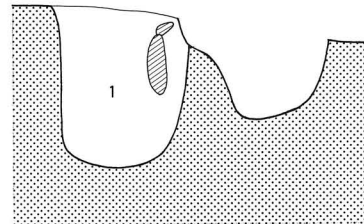
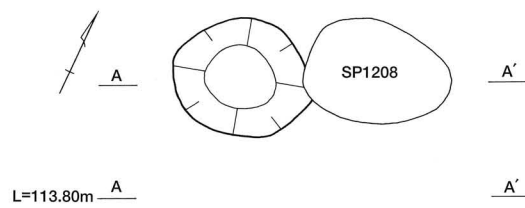
第83図 3区 SP1180遺構平・断面図



1 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 炭化物含む



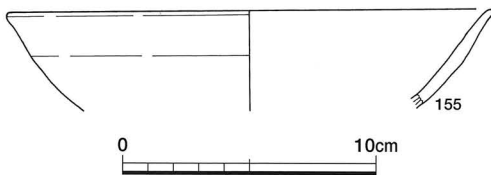
第85図 3区 SP1190遺構平・断面図



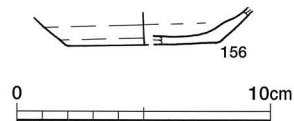
1 黒褐色 10YR2/3 砂質土



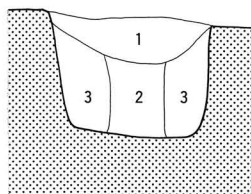
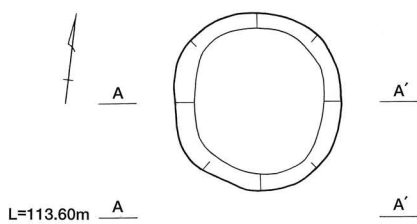
第87図 3区 SP1207遺構平・断面図



第86図 3区 SP1190出土遺物実測図



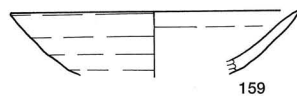
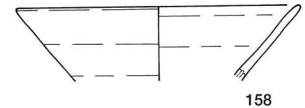
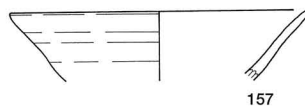
第88図 3区 SP1207出土遺物実測図



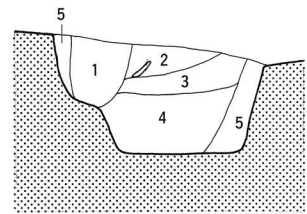
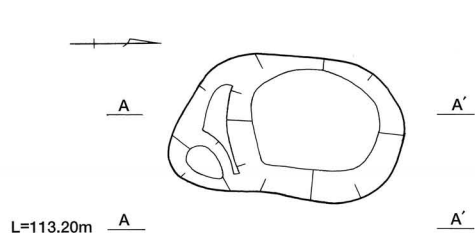
1 極暗褐色 7.5YR2/3 砂質土 炭化物少量含む  
2 暗褐色 10YR3/3 シルト  
3 暗褐色 10YR3/3 砂質土



第89図 3区 SP1201遺構平・断面図



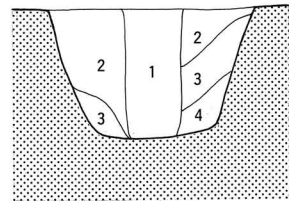
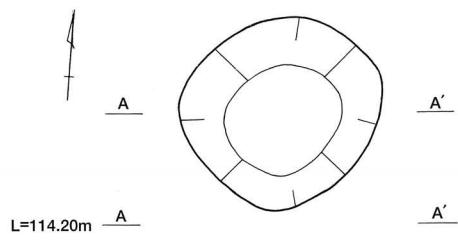
第90図 3区 SP1201出土遺物実測図



- 1 暗褐色 10YR3/3 砂質土 炭化物含む
- 2 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 3 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 炭化物含む
- 4 オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 炭化物含む
- 5 黄褐色 2.5Y5/4 砂質土 炭化物含む



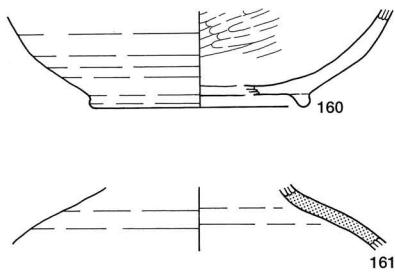
第91図 3区 SP1275遺構平・断面図



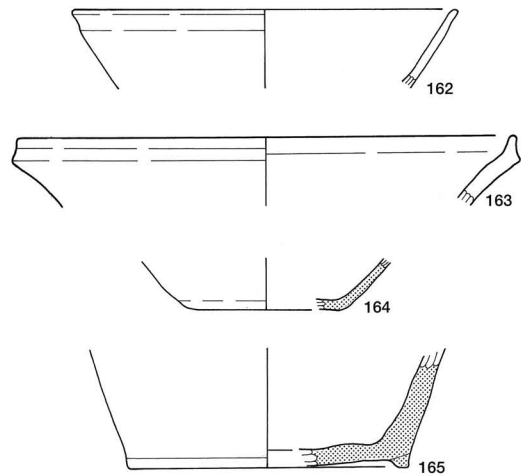
- 1 暗褐色 10YR3/4 砂質土 炭化物少量含む
- 2 暗褐色 10YR3/3 砂質土 炭化物少量含む
- 3 褐色 10YR4/4 砂質土 炭化物少量含む
- 4 褐色 10YR4/4 砂質土



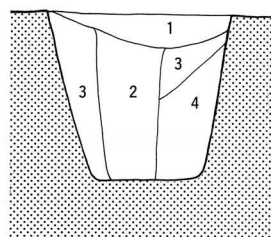
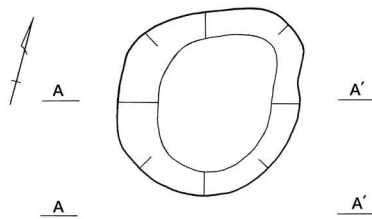
第93図 3区 SP1507遺構平・断面図



第92図 3区 SP1275出土遺物実測図



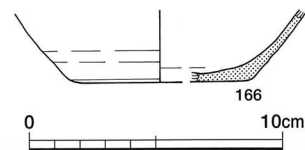
第94図 3区 SP1507出土遺物実測図



- 1 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 炭化物少量含む
- 2 暗褐色 10YR3/4 砂質土
- 3 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 4 褐色 10YR4/4 砂質土



第95図 3区 SP1508遺構平・断面図



第96図 3区 SP1508出土遺物実測図

### 6号掘立柱建物跡（SA1006）（第82～96図）

3区の屋敷地1の西側に位置する。検出グリッドはR～T-23～25グリッドである。南西から北東に向けての緩やかな下り傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行3間×梁間2間を測る側柱式である。主軸はN-81°-Eを向き、SA1001、1005～1012とほぼ同じ方向を示し、SA1005、1007～1009と軒を並べて建ち建物群を構成する。当該建物は、この建物群のなかで西側の中央に位置している。柱間距離は桁行側では平均値で264.7cm、梁間で249.0cmを測り、床面積は39.54m<sup>2</sup>を測る。

各柱穴の平面形状は一部楕円形を呈するものがみられるが、おおむね円形を呈するものが主体となる。遺構断面形状はいずれも逆台形を呈する。遺構堆積土の観察ではSP1180、1201、1275、1507、1508において柱痕跡が確認できた。

遺物はSP1180から1点、SP1190から1点、SP1201から3点、SP1207から1点、SP1275から2点、SP1507から4点、SP1508から1点の計12点を図化することができた。154は須恵器の杯である。底部は回転ヘラ切りによる切り離しでのちにナデで仕上げる。155は土師器の杯である。回転ナデにより仕上げられており、内面はヘラミガキが施されているようにも見えるが不明瞭である。156は土師器の杯である。回転ナデによる成形であり、内底面の見込みにはナデが施される。底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。157～159は土師器の杯である。いずれも回転ナデによる成形であり、口縁端部は薄くかつ丸みをもっておさめる。160は黒色土器のA類椀である。内面をナナメ方向の緻密なヘラミガキで仕上げる。高台は丸く低いものが貼付される。161は須恵器の壺である。162は土師器の椀である。内外面ともに磨滅が著しく、調整は不明瞭である。163は土師器の甕である。口縁端部を上方に拡張する。164は須恵器の杯である。底部は回転ヘラ切りにより切り離したのちにナデている。165は須恵器の壺である。底部は回転ヘラ切りによる切り離しのちに断面台形状の高台を貼付する。166は須恵器の杯である。底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。

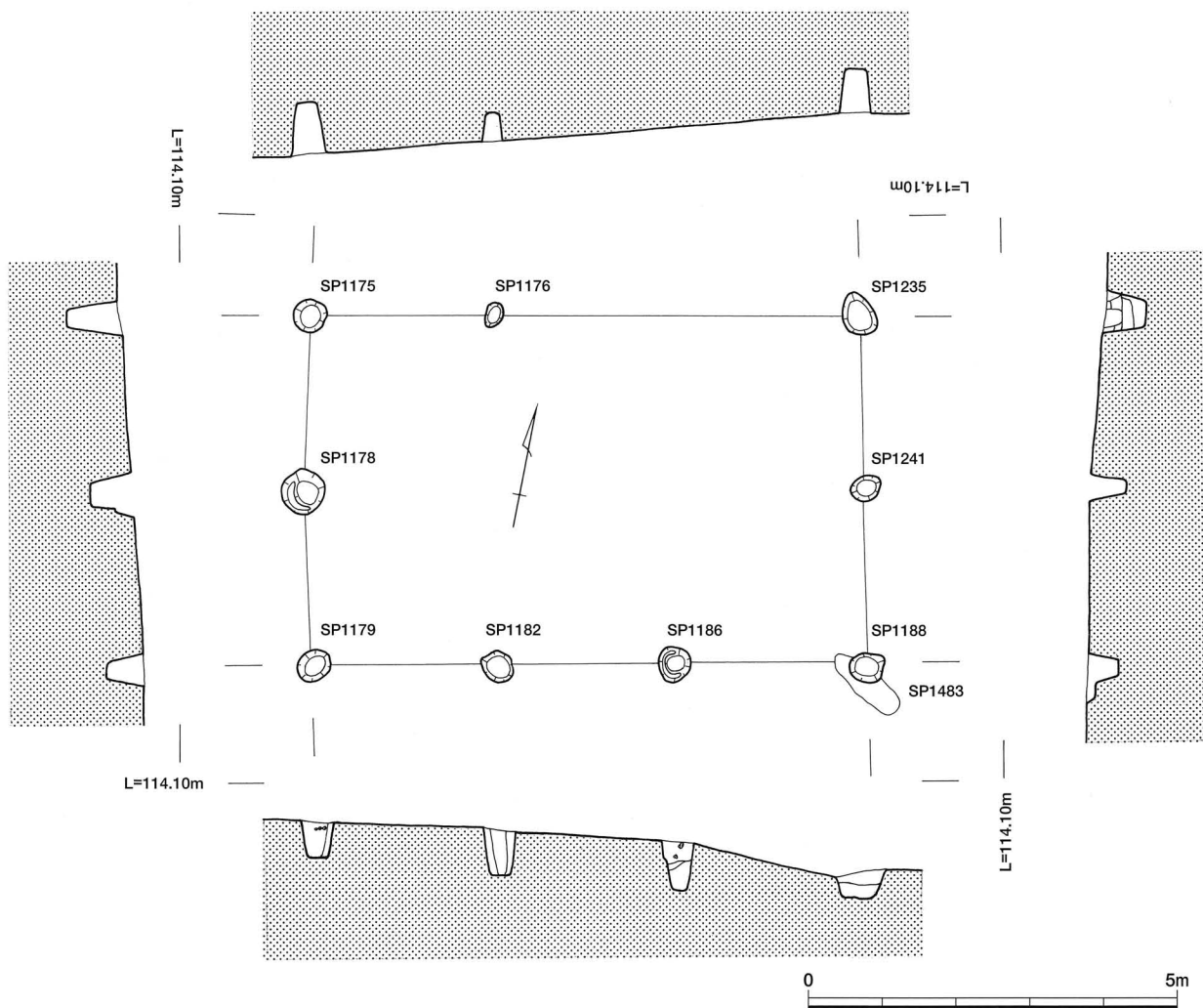
### 7号掘立柱建物跡（SA1007）（第97～101図）

3区の屋敷地1のほぼ中央からやや北西側に位置する。検出グリッドはT・U-23・24グリッドである。南西から北東に向けての緩やかな下り傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行3間×梁間2間を測る側柱式である。主軸はN-79°-Eを向き、SA1001、1005、1006、1008～1012とほぼ同方向を示し、SA1005、1006、1008、1009と軒を並べて建ち建物群を構成する。当該建物は、この建物群のなかで北西に位置している。南東角の柱穴がSP1483を切る。柱間距離は桁行側では平均値で250.0cm、梁間で239.0cmを測り、床面積は35.85m<sup>2</sup>を測る。

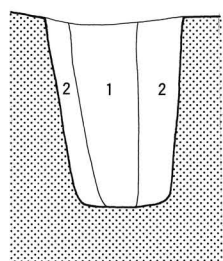
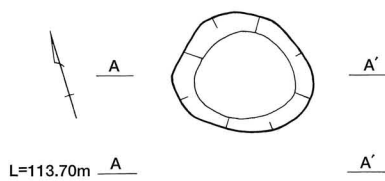
各柱穴の平面形状は円形を呈するものと楕円形を呈するものに限られる。遺構断面形状はいずれも逆台形を呈している。また、土層観察の結果、SP1182、1235において柱痕跡を確認した。

遺物はSP1182より2点、SP1186より3点の計5点を図化することができた。167、168は黒色土器の杯である。両者とも底部のみの残存であるが、内面はヨコ方向のヘラミガキが施され、底部は回転ヘラ切りによる切り離しのちに低い高台を貼付している。169は土師器の杯である。回転ナデによる成形であり、直線的に立ち上がる。口縁端部は薄くかつ丸みをもっておさめる。170は土師器の皿である。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部は薄くかつ丸みをもっておさめる。171は黒色土器のA類椀である。内彎しながら立ち上がる胴部をもち、内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが施される。ヘラミガキは内外面とも比較的ストロークが短く、分割の仕方が明瞭ではない。





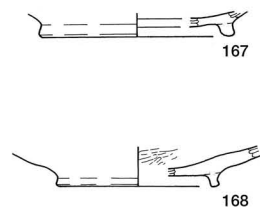
第97図 3区 SA1007遺構平・断面図



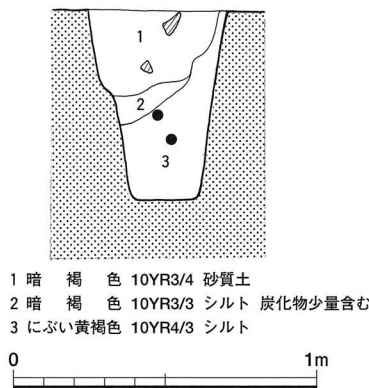
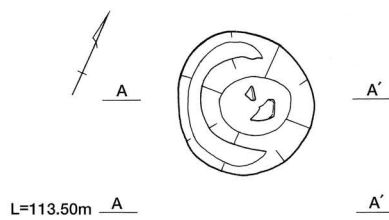
1 暗褐色 7.5YR3/4 シルト 炭少量含む  
2 暗褐色 10YR3/4 シルト



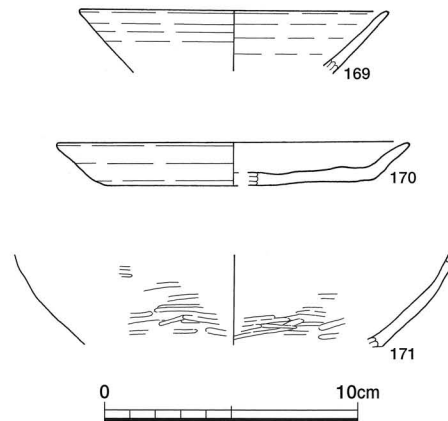
第98図 3区 SP1182遺構平・断面図



第99図 3区 SP1182出土遺物実測図



第100図 3区 SP1186遺構平・断面図



第101図 3区 SP1186出土遺物実測図

### 8号掘立柱建物跡 (SA1008) (第102~106図)

3区の屋敷地1のほぼ中央からやや南東よりに位置する。検出グリッドはS・T-25・26グリッドである。遺構の規模は桁行3間×梁間2間を測る側柱式で、南側の一面には半間幅の庇をもつ。主軸はN-80°-Eを向き、SA1001、1005~1007、1009~1012とほぼ同じ方向を示し、SA1005~1007、1009と軒を並べて建ち建物群を構成する。当該建物は、この建物群のなかで西側の南に位置している。南東側でSA1002、1003と重複する。北西角の柱穴がSP1108を切る。柱間距離は桁行側では平均値で330.0cm、梁間側で195.0cmを測り、北側の桁行が0.4m程短いため平面形は台形を呈する。床面積は38.61m<sup>2</sup>を測る。

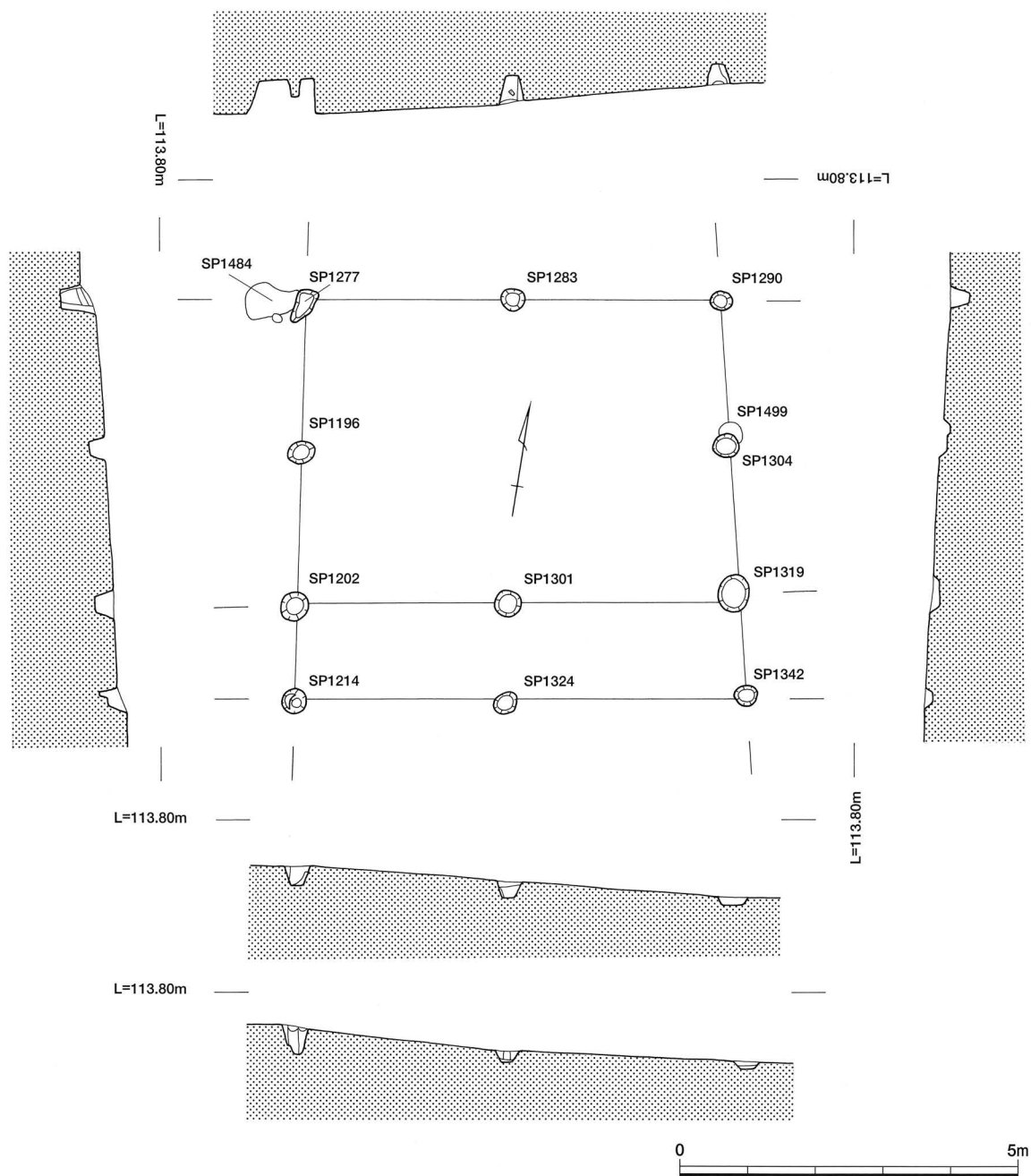
各柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈するものに限られる。遺構断面形状はいずれも逆台形を呈する。また、土層観察の結果、SP1202、1277、1283において柱痕跡が確認できた。

遺物はSP1202より1点、SP1290より1点の計2点を図化することができた。172は須恵器の甕である。体部片であり、外面にはタタキをもつ。内面はナデている。173は土師器の杯である。底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。

遺構の時期は12世紀末~13世紀初頭頃と思われる。

### 9号掘立柱建物跡 (SA1009) (第107~113図)

3区の屋敷地1の北東側に位置する。検出グリッドはT・U-24~26グリッドである。遺構の規模は桁行3間×梁間2間を測る側柱式である。主軸はN-80°-Eを向き、SA1001、1005~1008、1010~1012とほぼ同じ方向を示し、SA1005~1008と軒を並べて建ち、建物群を構成する。当該建物は、この建物群のなかで北東に位置している。建物の北側はSA1004と重複し、また南西角の柱穴がSX1002を切る。柱間距離は桁行側では平均値で226.0cm、梁間では

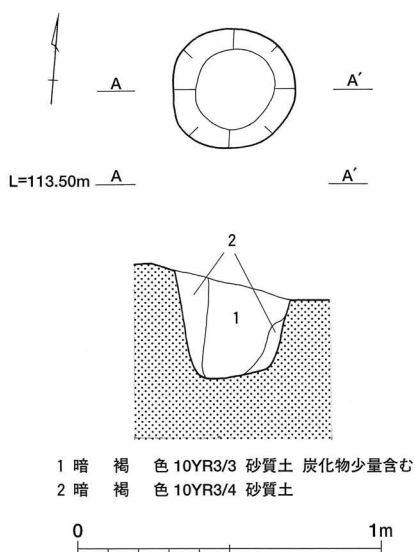


第102図 3区 SA1008遺構平・断面図

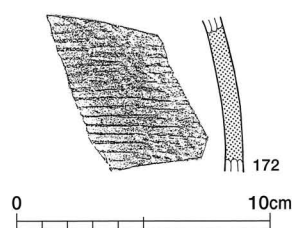
243.0cmを測り、床面積は32.95m<sup>2</sup>を測る。

各柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈するものが多く、遺構断面形状はいずれも逆台形を呈している。また、土層観察の結果、柱痕跡や抜き取りを示す痕跡などは確認できなかった。

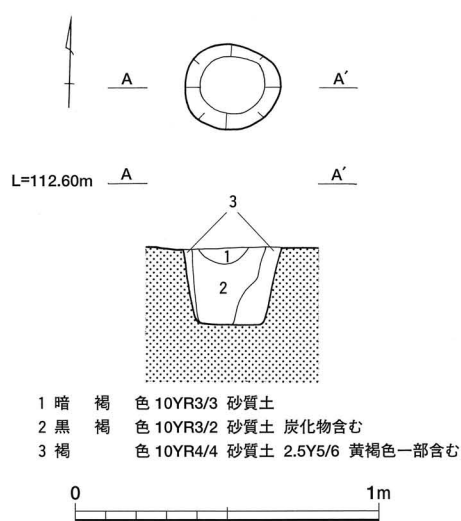
遺物はSP1242より4点、SP1270より1点、SP1274より5点の計10点出土している。174、175は黒色土器のA類碗である。176、177は管状土錘である。177の図中上側端部は縄ずれと思われる軽い欠損があることから、軽度の使用があった可能性がある。178は須恵器の杯である。底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。179、180は土師器の杯である。いずれも底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。181は土師器の碗である。大きく直線的に開く口縁部をもち、口縁端部はやや尖り気味におさめる。高台は「ハ」の字状に開き、断面は三角形を呈する。182は土師器の皿である。器壁は



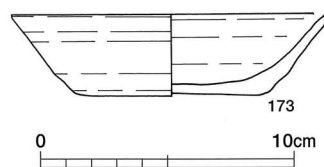
第103図 3区 SP1202遺構平・断面図



第104図 3区 SP1202出土遺物実測図



第105図 3区 SP1290遺構平・断面図



第106図 3区 SP1290出土遺物実測図

やや厚く、口縁端部はまるくおさめる。内面はヨコ方向のヘラミガキで仕上げられている。183は須恵器の杯である。底部から屈曲し大きく開く立ち上がりをもち、口縁端部は薄く、かつまるくおさめる。底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。

遺構の時期は12世紀後半頃と思われる。

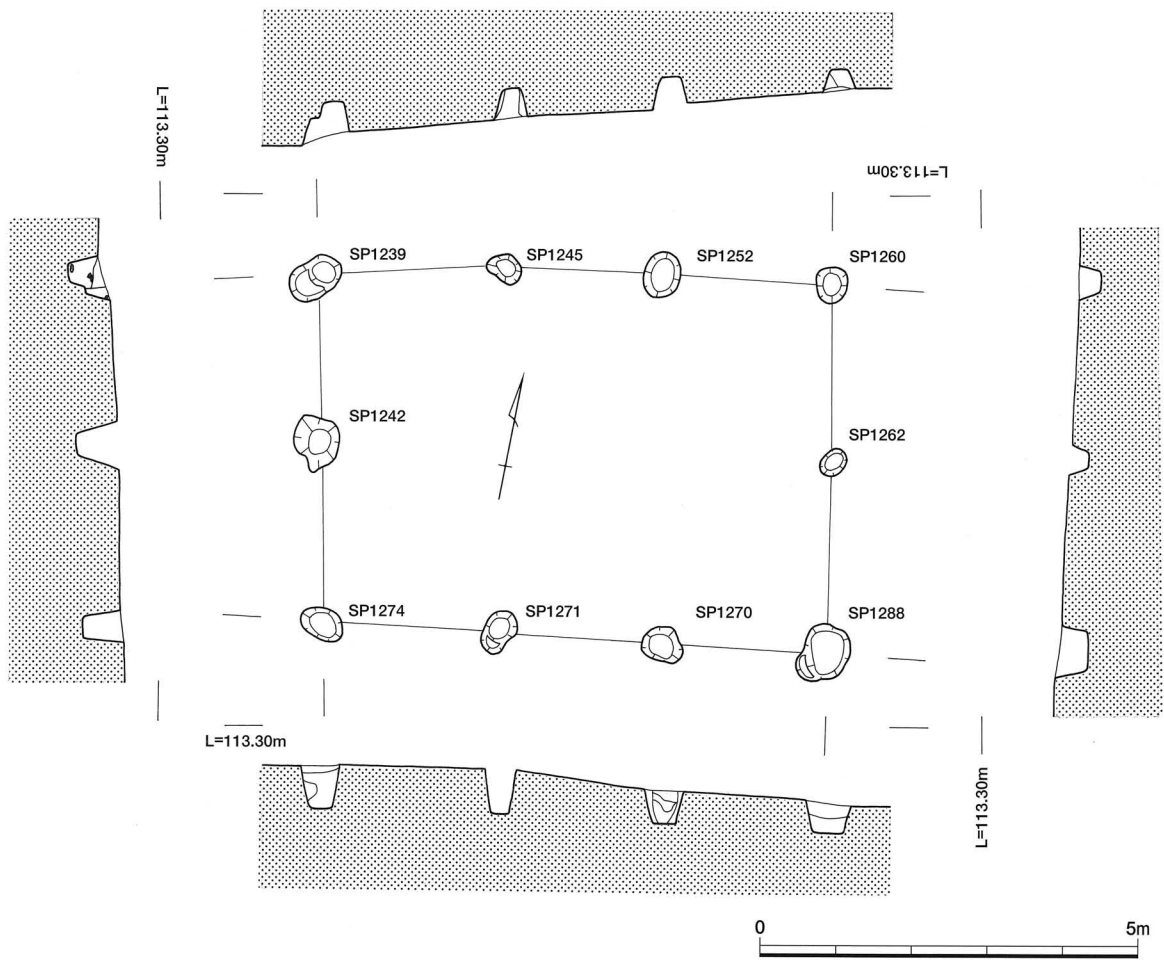
#### 10号掘立柱建物跡 (SA1010) (第114図)

3区の屋敷地2の西側に位置する。検出グリッドはV・W-28・29グリッドである。遺構の規模は桁行2間×梁間2間を測る側柱式である。主軸はN-81°-Eを向き、SA1001、1005~1009、1011、1012とほぼ同じ方向を示す。建物の東側はSA1011と重複する。柱間距離は桁行側では平均値で345.0cm、梁間側では240.0cmを測り、床面積は33.12m<sup>2</sup>を測る。各柱穴の平面形状は円形を呈するものがほとんどだが、隅丸方形を呈するものがわずかにみられた。遺構断面形状はいずれも逆台形を呈する。また、土層観察の結果、SP1417において柱痕跡を確認した。根石などは確認できなかった。

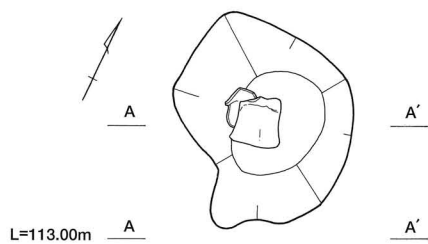
遺構に伴う遺物の出土はなかった。

#### 11号掘立柱建物跡 (SA1011) (第115図)

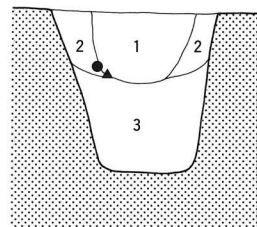
3区の屋敷地2の西側に位置する。検出グリッドはV・W-29・30グリッドである。遺構の規模は桁行2間×梁間1間を測る側柱式である。主軸はN-81°-Eを向き、SA1001、1005~1011



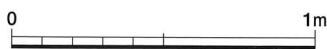
第107図 3区 SA1009遺構平・断面図



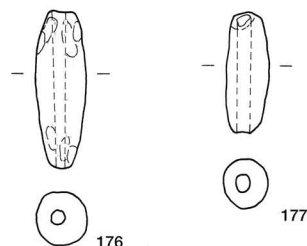
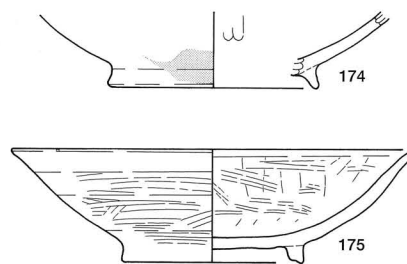
L=113.00m



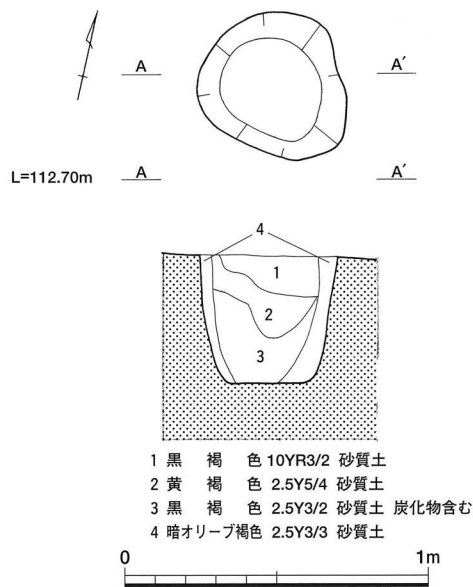
- 1 黒褐色 10YR2/3 シルト 炭化物特に多く含む
- 2 暗褐色 10YR3/3 シルト 炭化物①より少ないが含む
- 3 オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルト 小粒の炭少量含む



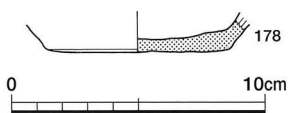
第108図 3区 SP1242遺構平・断面図



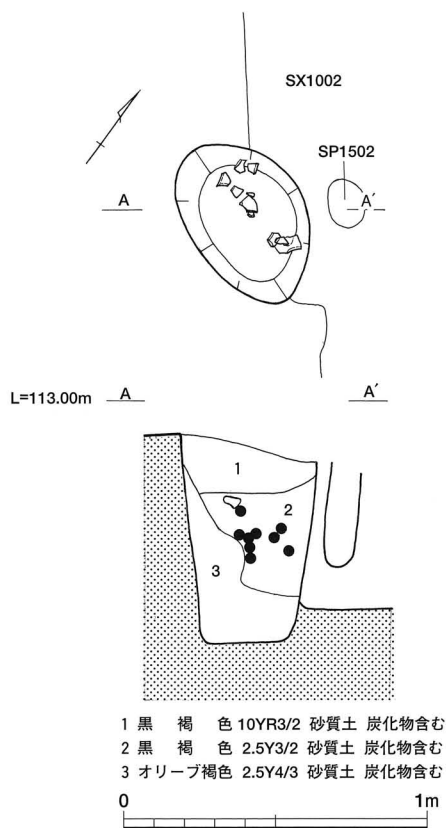
第109図 3区 SP1242出土遺物実測図



第110図 3区 SP1270遺構平・断面図



第111図 3区 SP1270出土遺物実測図



第112図 3区 SP1274遺構平・断面図

0、1012とほぼ同方向を示す。建物の西側はSA1010と重複する。柱間距離は桁行側では平均値で247.5cmを測り、ほぼ正方形に近い形状を呈する。床面積は24.26m<sup>2</sup>を測る。

各柱穴の平面形状は円形または楕円形を呈するものと隅丸方形を呈するものがみられた。遺構断面形状はいずれも逆台形を呈する。また、土層観察の結果、SP1416において柱痕跡を確認した。

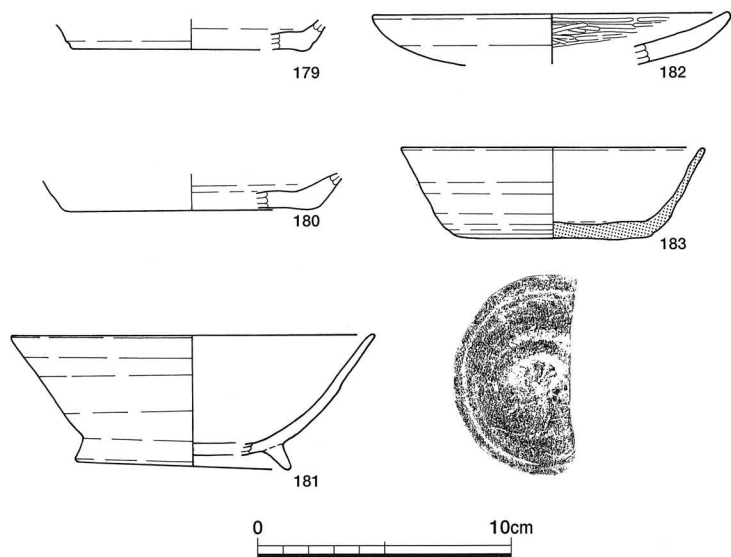
遺構に伴う遺物の出土はなかった。

### 12号掘立柱建物跡 (SA1012) (第116~118図)

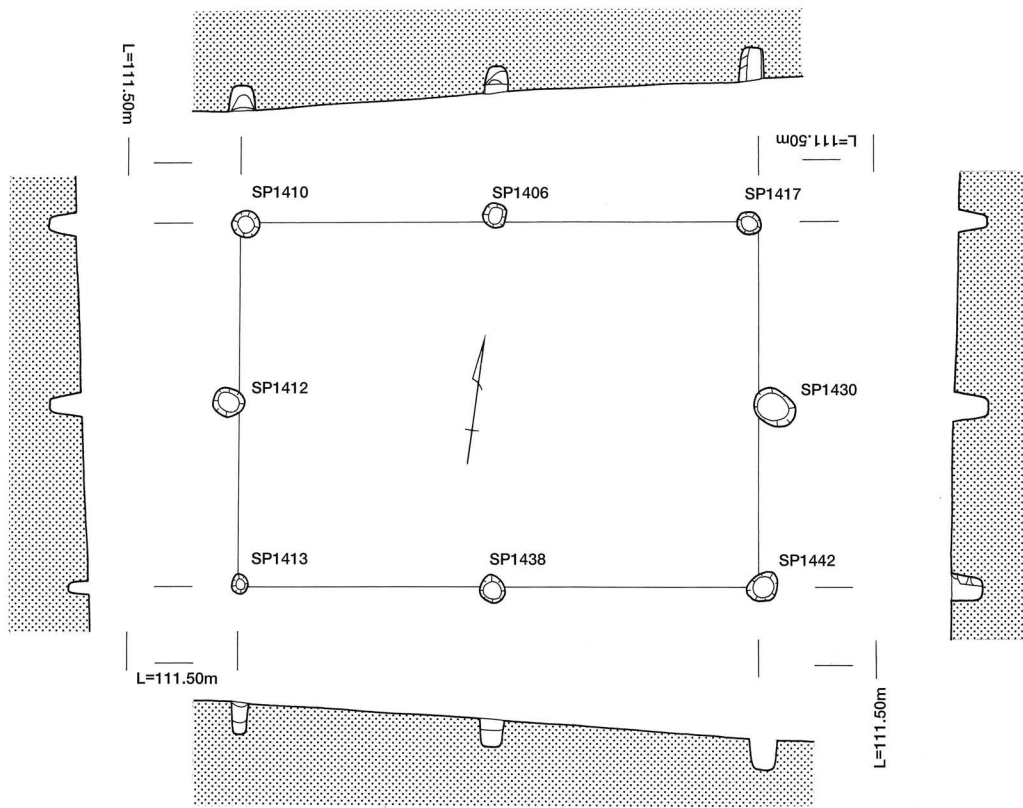
3区の北西側、自然流路の北側に位置する。検出グリッドはX・Y-21~23グリッドである。調査区南側の屋敷地1の建物群からは北西に約20m離れたところに位置する。遺構の規模は桁行3間×梁間1間を測る側柱式である。主軸はN-73°-Eを向き、若干のずれはあるもののSA1001、1005~1011とほぼ同じ方向を示す。柱間距離は桁行側では平均値で260.7cmを測り、床面積は33.39m<sup>2</sup>を測る。

各柱穴の平面形状は円形を呈し、遺構断面形状は逆台形を呈するがいずれも規模が小さいという特徴を持つ。また、土層観察の結果、柱痕跡や抜き取りを示す痕跡などは確認できなかった。

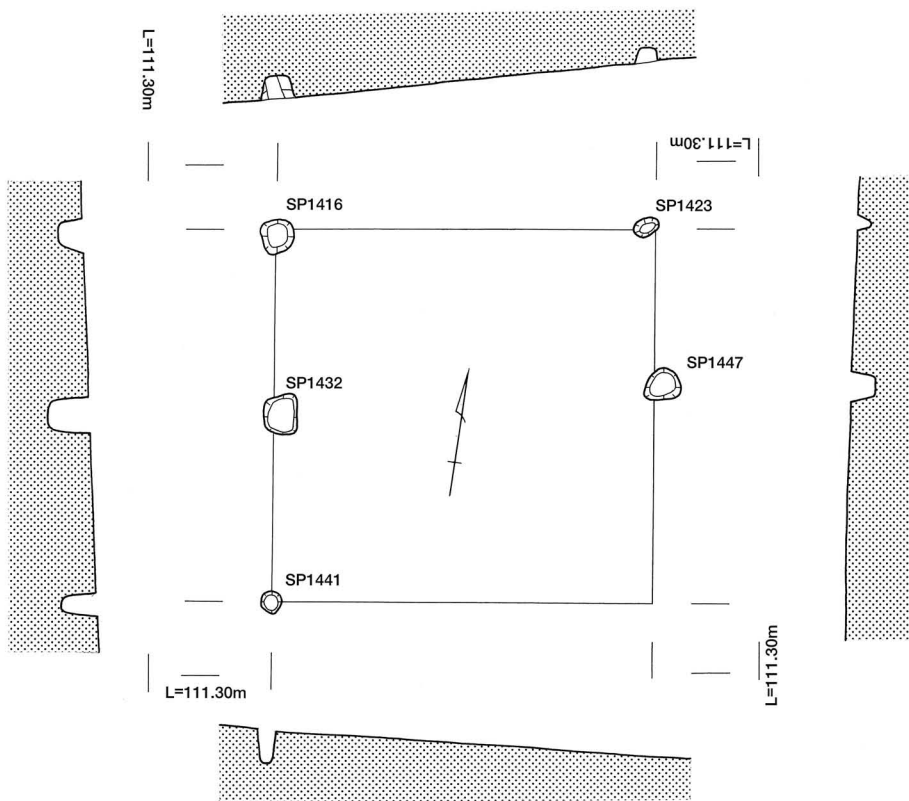
遺物は、SP1120より土師器の皿が1点出土してい



第113図 3区 SP1274出土遺物実測図



第114図 3区 SA1010遺構平・断面図



第115図 3区 SA1011遺構平・断面図

